ば神は、其欲する所の者を矜み、其欲する所の者を頑にすればなり」（ロマ九の十八）。けだし誰か神の面に抗し、或は其旨に逆はんや。神は或時には報謝なくして賜へども、或時には戰鬪と潔淨の後に於てもこゝにこれを與へ給はずして、之を藏するは、其所に於て直覺を惡はんが爲なり。然れども此賜に比すれば小なるものに關しても神はかくの如く處理し給ふを見ん、即罪を赦すこと是なり。げだし視よ洗禮は報謝なくして施し、信仰の外はすべて要求する所あらず、しかれども洗禮の後罪を悔改するときは、徒に之を赦さず、勞苦と憂愁と悲哀と傷心と流涕及び長時の涕泣を要求して、其後は最早赦す。盜賊をば十字架上一言の懺悔の爲に報謝なくして赦し、彼と共に天國に在らんことを約したりしも、罪婦よりは亦信仰と流涕とを要求せり。されども致命者と表信者とよりはその中心の信仰の外患難と拷問と鉋削と殘虐又は種々樣々なる患難をも要求せり。

故に汝の聖德よ、此等の事を堅く信じて、最初と最後とに注目せよ、直覺の時に非るに直覺を强て求むるなかれ。而して汝は肉體に包まるゝ間は悔改の行に勉勵し、誡命を行ふに忍耐する者となりて慾と戰ひ、魔鬼の罵詈を用心せよ、而して之と同く慾に輒く同意をなさしむる偏頗の世に於て易はらざる完全を宣言する者等を警戒すべし。此事は聖なる天使、父と聖神の役者等より尙高上にして彼等も中間者の新なるを待つは、敗壞の奴たるを免れて神の子の自由に入らん爲なり。げだしこゝに太陽が昇りて又雲中に入り、時に空氣の好成合あれども、時に旱魃あり、或時には喜あれども、或時には悲のある處に於て完全は有り得べきか。此に抗諍するは是れ狼の類なること或る聖者の言ひし如し。しかれども神は眞實なる制定と其聖なる教とを以て我等が生涯の基礎を確立せん。光榮と權柄と美麗は今並に無窮の世に彼に歸すべしアミシ。

第五十六　說教

神を愛する事、世を避くる事、及び神に於て安んずる事。

神を愛する事、神を愛する靈魂は己の爲に妄心を神に、神獨りに於て求むるなり。如何なる外部の關係をも先づ自から解くべし、其時は心を以て神と連合するを得ん、何となれば物

體と分離するは神と親與するに先だてばなり。麵麭は嬰兒が乳養せられし後食用として與へらる、かゝの如く神聖なる事に大に發達せんと企圖する人も先づ自から世より遠ざからんを欲すること嬰兒が母の懷と乳房より遠ざかる如くならん。身體上の働の心靈上の働に先だつは塵土のアダムに噓入られたる生氣に先たちし如し。身體上の働を求めざる者は心靈上の働をも有する能はず、何となれば後者の前者より生ずるは、麥穗の麥粒より生ずる如くなればなり。然して心靈上の働を有せざる者は靈神上の賜をも奪はるゝなり。

現世に於て眞理の爲に忍耐する苦痛は善の爲に苦む者に備へらるゝ樂とは比較にもなる可らず。涙を以て種く者は喜の禾把を伴ふ如く、神の爲に苦を受るは喜を伴ふ。汗を以て求めたる麵麭は農人の爲に甘からん、義の爲に爲しゝこともハリストスの知識を受けたる心に甘し。輕侮と貶黜とは善意を以て忍耐せよ、神の前に勇氣を有せん爲なり。人は如何なる無慙の言をも知識により忍耐して、此言を發せし者に自分は預め不義を爲さゞりし時は、たとひ此際己の頭上に荊冠を加へらるゝ雖も福なり、如何となれば自分は知らざるも不朽に榮冠を加へらるればなり。知識を以て虚榮を避くる者は其心に來世を感せん。世を棄てたり、と言ふも、或る需用の爲に人々と爭ひ己を安んぜんが爲に何等の缺る所もあらざらんとする者は全く盲なり、何となれば全身を自由に棄てたれども、一の肢體の爲に爭ひ戰へばなり。現生に安息を逃るゝ者の智は最早來世を探知せり。しかれども貪利に縛らるゝ者は慾の奴なり。金錢を求むる事をのみ貪利と思ふなかれ、何にても汝の意志の繫がるものを求むるは貪利なり。身體を以て苦めども官能に自由を與ふる者を賞讃するなかれ、即聞くと開て制し難き口と迷へる目是なり。靈魂に規則を命じ、慈悲を以て救を立てんとするときは、他の行爲により稱義を求めざらんことに靈魂を習はすべし、一の手を以て爲して他の手を以て濫費すと認められざらん爲なり、けだし彼處には憐の深きを要すれども、此處には心の廣きを要すればなり。然れども知るべし負を負ふ者に罪を免すは義の行爲に屬するを、其時は到る處に安靜と清明とを汝の心に認めん。義の路に入る時は凡ての行動に於て自由に就かん。

此事につきて或る聖者は次の如く言へり、曰く「慈悲者はもし正當ならざるときは盲なり、知るべし自己の盡力と勞とを以て得たるものより他に與ふべくして、詐僞と不義と狡猾とを以て得たるものよりすべからざることを。」彼は又他の處に於て次の如くいへり、曰く「貧者に撒かんと欲せば自分のものにより撒くべし。之に反し

てもし他人のものにより撒かんと欲するならば、これ最苦き窶なりと。予は之に加へて言はん、もし慈悲者は己の義よりも高く立たずんば彼は無慈悲なり即慈悲者は己のものにより人々に施すのみならず、他の人々より受る所の不義は喜んで忍耐して彼等を憐まん。施を以て義に勝つならば、其時加へらるゝものは義人等が受くる法下の冠には非ずして福音的完全者の福音的榮冠なり。げだし己の所有により貧者に與へ、裸者に衣せ、人を愛すること己の如くし、侮らず、罵らざる等の事は舊き律法も之を宣言せり、されど福音的攝理の完全は命ずること左の如し、曰く、凡そ汝に求むる者には與へ、汝の物を取る者には復之を促すなかれ〔ルカ六の三十。ゆゑに或る物品又は他の外部に屬するものを不正に奪はるゝを喜で忍耐するのみならず、生命をも兄弟の爲に犧牲となさんこと肝要なり。これ慈悲者なり、されどもたゞに施與を以て兄弟に慈悲をあらはす者は慈悲者にあらず。之に反して其兄弟を哀ましむるを見聞して心の燃ゆる者と兄弟の爲に頰を打たるゝや之に報ひて彼の心を哀ましむる程無恥の心を有たざる者も亦慈悲者なり。

儆醒の業を脩ぶべし、汝の靈に近く慰籍を見ん爲なり。默讀を練習せよ、汝の智が常に神の奇蹟に昇せられん爲なり。貧しきを忍耐すると其に之を愛せよ、其心を一に集中して高く飛ばざらしめん爲なり。廣き生活を嫌へよ、其思を援さず守らん爲なり。事の多端を制して獨り己の靈魂を慮れ、內部の安靜を濫費するより之を救はん爲なり。貞潔を愛せよ祈禱の時神の前に恥ざらん爲なり。其行に淨潔を求めよ、汝の靈魂が祈禱に於て照され死の記憶により汝の心に喜を點火せん爲なり。小なるものを戒めよ、大なるものに陷らざらん爲なり。汝の業務に怠慢なるなかれ、其友の間に立つ時恥ざらん爲なり。及び路の用意を爲さゞる者と認められ隨て友が汝を獨り途中に棄てざらん爲なり。其行爲を知識にて導くべし、凡ての進行に非難をうけざらん爲なり。其生活に自由を求めよ暴風雨より免れん爲なり。快樂に資くるものを以て己の自由を縛るなかれ僕の僕とならざらん爲なり。其衣る所は貧しきを愛せよ。汝に生ずる思を貶せん爲なり。燦爛を愛する者は讒逐なる思を得ること能はず、何となれば心は外部の狀態の如くに其の內部に印せらるればなり。

空談を愛して淨智を求むるを能くせし者ありや。人間の譽を捉へんを切に願ふて謙遜なる思を得たる者ありや。或は不節制にして肢體を弱めつゝ智の淨く心の讒遜なる者となり得る者ありや。智が五感に誘引せらるゝ時は彼等と其に禽獸の食

を食はん。然れども五感が智に誘引せらるゝ時は彼と共に天使の糧をうけん。
謙徳には節制ですべてに制限あることを伴ふ。然れども虚誇は淫行の従者にして驕傲の行なり。謙徳は恒久の自制により直覺に達し、心靈を貞潔にて飾らん。然れども虚誇は思慮の間断なき擾亂と動搖とにより遇ふ所のすべての者より不潔の財を集めて心を汚す。彼は又邪なる眼を以て物の自然を觀て耻づべき想像を心に充たす。然れども謙徳は勿に直覺を以て己を制限して之を得たる者を讃栄に喚起す。
世に休徴と奇蹟と異能を行ふ者を默識心通する者に比するなかれ。世に飢る者を飽かしめ、多くの民を神を拜するに歸せしめんよりは默想の無爲を愛せよ。己を卑の機繫より解くは奴隷を苦役より脱せしむるに愈れり。汝は三の成分の一致により復活せしむるよりも汝の靈魂と神との一致により汝の即體と靈と神とを和せしむるより愈れり。グリゴリイ言ふ「神の爲に神學を教ふるは善し、然れども人の爲に己を淨き者と爲すことは是なり」。熟達老練にして納なるは其智の顯鋒により教道を用の如く流すよりも汝の爲に益れり、其思を神聖なる事に喚起して、慾の爲に汝の靈中に伴れたるものを起すを慮るは死者を

異能を行ひ、死者を復活し、迷ひし者の反正の爲に勞して、大なる奇蹟を行ひ、其手により多くの者は神を識るに導かれしも、此すべての後他の人々を復活せしめたる自分は憎らしく嫌はしき慾に陷り、自己を殺して、其行の顯然とあらはるゝや、多くの人の爲にも誘惑となれば彼等は猶心の病に在りて、其靈魂の康健のことを慮らず、未だ自から薄弱を免れざるに他の人々の靈魂を救さんと此世の海に出發したれば、ゆゑに予が言ひし如く彼等は自己の靈魂の爲に神に望を失へり。五官の薄弱は慾を常に猛烈ならしむる火焰を迎へて之に堪ふる力あらざるなり、ゆゑに五官の爲に戒愼するは更に必要なり、即すべて婦人を見ざることゝ、安息に耽らざることゝ、金銀及び其他の物を求めざることゝ、他の人々を指揮せざることゝ、彼等に對して訴らざることゝ反論する技倆の汝に足らざるが爲に人々汝を不學者と假定するは、無耻の爲に智者の一人とするより愈るべし。謙遜の爲に貪しくなれ、無耻の爲に富むなかれ。汝と反對の教を持する者をば自己の德行の力を以て責めよ。言の說得を以てするなかれ。汝の口の溫恭と安靜とを以て悖逆者の無耻の口を閉ち、彼をして默せしむべし。
汝の素行の貴きを以て放肆者を責めよ、然して五官の耻なき者をば汝の目の節制

を以て責むべし。
其生涯の諸日汝は何處に至るとも、己を旅行者と認めよ、交際に恋なるにより生ずる害より救はれん爲なり。何れの時にも己を何も知らざる者と思ふべし、他の意見を自意の如く定めんを欲すとの疑察非難を避けん爲なり。口を以て常に祈禱せよ、然らば汝を惡言せざらん、何となれば惡言は惡言より生じ、祈禱は祈禱より生ずるによる。如何なる事に於ても己を以て敎ふるに足らざる者と思ふべし、然らば其すべての行爲は智者と認められん。自から理會せざることを人に傳ふるなかれ、汝己を辱しめざらん爲なり。汝の行爲を參照するにより、汝の僞のあらはれざらん爲なり。されどもし或る有益なることを人に告げんと欲するならば、敎へらるゝ者の樣子にて言ふべし、權と無恥とを以てせず、愼め自己を罪して、汝は彼より下きを示すべし。聽く所の者に謙遜の式を示し、彼等をして汝の言を傾聽して行爲に着手せしめん爲なり。さらば汝は彼等の眼中に尊ばれん。もし能くするならば此の如き場合には涙を以て言ふべし、自己にも汝に聽く者にも益を與へん爲なり。神の恩寵は汝と共にせん。
もし汝は神の恩寵を受けて、天命と有形造物の命運を觀察するを樂む、いはゆる知識の初等なるものを賜はりしならば、己を預備し、誹謗の靈に對して自から武裝せよ。さりながら武器を持たずして此方面に立つなかれ、恐らくは汝は埋伏して汝を誘惑する者により速に死せん。涙と不斷の禁食は汝の武器となるべし。異端者の敎を講ずるを自から戒愼せよ、何となればこは誹謗の靈を起して汝に敵せしむることを屢なこれ有ればなり。腹を滿たすときは神聖なるものゝ或る齟趣と旨意とを無恥に穿鑿するなかれ、恐らくは汝は悔ゆるあらん。汝に言ふ所のものを理會せよ、飽滿せる腹を以て神の奥義を讀るは能はざるものとす。神の照管のことに關する師父等の書を頻りに讀みて飽くを知らざるべし。何となれば彼等は智を神の造物と神の行爲に於ける大法を窺ふにみちびきて、自から之を堅め、其精徹を以て之を昭明なる思想を求むるに預備し、潔淨を以て神の造物を了解するに適せしむればなり。全世界に識らしむる爲に神の遍詔し給へる福音を讀むべし。萬姓諸族に於ける神の照管の力により路用を己れに得ん爲なり。及び汝の智は神の奇跡に潛心せん爲なり。此の如きの講讀は汝の目的と適合す。汝の講讀は何の爲にも攪されざる安靜を以てすべく、肉體のことを多く慮ると浮世の動亂とを免れて自由なるべし、すべての感觸より極て勝れる最美なる趣味を美なる了解により其靈底に感せん爲

なり、靈魂が自から此に恒なるにより之を感せん爲なり。練達なる人々の言は汝の爲に神の言を賣買する虛飾者の言とならざるべし、汝其生命の終に至る迄暗中に止まらずして、此等の言より生ずる利益を奪はれざらん爲、及び戰時には狼狽する者の如く動搖を示さずして、看々善を尋ねつゝ坑に陷らざらん爲なり。

汝は如何に徹底せんと欲すとも、汝の爲に內部に入りし證徵となるべきものは左の如くならん。向ふ所の目的を觀て其眞實を感ずる爲に恩寵が汝の目を開き始むる時は、汝の目は瞬間に涙の川を注ぎ始め、汝の瞼は其多きを以て洗はるゝことたゞ一回のみにあらざるべし。其時感覺の戰は鎭まりて汝の內部に收縮せん。もし誰か此に反對して汝を敎ふるならば信ずるなかれ。涙の外他の更に顯然たる證徵を身體に於て尋ぬるなかれ。されど智が受造物より一層高まる時は、其體にも涙あらざるべく、何等の感動も感觸もあらざるべし。

「汝は蜜を得るか、足る程に食へ、恐らくは食ひ過して之を吐出さん」箴言二十五の十六「靈魂の性は動かし易くして輕快なり、時により靈魂は突出しつゝ高く昇りて、其性よりも極て高きものを確知せんを渴望し、聖書を讀み諸物を觀察するに由て或は理會する所も往々之あらん、さりながら許されて己を其理會したる所のものと比較するならば、靈魂は其觀察の度に於て其知識の到達する所のものより下く且小なることあらはれん、ゆゑに其思念は恐懼と戰慄と畏怖の爲に襲はるゝこと、恰も其高上なる靈界の對象に觸るゝを敢てせしを自から耻ぢて再び己が虛しきに歸るを急がんとするものゝ如し。對象を以て暗示せらるゝ恐懼の故に何か畏るゝ念慮の靈中に惹起さるゝあらんに、理性は靈の智覺に暗號し、沈默を學びて耻ざる者とならしめん。滅亡を免れん爲なり、超絕するものを尋ねずして、靈魂より高上なるものを穿鑿せざらん爲なり。故に汝は理會し得べきことを與へらるゝときは理會せよ、無耻を以て奧義に觸るゝなかれ、叩拜せよ、讚榮せよ、默然として感謝せよ、蜜を多く食ふことの善からざる如く、神の言の穿鑿に耽るなかれ、恐らくは懸隔せる對象を視んを願ふや、未だ彼に近づかざるに、其路の不便の爲に衰弱して、汝の視力は傷はれん。けだし或時は眞實に代へて或る幻像を見ん。而して智も搜索の爲に煩悶するときは其目的を忘れん。此によりソロモンは「垣の無き壞れたる城の如し」箴言二十五の二十九と美妙に言へり、忍耐なき人も實に此の如し。故に人は其靈魂を淨むべく、汝の性の外にあるものゝ爲の配慮を自から拋擲して、其概念と感動に貞潔と謙遜の幕を掛けよ、さらば此によりて汝は天性の內部にあるものを發見せん、

何となれば奥義の啓示は誰彼なる者に與へらるればなり。

もし汝は其靈魂を祈禱の行爲に專にして智を淨め、夜間の儆醒を守りて、光明なる智慧を得んと欲せば、世の觀玩に遠ざかり、人々と面會するを絶つべし、たとひ有益に托すとも、汝と同性情同思想にして汝と共に奥義を談ずる者の外は、風習に依り友を己の庵に受るなかれ、外的談話を斷絶し、解除して、之を全く廢したるが爲常に心ならずして惹起さるゝ心的談話の混合を恐れよ。汝の祈禱に施濟を結付けよ、さらば汝の靈は眞實の光を觀んげだし心が外物に援ざるゝことの止むに隨ひ、智は神聖なる思想と行爲とを理會するにより、通曉と驚愕とに達するを得るなり。げだし少しく勉勵するならば、人間の集會を神と對談するの言とに換へ、一の談話を他の談話に換へんと欲せば、直覺の機微なる路を汝に啓示する聖書と諸聖人の傳とを學ぶべし、たゞ最初は近きを暗ます物の爲に愉快を感せずといへども之を學ぶべし。

祈禱に立つて其規則を行ふときは、世に見聞したるものを思ふに代へて其通讀したる神の書を思ふことを得べく、此思により浮世の事に就て記憶せし所のものを忘るゝに至るべし、かくの如くして智は潔淨に達せん。讀經は祈禱に立つとき靈魂に助けんと曾されしも、靈魂は讀經により祈禱を以て照明せられんと曾されしも此の謂なり。而して讀經は外的混合に代へて祈禱の各種類に棚を給するなり。ゆゑに靈魂は讀經を以て照明せられて怠らず、援されずして常に祈禱せん。

靈的對象を研究するは肉體を愛する者と腹を喜ばす者との爲には不適當なること、恰も眞潔の事を談ずるは淫婦に不適當なるが如し。極めて薄弱なる體は膏粱なる食物を厭ひ、且は之に堪へざらん。浮世のことに占領せられたる智は神聖なる事の研究に近づく能はず。水は濕りたる薪に燃付かざらん、神聖なる熱愛も安佚を愛する者の必に燃付かざるなり。淫婦は一人に情誼を守らず、多くの事に絆さるゝ靈魂も神聖なる敎訓に忠なるものとなりて存せず。自己の目を以て太陽を見ざる人はたゞ之を聞くのみにて、其光に觸れざるにより、人に其光を說明する能はざるべし、靈神上の行の美を心を以て味へざる者も此の如し。

日中の需要の爲に餘有る時は之を以て貧者に頒ち與へよ、而して行て勇氣にして祈禱を献げよ、即神と談話することを子の父と談話する如くせよ、施濟の如く心を神に近づくるものはあるべく、又任意なる貧の如く安靜を心に生ずるもの

もむらざらん。質朴の爲に衆人が汝を無智と名づくるは、名聲の爲に賢明と名づけ才能の完全なる者と名づくるより愈れり。もし誰か馬に坐し施をうけんとして汝に手を伸さば、否むなかれ、何となれば此時彼は貧しくして乞人の一なることは疑なければなり。然して與ふる時は大量と愛憐なる顏色とを以て與へ、請ふ所よりも多く給せよ。げだし言ふあり、汝の碎片を貧者の面前に投せよ。然らば多時ならずして報を得ん、傳道之書十一の一。當者を貧者より區別するなかれ、適當なる者を不適當なる者より辨別するなかれ、盡くの人は汝の爲に善なる行に因りて一樣なるべし、げだし此方法により不適當なる者をも善に誘引するを得べし。何となれば靈魂は有形上のものにより敬神に誘引せらるればなり。主が稅吏又は淫婦と食を共にして不適當なる者を斥けざりしも、此方法を以て不適當なる者を敬神に誘引せんが爲なり。又有形上に類り無形靈神上に近づかしめん爲なり。ゆゑに作善と尊敬とを以て悉くの人を平等視し、或は不信者たり、或は殺人者たるを問ふなかれ、嚮んや彼も汝の爲に兄弟たり、汝と同性にして誠りつゝ眞理を錯りしには非るをや。

人に善を爲すときは彼より報酬を待つなかれ、さらば彼の爲にも此の爲にも神は汝を賞賜せん。然して汝の爲に能くするときは善を爲すべく、未來の報酬の爲に爲すなかれ。もし極貧の親則を其心に課して神の恩寵により憂慮を免れ、極貧を以て世より高く立つならば、愼めよ、貧者を愛して施を爲さん爲に獲るを嗜むなかれ、一者より取りて他者に與へんが爲に其心を擾亂に投するなかれ。人々に從屬して己の尊敬を貶すなかれ、彼等に諂願して浮世の事を遽るが爲に其智の自由と尊貴とを失ふなかれ。何となれば汝の階段は慈惠者の階段より高ければなり。汝に願ふ、如何にしても從屬せざらんことを。慈惠は子を育つるに似たり、されど獸想は完全の娘なり。もし汝に財產あらば一時に之を散せよ。されど何物をも有せずんば、有せんことを願ふなかれ。己の庵を淨潔にして奢侈と數物とを去れ。何となれば汝の欲せざるに拘はらず、こは汝を節制にみちびくを餘儀なくせしむればなり。すべてのものに缺乏するは人に節制を敎へん爲なれども我等自から許して彼と此とを有するときは己を節制する能はざるべし。

外部の戰に勝利を得たる者は內部の戰を畏れざる勇氣を有せん、されば彼等を危催せしむるものは二としてあるなく、前後より來らんとする戰に彼等は動搖せざらん。知るべし戰とは感覺により及び不注意により必中に起る所の戰にして例へ

ば耳又舌により或は與へ或は取るときに起る所のものをいふ。是れ皆心中に入りて昏迷を生せん。ゆゑに外部の擾亂の至るに際し靈魂は心中に起る所の秘密なる戰に自から注意して、內部に蜂起するものに安靜を以て克つ能はざるべし。然れども人は其城門を閉づるとき、即感覺を閉づるときは、內部に戰ふべく、城外に惡を謀る者等を恐れざらん。

此を知りて默想を務め、事の多端を以て己を煩さずして、すべて身體の精力を祈禱の勞に向け、神の爲に勞して、日夜神のことに配慮する間は極めて緊要なるものにも乏しきを有せざるべしと確信する者は福なり。何となれば神の爲に放心より又勞よりも遠ざかればなり。しかれどももし誰か手工せずしては默想を務むる能はざるときは、手工を輔助とし用ひて働くべし、利益の爲に慾心よりするなかれ。手工は弱者の爲に課せらる。然れども最完全なる者の爲には彼は擾亂の因とならん。げだし貧者と怠慢者の爲に神父等は手工に從事すべきを定めたれども、緊要なる行としたるには非ず。

神が汝の心を深く內部に於て感動せしむる時は拜と跪とを斷えず行ふべし。もし魔鬼が汝を勸めて他の行爲に從事せしめんとするも、其心に何を慮るをも許すなかれ而して其時此により汝に生ずるものゝ如何なるを見て驚嘆せよ。もし誰か日夜祈禱してハリストスの十字架の前に己を捧ぐること面縛せられし者の如くならば、苦行者の戰に於てかくの如く重要にして且難きものは他に一もあらざるべく、又かくの如く魔鬼の猜忌を起すものもあらざるべし。其熱愛の冷ならずして涙の乏しからざらんを欲するか、此を練習せよ。人よ、予が汝に告ぐるものゝ爲に日夜慮りて他の何事をも願はずんば、汝は福なり。其時光は汝の內部に輝き汝の義は速に照し始めて、爛漫たる花園の如くなるべく、水に乏しからざる泉の如くなるべし。視よ、苦行により人に如何なる幸福の生ずるかを。人は祈禱に膝を屈め、手を天に擧げ、面はハリストスの十字架に向ひ、其悉くの思を一に纏めて神に祈るに集中すること屢々之あらん。而して人が涙と感動とを以て祈禱するや、其間に之と同時に忽焉として其心に樂みを注ぐ泉の沸騰するありて、其肢體は弱わり、目は閉ぢ、面は地に俯して、其所思は變化す。よりて人は其全身に惹起さるゝ歡喜の爲に叩拜を爲す能はざることあらん。人よ讀む所のものに注意せよ。けだし奮鬪せずんば獲る所あらざるべく、熱心に門を叩き、其側に不斷儆醒して止まらずんば、聽かれざるべし。默想を守るに堪へざる者の外誰か此を聞きて外部の義を欲する者ありや。されど

もし誰か默想を練習する能はずんば（はだし門の內部にあることは神の恩寵を以て人に與へらるればなり）他の路を棄つるなかれ、然らずんば生命の二の路に於て其一を失はん。外部の人がすべて世に屬するものゝ爲に死せず、たゞ罪の爲のみならず、すべて肉身的行爲の爲にも死せずして、之と同く內部の人も邪なる思の爲に死せず、肉體の自然の感動が弱りて、罪の甘美が心中に起らざるに至る迄は、神の神の甘美も人に起らざるべく、其肢體は此生命に於て潔淨を受けざるべく、神聖なる思は其靈中に入らずして、感じ得ざるものとなるべく、知得ざるものとなりて存せん。且人は天性の免る可らざる要求の外は生活の爲の慮を其心中に働かしめずして、之が爲の配慮を神に托するに至らざる間は靈的酩酊は人に起らずして、使徒が自から慰めたる（カラティヤ二の二十）慰安を知らざるべし。されど予が此事を言ひしは失望せしには非ず、もし誰か完全の最巓に達せずんば神の恩寵を賜はらずして神の慰安を迎へざらんといふには非ず。けだし人は不適宜なるものを輕んじ、之より全く遠ざかりて善に歸るならば、實に速に助を感せん。もし少しく盡力を用ふるならば、其靈魂の爲に慰安を見るべく、罪の赦しを捉ふべく、恩寵を賜はりて多くの幸福をうけん。さりながら彼は世を離れたる者の完全に比すれば、彼處に福樂の奧義を其靈中に發見してハリストスの來りし所以を理會すること更に鮮少なり。彼に光榮は兌及び聖神と共に今も何時も世々に歸す。「アミン」

第五十七　說教

世より遠ざかる事、及び凡て智を擾すものより遠ざかる事。

神は人々に二樣の學習を賜ふて、大なる尊敬をあらはし、救濟的認識に入らしめんが爲に其開せる門を何の處にも開き給へり。此事の儘實なる證者を汝は願ふか。己れに反り求めよ。彼は亡びざる如し。されど此を外部にも確知せんと欲するならば、汝は眞實の途に誤らずして引出す他の師と證者とを有するなり。

擾されし智は失念を免るゝあたはず。容智もかくの如き者の爲に其門を開かざるなり。衆人一般の終は如何なる平等に導くを確たる認識を以て理會するを能くする者は、浮世の事を棄つる爲に他の師に必要あらざるべし。元始に神を以て人に與へられたる天然の律法は神の造物を觀察する是なり。書に記されし律法は墮落の

後に加へられしなり。

慾の原因より自由に遠ざからざる者は心ならず罪に誘引せられん。罪の原因は左の如し。酒なり、女なり、富なり、肉體の强壯なり、さりながらこは其性質に於て罪なるにはあらず、天性が此等により罪なる慾に易すく傾くによる、故に人は注意して此を戒愼すること肝要なり。もし己の弱きを常に記憶するならば戒愼の擴を破らざるべし。極貧は人々の醜とする所なり、然れども高慢なる靈魂と高超なる意氣とは殊に神に醜とせらる。富は人々に貴ばる、然れども謙遜なる靈魂は神の尊敬する所なり。

善なる活動に始を置かんと欲する時は、先づ汝に及ぶ所の誘惑の爲に自から備をなして、眞理に躊躇するなかるべし。けだし人が熱信を以て善なる生涯を始むるを見るや、種々の恐るべき誘惑を以て彼を迎へ、此により畏れて善意を冷ならしめ、神に悅ばるゝ行爲に近づくの切愛を全く有せざらしめんとするは敵の常なればなり。而して敵が此を爲すはかくの如きの力を有するによるに非ず(もし之を有するならば人は如何なる善をも爲すこと能はざるべし)義なるイオフに於て我等の確知する如く神が彼に許し給ふによる。ゆゑに德行に遣はさるゝ誘惑は勇氣に之を迎ふるの備をなして、其後活動を始めよ、之に反して誘惑を迎ふるの豫備をなさずんば德行の活動を自から禁止すべし。

神は善なる活動に於る補助者たることに疑を容るゝ人は、己の影を恐れ、充ちて豐なる時にも飢に疲れ、四圍の穩靜なる際にも暴風に滿たさるゝなり。之に反し神に依賴する者は、心は堅固にして、其尊敬すべきことはすべての人に明かに顯はれ、其賞讃は其敵の面前にあり。

神の誡は世のあらゆる財寶より高く上にあり。之を獲得せし者は自己の內部に神を見ん。神の照慮に常々安んずる者は神を家宰として得ん。神の旨を行ふに渴想する者は天使等を嚮導と爲さん。罪を懼るゝ者は恐ろしき進行を成して跌かざるべく、晦冥の時には己の前にも己の內にも光を見ん。罪を懼るゝ者の足を主は保護して、失脚する時には神の憐は先だゝん。己の破誡を小なりと思ふ者は以前より尙甚しく陷り、七倍の罰を獲はん。

謙遜を以て施を種け、さらば審判に於て憐を刈らん。汝は善を亡ぼせし程は新に之を得よ。汝は神に蜚虻を負債せり、蜚虻に代へて眞珠を汝より取らざらん。例へば汝は貞潔を亡へり、もし淫行に止まらば神は汝より施を受けざらん、何となれば汝は

誡を破りしにより肉體の聖なるを汝に要望すればなり。世の財產を棄てんと志して他の何物の爲に戰を爲すか。汝は植付けられしものを棄てゝ他物の爲に來り戰ふか。

聖エフレム言へり、收穫の時は冬服を以て炎熱に敵せざらんと。此の如く各々種く所のものを穫るなり。すべての病は之に相當なる藥を以て愈さるゝなり。汝は嫉妬に勝たれたるか、何故睡眠と圖ふに盡力するか。過は尙小にして熟せざる間に之を滅し、枝葉の蔓延して成熟するに先だつべし。瑕瑾は汝に小なりと見ゆるも油斷するなかれ、何となれば後來無慙なる命令者を得て其前に奔走すること囚奴の如くなるべきによる。最初慾に敵する者は速に彼を主宰せん。

侮を禦ぐ方法を手に有ちながら喜で之を忍耐するを得る者は、神を信ずるにより財藉を神よりうけん、又隱ひらるゝ寃罪を順良にして勘忍する者は、完全に達し、聖なる天使等も彼に勤かん。けだし他の如何なる德行もかくの如く高尙にして行ひ難きはあらず。

試みられて己の不變なるを見るに至る迄は、汝は己を有力なりと信ずるなかれ。かくの如くすべてに於て己を試むべし。正しき信仰を己に獲よ汝の敵を蹂躙せん爲なり。汝の才智に高ぶるなかれ汝の力に依賴するなかれ、恐らくは汝は天然の弱きに陷るを許されて、其時自己の墜墮により己の弱きを確知せん。己の知識に信任するなかれ、恐らくは敵は中間に入り狡猾を以て汝を捉へん。汝の舌を溫良ならしめよ、然らば汝は必ず汚辱に遇はざらん。愉快なる口を獲よ、然らば人は皆汝の友とならん。自己の事業を決して自分の言にて誇るなかれ、恐らくは羞を啓かん。人は何を以て誇るともすべてに於て神は人に變化するを許し給ふ。人の辱められて謙遜を學ばん爲なり。ゆゑに汝はすべてを神の預知に托し、此の生涯に或る不變なるものゝある如く信せざらんこと肝要なり。

かくの如く行動して不斷其目を神に擧げよ、何となれば神の庇蔭と照管は悉くの人を包容すればなり。然れども此照管は己を罪より淨めて、常に神を思ひ、神獨りを思ふ者の外には明に見えざるなり。然して神の爲に大なる試惑に入るときは、神の照管は特に彼等に顯はるゝなり。けだし其時は彼等神の照管を感知すること、恰も肉眼を以て見る如くなるべくして其各自に及ぶ所の試惑の度と源因とに準じて此の苦行者を勇氣に勵ますこと、たとへばイアコフ、イイススナティン、三人の童子ペトル及び其他の聖者に或る人間の狀態を以て現れて彼等を敬虔に勵まし且堅め

たる如くなるべし、しかれども汝は言はんこは斷理により神を以て聖者に與へられしものにて、彼等は獨り特別に此の如き異象を賜はりしなりと、然らば聖なる致命者等を以て汝の爲に勇氣の標準となせよ、彼等はしばしば多數相共に或は一個一個に、多くの場所に於て且は種々なる場所に於てハリストスの爲に審問し、彼等にあらはれたる力により鐵にて縛らるゝと人性の爲に堪ふる能はざる百般の苦みとを脆き體にて忍耐せり、けだし此の如き者等に聖なる天使等の顯然と現れたるは彼等神の爲にもろ〳〵の誘惑ともろ〳〵の患難を充分忍耐したるにより神の照管が豐かにあらはれて、彼等の剛勇を表はし、以て其敵を辱かしむる所以を彼等各人に確知せしめん爲なりけだしかくの如きの異象により諸聖人の堅く支ふる程は、諸敵も其忍耐に激成せられて益々猖狂に至りぬ。

世に知られざる苦行者及び遁世者に關しては何を首ばんを要するか、彼等は野を以て城市となし、天使等の里となし、又住所となせり、其行の齊整の爲に天使等は常に來り臨めり、而して獨り主宰の戰士としてのみ時により彼等は互に共に戰へり、彼等は總世野を愛しけるが、神を愛するにより山間巖窟又は地の深所を住居となせり、而して彼等が地に屬するものを愛し、天使に倣ふ者となれるや、聖なる天使其者も之が爲彼等に其狀をあらはして隱さゝることは當然にして、其悉くの願を充たし、時としては彼等にあらはれて如何に生活すべきを敎ふ、而して又或時には彼等が迷ひし所以を說明し、或時には聖者等自らも質問せり、是れ當然なり、或時には天使は路に迷ひし者等を敎へ、或時には誘惑に陷りし者等を救ひ、或時には圍らざる災害と恐ろしき危難の際に彼等を取り去りぬ、例へば蛇より救ひ、或は岩石、或は木片、或は投石の爲に危きより救ひし如し、或時にはもし敵が聖者を公然侵擊するときは顯然と彼等にあらはれて、彼等を助けんが爲に遣はされし所以を言ひ、而して彼等に勇敢大膽及び慰藉を增加へたり然れども他時には彼等を以て病を癒したれど、或時には其の苦みに罹れる聖者を自から癒し、或時には食はざるが爲に疲れし彼等の體に手を觸れ、或は言を以て超自然なる力を與へて彼等を堅めたり、然して或時には彼等に食物麵麭又は蔬菜をも供し、或は麵麭と共に他の或る食ふべきものをも供へ、而して或者には其死期を告げ、他者には其有樣をさへ示したりき、それ聖なる天使の我等に愛を表するに義人等の爲にすべて能ふべきの配慮を爲すとを多く計算せんを要するか、彼等が吾人の爲に配慮するは長兄弟の少者に於ける如し、手が此事を言ふは「主は凡て之を呼ぶ者に遲き」聖鉢

百四十四の十八）所以を人皆確知し、主の意を悅ばすことに己を献げ全心を以て其跡に隨ふ者等に於る主の照管の如何なるを見るを得しめん爲なり。

神の汝を照管するを信ずるか、何故汝は煩悶して、一時に屬するものと汝の肉體に要用なるものゝ爲に心を安んぜずして懸念するか。之に反して神の照管するを信せず、隨て汝に要用なるものを神以外に自から慮るか、汝は人類中最も憐むべきものなり。何の爲に活くるか否活きんとするか。汝の衰みを主に負はしめよ。彼は汝を養はん（聖詠五十四の二十三）「猝然なる恐懼を恐るゝなかれ（箴言三の二十五）」

一たび永遠に己を神に献げたる者は心を安んじて生命を送らん。無慾ならずんば靈魂は思慮の擾亂を免る能はざるべく、五感を沈默せしめずんば思に平安を感せざるなり。誘惑に入らずんば誰も心神の聰慧を得ざらん。勉強して讀むなくんば思念の機微を察せざるべし。思念の安靜なくんば智は神秘なる奧義に進まざるべし。信に依て望むなくんば靈魂は誘惑に對して勇敢なる能はざるべし。神の顯然たる保護を試知せずんば心は神に依賴する能はざらん。もし靈魂はハリストスの苦難を認識して之を味へずんばハリストスと親與するを得ざらん。

矢なる憐憫により、欠くべからざる需要の爲に己を殺す者を神の人と認むべし。けだし貧者を惠む者は神を得て己の後見と爲す。而てて神の爲に貧しくなりしものは乏しからざる寶を獲ん。

神は何物にも必要あらず、然れども人が神の像を安んぜしめて、神の爲に之を尊敬するを見る時は、樂まん。人あり、汝の所有するものを汝に請ふ時は、心に左の如く言ふなかれ「我が靈魂の爲に此を存置かん、此を以て自から安んぜん爲なり、彼の爲に要用なるものは他所より神は彼に與へん」といふなかれ。此の如き言は不義にして神を知らざる人には適せん。義にして善なる人は己の貴きを他に與へずして恩寵の時を事なくして經過するを許さゞるなり。貧窮して切迫する人は神より縮せられん、何となれば主は何人をも棄てざればなり。然るに汝は貧者を放逐して神より汝に與へられし尊きを離れ、神の恩寵を自から遠ざけんとす。故に與ふる時は喜んで次の如く言ふべし神よ。光榮は爾に歸す、安んぜしむべき者に遂ふことを予に賜へばなり」と。然れども與ふべきものを汝は一も所有せざる時は、殊に喜ぶべく、神に感謝して、左の如く言ふべし「我が神よ、汝に感謝す、汝は此の恩寵と尊敬とを予に與へ、即汝の名の爲に貧しくなるを予に與へ、病と貧とを以て汝の誡命の路に置かれたる患難を嘗むるを予に賜ふこと、此の路を進行せし汝の諸聖者の嘗めたる如く

せしによる」と。

衰弱するときは言ふべし「神により生命を嗣ぐべきものを以て神より試みらるゝを賜はりし者は福なり」と、けだし神は靈魂の康健の爲に病を遣はせばなり。聖者あり、左の如く言へり、曰く「予は認む、主の意に適して働かず、己が靈魂の救の爲に熱心に鬪はざる修道士は必ず誘惑に陷るを神より許さるゝなり、閑散なる者とならざらんが爲、及び多くの閑散により惡事に傾かざらんが爲なり」と。ゆゑに神が怠慢なる者と等閑なる者に誘惑を被らしむるは、彼等誘惑の事を思ひて無益なることを考へざらん爲なり。然して神を愛する者の爲に神の常に此く爲し給ふは、彼等を瞭解せしめ、智慧を增して、其旨を彼等に敎へん爲なり。ゆゑに彼等が衰弱して、此事の起れるは等閑と怠慢との爲なるを疑なく確知するに至る迄は神に祈願するも速に聞かれざるべし。けだし錄して言へり、曰く「我なんぢ等が手を伸ぶる時目をおほひ、汝等が多くの祈禱をなすときも聞くことをせじ」（イサイヤ一の十五）と、是れ他の人々に就ても言ひ得べしといへども、特に主の途を棄てたる者の爲に書されしなり。

さりながら神は大仁慈なりと言ふにも拘はらず誘惑に於て常に叩き且求むるときは聽かれざるのみならず、却て我等が願を輕んずるは何故か。けだし預言者は此事を我等に敎へて言へり、主の手は惠を垂るゝ爲に小ならず、主は聞く爲に耳を重くせず、却て我等が罪はわれを彼と分離し、我等が不法は彼の面を背けて聞かざらしむと（イサイヤ五十九の一）。何の時も神を記憶せよ、さらば災難に陷るときは彼も汝を記憶せん。

汝の性は慾を受け易きものとなり、現世には試惑多く、惡は汝より遠ざからずして、汝の內部にも汝の足下にも橫溢す、立つ所の地位より下るなかれ。神が惠み給ふときは免るゝを得ん。目と瞼の相近きが如く、試惑も人々に近し、而して神が汝を益せん爲に睿智を以て之を預め設け給ひしは、汝常に彼の門を叩かん爲なり、患難の恐れによりて彼を念ふ記憶を汝の心に種込まん爲なり、汝祈禱に於て彼に近づき不斷彼を記憶して汝の心の聖にせられん爲なり。而して汝が祈願するときは汝に聽き給はん、さらば汝は汝を救ふ者の神なるを確知すべく、汝を造りて汝の爲に慮り、汝を守りて、汝の爲に二重の世界を造りし者を自覺せん、即一は一時の師たり敎誨師たるものを造り、他は父の家たり、永遠の嗣業たるものを造れる是なり。神が汝を造りて患難の近づき難き者となさゞりしは、汝も神の如くならんとの非望を起し、

最初は明星たりしも後來驕傲により、サタナ」となりし者の嗣ぎしものを同く嗣がざらん爲なり。然して之と同く汝を造りて遽せざる者となさず、移らざる者となさざりしは、汝不靈なる造物の性に似たる者とならざらん爲なり、汝に於て善なるものが汝の爲に無益なるものとなりて存することを無言者たる禽獸の天然の特質の如くならざらん爲なり。げだし汝に向つて此刺を研がれしにより、利益と感謝と謙遜の幾許生ずるかは何人にも易く了解し得ん、此に由て見れば我等は出來得る丈善に進みて惡を避くべき所以と、此より流れ出づるものは名譽も不名譽も我有とせらるゝ所以とは顯然たるなり。不名譽を以て辱しめらるゝ我等は畏る、然れども名譽を以て屢まさるゝ者は感謝を神に捧げて、德行に發展せん、神が此等の保育者を增し給ひしは、汝彼等を免れて自由になり、患難の近づき難き者となり、すべての畏懼より遠ざからずして、多神主義に陷るを免れん爲なり。例へば他の多くの者が汝と同く慾を有して汝と同樣の不幸に打たるゝに拘はらず、此世の瑣々たる權威或は有形の美の爲に瞬間にして多神主義に陷るのみならず、愚にして自己をも神と名づくるを敢てせし如くなるを免れん爲なり。ゆゑに神は汝に忠難に居るを許し給へり。

しかれども時として汝が遠離して神を怒らしめざらん爲にも、神が汝を罰に投じて汝を其顏より滅さゞらん爲にも、之を許すことあり。生活の安全と長るゝ所なきの故に生ずる所の不信及び其他の誹謗に關しては、是より先予が述べしものを敢て非難する者あらずんば、言はざるべし。神は苦みと慈とを以て汝の心に神を念ふ記憶を增し、反對者を恐るゝにより汝を神の仁慈の門に就かしめ、之より救ふを以て神を愛する心を汝の中に蒔付けたまへり。而して愛を汝に入れ、義子たる榮を以て神に近づかしめて、其恩寵の幾ばく豐富なるを汝にあらはせりげだし反對なる者が一も汝と會するあらずんば此の如き神の照管と善慮とを汝は何處より探知すべきか。故に神を愛する心は此により汝の靈中に大に增殖せらるべし。即神の賜を瞭解すると其照管の大に餘あるを記憶するとにより增殖せらるべし。此のすべての幸福が汝の爲に悲哀によりて生ぜらるゝは汝の感謝するを學ばん爲なり。終りに神を記憶せよ、神も汝を常に記憶せん爲なり。然して汝を記憶して汝を救ふときは彼よりすべての幸福をうけん。無益なる事に思を馳せて神を忘るゝなかれ、神も汝を其戰時に忘れざらん爲なり。己の富裕に於て神に從順なるべし、患難に於て神に對する熱心堅固なる祈禱を以て神の前に勇氣を有せん爲なり。

主を念ふ記憶を心に有して主の前に不斷己を潔くせよ、久しく彼を記憶せずして、彼に就く時勇氣を有せざる者とならざらん爲なり。げだし神の前に於ける勇氣は神と頻に對談すると多くの祈禱の結果なり。人々に交際すると之を續くるとは身體に賴る、然れども神と交通するは心中の記憶と祈禱に注意すると全燔祭とに賴る神を念ふ記憶を久しく守るにより靈魂は時として駭異と驚訝とに至ることあり。主を尋ぬる者の心は樂むべし、諺を受る者は主を尋ぬべし、さらば望を以て確立せん、悔改を以て彼の顏を尋ぬべし、〔聖詠百四の三、四〕さらば其顏の聖なるを以て聖にせられて、其罪より淨められん。凡て罪ある者は主に趨り就けよ、彼は罪を赦して其過を輕んせんげだし彼は豫言者を以て誓つていへり、曰く「主言ふ我れ生く、罪人の死を欲せず轉じて生きんを欲す」〔イエセキエリ三十三の十一〕又言ふ「順はずして悖れる民に終日我が手を伸して招けり」〔イサイヤ六十五の二〕又言ふ「イズライリの全家を憐む」〔イエゼキエリ三十九の廿五〕我に歸れ、我亦汝等にかへらん」〔マラヒヤ三の七〕又言ふ「罪人が其途を棄てゝ主に歸り法律と公義とを行ふ日には、彼の不法を記憶せず、乃ち生きて死せざらんと、主はいひ給ふ。而してもし義人は其義を棄て、罪を犯し、不義を爲さば彼の義を記憶せず、却て顚覆を其前に置かん、されば彼は其行に止まりて暗中に死せん」〔イエゼキエリ十八の二十一―二十四〕是れ何故なるか、げだし罪人は主に歸る日には其罪に跌かざるべけれど、義人はもし如此の罪に止まるならば、其義は彼を罪を行ふの日に救ばざるによる。然して神はイエレミヤに左の如く告げていへり、曰く「汝巻物を取り我が汝に語りし日、即ちイウデヤの王イオシヤの日より今日に至るまでを之に錄せよ、我が汝に語りし如く此民に降さんとするすべての災を聽き、恐れておのゝ〳〵其惡しき途を離れ轉じて悔改せん、さらば我其罪を赦すべし」〔イエレミヤ三十六の二、三〕又容智者も言へり「己の罪を掩ふ者は一も益する所あらず、されど己の罪を認めて之を背棄する者は神より矜恤を蒙らん」と、〔箴言二十八の十三〕またイサイヤも言へり曰く「主を尋ねよ、尋ねて彼を呼べよ、近づきて罪人は其途を離れ不義なる人は其思を棄て而して我に歸れよ、然らば汝等を矜まん。げだし我が思ひは汝等の思の如くならず、我が途は汝等の途の如くならずサイヤ五十五の六、八」もし我に聽き遵はゞ地の美なる者を食はん」〔イサイヤ一の十九〕我に來りて我に遵ふべし、然らば汝等の靈は生きん。主の途を守りて主の旨を行ふ時は主に依賴して彼を呼ぶべし、我呼ぶときは我こゝにありといはん」〔イサイヤ五十八の九〕

誘惑が不義者を襲ふや、彼は神を呼んで其救を待つの希望を有せず、何となれば其の安寧の日に神の旨より遠ざかりしによる。戰を始むる先に助を己れに尋ねよ、疾病の先に醫を捜せよ、患難が汝に來る先に神に祈れ、さらば不幸の時神を尋ねて神は汝に聽き給はん。失脚する先に呼んで願ふべし、祈禱せんごして立つ先に誓約を用意せよ、即此處より旅立することの用意せよ。ノイの方舟は平安の時に預備せられて其木は百年の前に仕上げられたり、されば怒の時不義者は亡びたれど義人の爲に舟は庇護となりぬ。

不義なる口は祈禱の爲に塞がらん、何となれば良心の責めは人を勇氣を有せざるものと爲せばなり。善良なる心は祈禱に於て喜んで涙を流す。世が死する所の者は喜んで侮を忍耐すれごも、世が生くる所の者は侮を忍耐する能はず、却て虛誇の爲に動かされて怒を發し無智なる激動により擾亂し、或は悲哀に圍まれん。此の如き德行に進歩するは如何に難くして神より如何なる榮を受くるや。此の德行に進歩する者、即侮を忍耐し大量ならんを欲する者は、親族に遠ざかりて旅行者とならんごと要用なり。何となれば本國に於ては此德行に進歩する能はざればなり。親族の中に在りて苦難を忍耐するは一の大なる有力者に適すべく、此世が死する所の者のみ此を能くせん、何となれば彼はすべて現在の慰めに望を絕てばなり。

恩寵は讒遜に遠からざる如く、病の發作は驕傲に近し。主の眼は謙遜なる者に向ふ、彼等を樂ましめん爲なり。されど主の面は驕傲なる者に反す、彼等を謙遜ならしめん爲なり。謙遜は神より常に憐みを受く。之に反して不仁と小倥とは恐しき出來事と相會す。すべてに於て衆人の前に己を卑うせよ、さらば此世の王の前に高められん。敬禮と叩拜を以てすべての人に先んせよ、さらばヲフィルの金を進獻する者よりも尊ばれん。

己を卑うせよ、然らば己れに神の榮を認めん。げだし謙遜の芽を出す處に神の榮は流るゝなり。もし汝はすべての人が汝を公然卑めんことを切に願ふならば、神は汝を頌揚せらるゝものとなさん。もし其心に謙遜を有するならば、神は其榮を汝の心に示さん。汝の大なるに於て侮り易き者となれ、されど汝の小なるに於て大なる者となるなかれ。輕侮に居るを力めよ、さらば神の名譽に滿たされん。內部に疵を滿たして、尊敬に居るを求むるなかれ。名譽を斥けよ、尊崇せられん爲なり。名譽を愛するなかれ名聲の汚れざらん爲なり。名譽に汲々たる者より名譽は前面に逃れん、され

ど名譽を避くる者に名譽は後より追及して衆人の爲に其讒遜の告示者とならん。

もし汝は尊崇せらるゝを免れん爲に自から己を輕んせば、神は汝を宣示せん、もし實に己を非難せば、神は悉くの造物に汝を頌讃するを命じ、汝の造成者の光榮の門は汝の前に開けて、汝を頌讃せん、何となれば汝には實に神の像と肖とあればなり。道德は光り輝けども人々には微々たる者として、あらはれ、生活は淡泊に知識は賢明にして、心神の謙遜なる者を誰か見たるかすべてに於て己を謙る者は福なり、何となれば高められんとすればなり。げだし神の爲にすべてに於て誰りて己を抑損する者は神を以て稱讃せられん。神の爲に飢ゑ渴く者に神は其幸福を滿たしめん。神の爲に裸體を忍ぶ者は神を以て不朽と光榮を衣せらるゝなり。神の爲に極貧となる者は神の眞實なる富を以て慰められん。神の爲に己を賤めよ、さらば汝の榮譽許增加するを識らざらん。畢生己を罪人と爲せ、さらば生涯の間汝は義とせらるゝ者とならん。己の賢明に於て無知となれ、無知にして賢明と見ゆるなかれ。謙遜は凡庸無學の人をも高うするならば、大にしてるか思ふべきなり。

虛誇を逃れよ、然らば稱讃せられん。驕傲を畏れよ、さらば高められん。虛誇は人の子に與へられず、尊大は婦の生む者に與へられず。もし汝はすべて浮世に屬するものを自由に棄つるならば、之を追ふ者を避けよ、貪慾なる者を避くること、貪慾其ものを避くる如くせよ。奢侈なる者に遠ざかること、奢侈其ものに遠ざかる如くせよ。放蕩なる者を避くること、放蕩其ものを避くる如くせよ。げだし此等の事は記憶するのみにても心を擾すならば、況んやかくのごとくの如き者等を看望し、彼等と時を送るに於てをや。義者と親近せよ、彼等により神に近づかん。謙遜を有する者と交際して彼等の品性に習へ、げだしかくの如き者等を看望するは益あるならば、況や彼等が口授の教に於てをや。

貧者を愛せよ、彼等により汝も憐を捉へん爲なり。好爭者と近接するなかれ、恐らくは汝も安靜の外に立つを餘儀なくせられん、病ある者特に極貧なる者より發する惡臭は嫌はず耐忍せよ、汝も肉體に包まるればなり。心に哀む者を賣むるなかれ、恐らくは彼等が杖は汝を打ち、汝は撫恤者を求むれども得ざらん。不具者を賤むなかれ、人皆同尊にして地獄に赴けばなり。罪人を愛すれども其行を憎め、罪ある者を其瑕瑾の爲に輕んずるなかれ、彼等の誘はれたるものを以て自分も同く誘はれざらん爲なり。汝も地の性を稟けし者なるを記憶して、衆人に善を作すべし。汝の祈禱を要求する者を斥くるなかれ、彼等を和ぐる慰藉の言を奏ふなかれ、恐くは彼等は亡

びて彼等の靈を汝より求められん。之に反して醫は嫉街の病を癒すに清涼劑を以てすれども、之と反對なるものをは溫煖なるものを以てするを記憶せよ。

人と面會する時は彼に其度に超て尊敬を表するに己を强ひよ。彼の手と足とを接吻し、大なる敬意を表して頻りに彼を抱き、彼を己の眼の上に擧げて、彼が有せざるものゝ爲にさへ彼を稱揚せよ。然して彼と別るゝ時は彼の爲にすべて善なることを言ひ、何にても尊敬すべきことを言ふべし。けだし此等の擧動を以て彼を善にみちびき、彼をして汝の待遇の厚き敬禮に自から恥るあらしめ、彼に德行の種子を種けばなり。汝が得たる此の如きの習慣により善なる象樣は汝に印せらるべく、自から高き謙遜を得て大なるものに易すく進歩せん。然のみならず汝の尊敬する者は何か缺點を有するあらば、汝のあらはせる尊敬により自から恥ぢて、汝より療方を易すく受けん。此習慣、即衆人に對して慇懃謹厚なる習慣を汝は常に有すべし。信仰の爲にも惡行の爲にも誰をも激するなかれ、誰をも憎むなかれ、誰を何に於てか非難し或は規責するを戒愼せよ。何となれば我等には公平無私なる審判者の天に在すあればなり。されども誰をか眞理に向はしめんと欲するならば、彼の爲に哀むべし、涙と愛とを以て彼に一二言言ふべし、然れども彼に怒を發するなかれ、さらば仇怨の徵候を汝の中に認めざらん、けだし愛は人を怒り或は激し、或は騷急に人を責むる能はざるなり。我等が主ハリストス、イイススの爲に善なる良心により生せらるゝ謙遜は愛と知識の表示とならん。彼に光榮と權柄は父及び聖神と共に今も何時も世々に歸す。アミン。

第五十八　說教

神は靈魂を益するが爲、慾に近接するを許す事、及び苦行的行爲の事。

或る罪事に陷るは人間の弱きを顯はす、何となれば神は靈魂を益するが爲、慾に近接するを許し、第二の重生の先に靈魂を慾より上に立つるを有益とし視ざればなり。靈魂の慾に近づき易きは良心を刺激するが爲に有益なり、然れども慾に留まるは傲慢なり、恥を知らざるなり。凡て聰明なる靈魂の神に近づくを得る方法三あり、或は信の熱切なり、或は畏懼なり、或は主の敎訓なり。もし此の三の方法の中其一が先だゝずんば誰も神の愛に近づく能はざるべし。

思想の錯亂は嗜甘より生ずる如く、心意の疑惑と熱中は饒舌と放談とより生ず。浮世の事を慮るは心靈を躁がし、其擾亂は安靜の心を攪し、且奪ふなり。常に何れの時にもすべて浮世の慮の外にあるは天に屬する業務に己を捧げたる修道士に適當なり、自己に沈潛して現世に屬するものを一も全く己れに見ざらん爲なりげだしすべてかくの如きものに用なき者とならば日夜引誘なくして主の法を學ぶを得ん。心意の淨からざる身體の勞は無結果なる腹又は枯れたる乳房と等しかるべし、何となれば神に屬する知識に近づく能はざればなり。彼等は身體を疲らせざるも心中に慾を絕つを慮らず、故に一も刈るあらざるなり。棘中に蒔く者は一も刈る能はざる如く、怨恨と貪慾を以て己を卑うする者は何事にも成功する能はずして、多くの不眠の爲、又は事の困難の爲に床上に呻吟せん。ゆゑに聖書は證して次の如く言り、我を行ひ、主の誡命の一をも棄てざる民の如く我に義と眞實とを求め、我(神)に近づかんを欲す。彼等は言ふ「我等禁食するに汝見ざるか、我等己を謙るに汝知らざるは何ぞやと、汝等の禁食の日には汝等の旨を行ふ」(イサイヤ五十八の二三)即汝等の惡しき思念を行ひて、之を燔祭の如く偶像に供へ、汝等の自から認めて神とする奇怪なる想像に供へ、すべての蕩物中最貴重にして汝等の善良なる行と

清潔なる良心により我に捧ぐべき所の自己の體を彼等に献せんとすと。

美田は百倍の果を產して其當事者を樂ましむ。もし靈魂は神の記憶と日夜眠らざる儆醒を以て光り始まらば、主は彼を其處に護せん爲に雲を起して蓋は彼を庇ひ、夜は日の如き光を以て照して、其光は暗中に燿かん。

雲の月光を遮る如く腹の蒸發は神の容智を靈中より逐出さん。枯れたる薪の火焰を增々大にするなり甘きを嗜む身體に神に屬する知識は住まず、其體を愛する者は神の恩寵を捉ふる能はざらん。產の苦みは所生を樂ましむる果を世に生ずる者と甘きを嗜む者には恥の果を生ず、即神の奥義を識る知識を生ず、然れども怠惰なも主の爲に苦む身體を慮りて、常に其口の近きにあり。智恵と共に行はるゝ行爲を得るは價を付すべからざるなり。

其思は一切浮世の外にある者はすべての日を飢と渴とに送る者は哀哭者なり。世外に居り常に神に祈禱して、未來の幸福を捉へんとする者は修道士なり。修道士の富は哀哭の中に發見する慰藉と心

の密室に光り始むる信念とより起る喜なり。其思に一を他より區別せずして衆人を憐む者は憐憫者なり。肉體の配合の爲に汚されずして身を守るのみならず、獨居する時も自から己を恥づる者は貞潔者なり、もし貞潔を愛するならば讀經の練習と長き祈禱とを以て恥づべき思念を逐ふべし、其時は天然の引誘に向つて武器を有せん、されど之なくんば心に淨潔を見るあたはざるべし。もし慈悲者たらんを願はゝ先づすべてを輕んずるに己を習はすべし。恐くは智は此の重みに引誘せられて、其界限より脫せん。げだし慈悲の充ち滿てる完全は侮辱に堪へんと決心する者の忍耐により證せらるゝなり。讓遜の完全は無寶の誣告を喜んで忍耐するにあり。もし汝は寶に慈悲者ならば、汝に屬するものを他より不當に奪はるゝときも、內心に哀むなかれ。其損害を傍人に語るなかれ。汝を侮辱する者の爲に受くる損害の汝の慈悲に呑まるゝは、酒の酸味の水の多きに呑まるゝよりも甚し。汝を侮辱する者に報ゆるに善を以てして、慈悲の多きを證するは、福なるエリセイが彼を捕虜にせんと企てたる敵に行爲せし如くなるべし。げだし祈禱じて彼等を盲ならしむるや、之を以て如何なる力のあるを示したれど、彼等に食と飲とを與へて放釋するや、之を以て其慈悲の如何なるを證したりきサムイル後六の十三至二十三。

寶に讓遜の德ある者は侮辱せらるゝも心は擾されず、其侮辱せらるゝを自から保護する爲に何も言ふあらずして、讒言を受ること眞寶を受る如くし、其讒言せられたるを人々に信せしむるを力めずして、却て之が赦を請はん。げだし或者は放蕩ならざるも放蕩者の名を甘んじて己れに蒙り、他の者は姦淫に遠ざがりしも、姦淫者の名を忍受して、其犯さゞりし罪の結果を己れに負はんことを涙を以て證し、其靈魂が凡の淨潔と無玷とを以て飾らるゝや、其の爲さゞりし、不法の赦を泣て侮辱者に願ひたりき。然れども又或者は密に自から守る所の生活の卓絶なる規則を人々の頌讃せざらんがために、神聖なる鹽をこれに和し、其安靜の變せられざらんが爲に愚者の如くなる狀を爲し、其完全の高きに居り、聖なる天使等を有して其剛勇の宣言者となすに至れり。

汝は己を讓遜なりと思ふ。他は自から己を罪すれども、他に罪せらるゝ汝は之を耐忍せずして、己を讓遜の德ある者と宣言す。汝は讓遜の德あるや否を知らんと欲せば、此を以て己を試みよ、人々が汝を侮辱するとき汝は心を擾さゞるや否や之を以て試よ。

救世主が名づけて父に邸宅多しとの給へるは彼の方面に居る者の智の種々同じ

からざる程度を指していふ、即智の程度に循ひて樂む靈的恩賜の卓越と其差異とを言ふなり。げだし邸宅多しと名づけしは地位の等差に依るにはあらず、賜の等級に依りていふなり。たとへば各人は視力の淨潔と其感受性とに準じて物體の太陽を樂む如く、又光は分たれて多くの光を發するに非すといへども、一の燈火により一家に照る光耀の種々同じからざる如く、來世に於ても悉くの義人は一の方面に個々別々に分れ居るにはあらざれど、おの〳〵己の程度により、一の思想の太陽を以て照され、己の價値によりて喜びと樂みを己れに引誘すること恰も一の空氣によりて一の位置と寶座と觀場と其形狀とよりも引誘する如くなるべし。されば誰も其友の程度の高き卑きを見ざるべし、これ其友の優越なる恩寵と自分が之を失ふとを認むるや、其者の爲に哀みと憂の原因とならざらん爲なり。然り哀みも嘆息も無き處に此事はあざらるべし。之に反しおの〳〵己れに與へられたる恩寵に依り、己の程度によりて、內部に樂まんされば悉くの義人の外は一の觀場と一の方面とあるのみにて、此の二の階級の外他に中間の階級あるなし、即一の高き階級と他の下き階級あるのみにて、其中に應報の殊異多樣にして同じからざるあるなり。もし此は正しくんば實に正しく左の如く言ふより無思慮なる、否無智なるものあるや、言へらく「我が爲には地獄を逃れて足れり、天國に入らんことは慮らざるなり」と。げだし地獄を逃るゝは是即天國に入るの謂にして、之と同く天國を森はるゝは即地獄に入るの謂なればなり。聖書は我等に三の方位を示さず、如何に之を言ふか。人の子其榮を以て來らん時は綿羊を其右に、山羊を左に置かんといふ〔マトフィイ二十五の三十一、三十三〕群を呼びしは三に非ずして二なり、即一は右にして他は左にあるものなり。彼等が居る所を各區畫していへり、曰く「此等の者、即罪人は永遠の苦に往き義人等は永遠の生命に往く」といひ〔マトフィイ二十五の四十六〕日の如く輝かん」といふ〔マトフィイ十三の四十三〕又「東より西より來りて、アウラアムと共に天國に席座し、而して國の諸子は外の幽暗に逐はれん、彼處には哀哭と切齒とあらん」といふ〔マトフィイ八の十一、十二〕これ何等の火よりも恐ろしきなり。ゆゑに上なる階級に反對の位置ありて、こは最苦しき地獄なることを汝は之により瞭解すべきにあらずや。

ゆゑに人々に神の仁慈を敎へ、神の照管の間斷あらざるを以て彼等を誘導し、迷より引出して、眞理の知識に入らしむるは最好の業なり。げだしハリストスに於ても使徒等に於ても其行爲の狀態は此の如くにして且最も高尙なりき。然ごもし人は

此の如き生活の狀態と人々と頻りに交際するに當りて存する所のものを顧みて自から良心の弱きを感じ、其安靜は擾され、知識は暗まされ、隨て其智は五官を誘して之を從はしむるの必要を更に有し、他を愈さんと欲して自己の健康を害し其意志の本來の自由を棄てゝ心を混亂せしむるならば、此の如き者は我等に勸むる使徒の言を記憶すべし、曰く「堅き食は成人の用ふる所なり」と〔エウレイ五の十四〕ゆゑに自から省みるべし、醫を以て述べ給へる言を主より聞かざらん爲なり、曰く「醫師よ己を醫せ」と〔ルカ四の二十三〕自から己を罪して己を康健に護るべし、さらば其善なる品行は其外部の言論の代となるべく、其行動は其口の聲に代りて敎ふべし、而して己が靈魂の康健なるを識るときは他を益すべく、自己の康健を以て彼等を醫すべし。げだし人々より遠ざかる時は、善行に熟心するを以て彼等に善を爲し得べくして、こは自から薄弱にして己を醫すの必要を彼等より多く有しつゝ言說を以て多少の善を爲すより愈れり、「若し瞽にして瞽を導かば二人ながら坑に陷らん」〔マトフェイ十五の十四〕堅き食物は敎訓せられたる官能を有して、如何なる食物にも堪へ得る健康者に適當なり、即すべての感觸の打擊に堪ふる者と完全に敎訓せられたるに因り如何なる事に遇ふも之が爲に心の惱みを知らざる者に適當なり。

魔鬼が邪侈なる記憶を以てかくの如き人々の智を汚さんと欲する時は、先づ虛誇を愛するを以て彼等の忍耐を試むべくして、此思想の初起は慾とは見えざるべし。其智を誘するによりて何等の不適當なる念頭をも直に挿入することの能はざる者等に對して、魔鬼は常に此の如く行爲するなり。然るに人を其城堡より奪ひ去りて、人が最初の思想と談話するを始め、此城堡より遠ざかる時は、魔鬼は淫行を想起せしむべきものを以て人を迎へ、其智を誘導して放蕩なる目的物に向はしむるなり。されば人は其突然の打擊により先づ心を擾されん、即是に先だちし思想の貞潔が如此の目的物と會し、之を仰望するにより、統治者たる智の遠ざかるにより擾されん。されば魔鬼は人を全くは汚さゞるも、少なくも其以前の品位より貶せん。さりながらもし智は翻然回歸して、第二の思想の侵擊の因となるべき思想の第一の打擊に先んずるならば、其時は神の助により慾に易すく克つことを得べし。

慾を遠ざくるに道德の記憶を以てするは之に抵抗するより愈れり。何となれば慾が其範圍より突出して進み戰ふや、其像と肖とを智に印すればなり。此戰は思念を太く紊亂震撼せしめつゝ智力に對して大なる權を得ん。然れどももし予が既に述べたる第一の規則に循ひて行爲するならば、慾を逐ひし後其痕跡も心中にあらは

れざるべし。

身體の勞苦と神聖なる書を學ぶは清潔を護るべくして勞苦は希望と畏懼とを堅むるなり。而して人々に遠ざかると不斷の祈禱は希望と畏懼を心中に確立するなり。人は撫恤者を受るに至る迄は善の記憶を其思に印する爲に神聖なる書は人に要用にして、不斷の誦讀により善に向ふ志は人に新にせらるべく、而して其靈を罪惡の途の幾微より護せん、何となれば人は迷を遠ざけて靈を益する記憶を捕捉すべき神の能力を未だ受けずして、心の散亂により冷淡に近づけばなり。げだし人に作用する心靈の力に神の能力が降る時は聖書の法に代り神の誡命は心中に根を張るべくして、其時は奥密に神に學びて有形物體の助に必要あらざらん。何となれば心が物體により敎へらるゝ間は、直に之に伴ふに迷と忘とを以てすれども神を以て敎授せらるゝときは記憶は無害に守らるればなり。

善なる意思と善なる願意とあり、又惡なる意思と惡なる心情とあり。第一の級は靈中に生ずる感動にして恰も海中に起りて波を揚ぐる風に似たるあり。第二の級は支柱と根基なり。善の爲に應報あるは根基の堅きによる、意思の感動によるにはあらず。靈魂は變じ易き意思の感動を以ては平安に導びかれざるべし。されど感動は心の深きに根基を有せざるに拘はらず、もし之が爲に各々應報を握せば汝の爲に或は幸福或は其と反對なるものの更迭すること日に幾千回なるを知らざらん。悔改により近頃慾の途より脫して、祈禱の時に當り地上物體の上に高まらんと盡力すれども能はず、反つて飛騰する力あらずして猶地の面に匍匐する智は是ぞ羽翼の未だ生えざる鳥なる。然れども讀經と練習と畏懼と德行の多きを慮るこの助を以て其思念を一に集中せん、何となれば此事の外何も能く知らざればなり。而して此は暫時の間智を汚されずして守らん、しかれども其後記憶が起りて心を擾し且汚さん、何となればたゞ長き間地に屬するものを忘るゝを以てのみ智を導き入るべき自由の平安なる空氣を人は未だ感知せざればなり、げだしこれたゞ有形的羽翼を得たるのみ、卽表面に行はるゝ道德を得たるのみにして、直覺的道德をば未だ見ず。又之を感ずるを賜はらざるなり、然れども此等のものは人が天に屬する者に近づきて地に屬するものより遠ざかる智の羽翼なりとす。

人が物體に屬するものを以て主に事ふる間は、此の物體に屬するものゝ狀態は人の思念に印せられて神妙なるものを人は有形的狀態に於て顯はす。されど人が內部に屬するものゝ感應を受る時は、其感應に準じて智も漸々に物の形象より上に

高まらん。

「主の目は心の讒遜なる者を顧み、其耳は彼等が祈禱を聆く」(聖詠三十三の十六)讒遜なる者の祈禱は口より耳に直に入る如し。汝の沈默の時に於て讒遜の善なる行爲により呼ぶべし、曰く「主我が神よ、汝は我が暗きを照し給へと。

汝の靈が暗を出づるに近づかんとする時は、視よ汝の爲に表徵となるべきものは左の如し。心は汝に燃ゆること火の晝夜燃ゆる如くなるべし、ゆゑに汝は全世界を糞土塵芥視し、汝の靈中に不斷惹起されて猶熱する新なる思想の甘味により食を欲せざらん。涙の泉は俄に汝に與へらるゝこと强ひずして流るゝ急流の如くなるべくして、汝のすべての行爲に混せん。即汝の讀經と汝の祈禱と汝の冥想の時に於てするか、或は食と飮とを爲すか、すべての行爲に於て涙の之と溶解融和するを認めらるゝなり。己の心中に此を發見する時は實に有望なり、何となれば故ある海を渡りたればなり、ゆゑに恩寵が日々に汝に增殖する程は其行に勉勵し子細に看守せよ。之に反して汝は此を己れに遇見せざる間は汝は未だ其途を終へずして、神の山に入らざるなり。然れども汝が涙の恩寵を發見して之を受けたる後涙は熄みて汝の熱切は他の何物にか變改するあるなく、即身體の薄弱あるなくして冷淡になるときは汝は禍なり、汝は或は自尊に或は怠慢に或は衰弱に陷りて何を滅したるかしかれども涙を受けし後之に隨つて生じ其後人に偶會するものは何なるか、此事は後に他の處に於てあらはさん、即かくの如き奥義を托せられたる神父等又は聖書により敎へられし如く照管の事の章に於て之をあらはさん。

躬行を有せずんば道德のことを言ふなかれ。主の爲及び主に因りて哀むは主の前に如何なる祈禱獻祭よりも貴重にして、其汗の臭氣は何等の芳香にも愈れり。身體の勞なくして成れるすべての德行は時の未だ至らずして精神の入らざる胎實と看做すべし。義人の奉納は其目の涙にして、神に受けらるゝ獻祭は不幸の時に於る歎息なり。義にして肉體の重きに苦められ、病に捧ぐ、されば其聲の叫びに應じて聖なる諸品は彼等に來り助け、其望を嘉みして、之を慰めん、何となれば聖なる使等は聖なる人々に親近して其苦みと哀みに關係を有てばなり。

善良なる練習と讒遜の德は人を地上に於る神となし信仰と施濟は人を助けて速に淨潔に近づかしむ。熱愛と心の悲嘆とは一の靈中にある能はず、これ猶大醉に於て意思を統御する能はざる如し。げだし此熱愛を靈魂に與へらるゝならば、涕泣と

悲嘆は直に其靈中より奪ひ去らるゝなり。酒は樂みの爲に與へられ、熱愛は心靈の喜の爲に與へらる。酒は身體を煖むれども神の言は心意を溫む。熱愛を以て燃ゆる者は望む所を沈思する爲に心を取去られて、其思を來世の爲に備へん。けだし酒に酩酊したる者は物の顚々倒々する形象を表現する如く、希望に醉ひ且煖められし者は患難も世に屬する如何なる事をも知らざるなり。正直の心を有して熱心なる希望を有する人々の爲には、其恒久なる練習の後淨潔を受るに依り、此のすべてのものと他の之に類するもの、即道德の路を進行する者の爲に備ふる所のものを生ず。而して此は行路の始めに心の信を以て成らん、けだし主は信心の望む所のものをすべて造り給へばなり。

患難の海の爲に、神を愛するにより、正直と好事的ならざる品性とを以て其腰に帶しめて、その背を向けざる者は福なり。彼等は速に天國の港に救はれ、善く勞せし者等が居る所に安せしめられ、其不幸の爲に慰藉をうけて、其希望の樂みに滿たさるゝなり。希望を以て彎曲の路に入る者は後に退却するあらず、推究穿鑿の爲に支へられざるべし。却て海を渡る時は路の彎曲を熟視しつゝ、己が知らざる間に海峽急流又はかくの如き海路の平坦ならざるより救はれし爲に感謝を神に献げん。しかれども多くの推理を爲し、大に智者たらんを願ひ、思想の遲疑と畏懼とに沈み、己を豫備して有害の源因を豫見せんと欲する者等は、往々常に自家の門に坐するものとなるなり。

路に遣はされたる惰者はいふ「徑に獅子あり路に盜賊あり」と〔箴言二十二の十四〕。これ「巨人の子を彼處に見て我等は其前に在りて蝗の如くなりき」〔民數記十三の三十三〕と言ひし者と相類す。是れ終焉の時に當り、尙途中にあらはるゝ者にして、彼等は常に智者とならんを願ひ、すべてに始を置くをも欲せざるなり。しかれども無學者は航路に出發しつゝ身體のことは少しも慮らず、又此勞により如何なる成功の有るか無きかも自から考へずして、最初の熱愛を以て渡らん。願くは智慧の餘りあるは汝の爲に靈魂の失脚とならず、汝の面前の網とならざらんことを、これに反して希望を神に托し、勇氣にして血のみちみてる途に始を置くべし、汝常に憫然にして神に屬する知識を奪はれし者とならざらん爲なり。臆病なるもの、「風を伺ふ者は種かず」〔傳道書十一の四〕。神の爲に死するは耻と怠慢を以て生くるに愈れり。神の事に始を置かんと欲する時は、先づ遺囑を爲して、最早此世に生存せざる人の如くすべく、死に豫備して現生に望を絕つ者の如くすべく、臨終の期に達したる者の如くす

べし。而して實に此事を意中に有せよ、此生命を長うせんとの望は智力を弱むればなり。故に如何しても無用に智慧付けらるゝなかれ、信仰の爲に其心に餘地を與へよ、後に殘る所の許多の日子と死後審判の後にあるべき思議すべからざる世とを記憶に存せよ、然らば衰弱は何の時にも來らざること容智者に來らざる如くなるべし、謂へらく今世の千年は義人の世に於ける一日にも比されざらんと（聖詠八十九の四）すべての善業を勇氣にして始めよ如此の業に二心を以て就くなかれ、汝の心を以て神に依賴するに逡巡するなかれ、恐らくは汝の勞は無益になり、汝の所爲は累となならん。之に反して主は仁慈にして主を尋ぬる者に恩寵を與ふると酬勞者の如くするは我等の所爲によるにあらずして、熱心と我等が靈の信仰とによるを汝の心に信ずべしげだし言ふあり、汝の信せし如く汝に成るべしと（マトフェイ八の十三）。

神により生存する者の所爲は左の如し、或者は終日地に頓首し、之を以て奉事を行ふに易ふ、即時課を行ふに易ふ。他者は祈禱の數を其績行する屈膝と常に相合す。又他者は涙の多きを自から神の奉事に換へ、之を以て滿足す。或る者は讀む所の旨趣を力めて推究し、之を以て其定められたる規則と相合す。他者は神の奉事を行ふ能はざる程飢ゑて其靈魂を疲らす。しかれども或る者は讀經に時を送り其心は之を以て援めらる。或る者は神の書の神妙なる旨趣を考へて、之が爲に捕へらる。或る者は句中に於て其感を打たるゝ奇蹟を以て驚かされ、尋常の如く讀むを中止して、沈默に占領せらる。他者は此のすべてを玩味し且之に歷候して後に戻り、動かざるもののとなりて存す。之に反して或る者はたゞ少許を玩味し、高慢して迷に陷りぬ。或る者の爲に規則を守るに妨ぐるものは重き病と薄弱となれども、他者の爲に妨ぐるものは或る習慣又は或る欲望、又は貪權、又は虛誇、又は貪欲、又は物體に屬するものを集むるに向ふ偏愛の克つて主となること是なり。或る者は躓けども更に起きて貴重の眞珠を得るに至る迄は其背を向けざりき。故に常に喜びと熱心とを以て神の事に始めを置くべし。もし汝は慾より潔まりて、心の動搖を免るゝならば神は自から汝を向上せしめて、汝に助け、其旨に準じて汝に智慧を增さん、されば汝は慓く可き完全を受けん。彼に光榮と權柄は今も何時も世々に歸す「アミン」。

第五十九　說教

修道士の生活の秩序及び其梗概と區別、德行は如何なる樣子にて互に相生ずるか。

新に智力にあらはるゝ熱切なる思念の爲に心中に燃ゆる無量の熱愛は勉勵して已まざる練習により生ず。然して此練習と之を守ることは其熱愛を以て智を銳敏にし、之に視覺を與ふるなり。此視覺は前文に述べたる意思の熱切を心中視覺の深きに生じ、名づけて直覺とはいふなり。然して此直覺は又熱愛を生ずべくして、直覺の恩寵を以て生せらるゝ此熱愛により涙の流れを最初は少量に生せん。即人に涙は一日數回流れて其後乏しくならん。然れども之に次で連々たる涙を生ずべく、連々たる涙により靈魂は意思の平和を受け、意思の平和により高められて智の淨潔に達すべく、智の淨潔により人は神の奥義を知るに達せん。何となれば淨潔は戰止みて平和の成るにより奥密に存在するによる。此後智は顯現と異象とを見るに達することイエゼキリの見たる如くならん。是れ靈魂が神に近づく三の階段をあらはす。此すべての爲に始となるものは神に對する善良なる豫圖是なり。それ默想の行爲の種類は不變不易にして、浮世の事を大に自から絕ち之に遠ざかるによりて生ずるなり。此等の行爲の各種類のことは多く言ふを要せざるべし。何となれば此等は衆人に知らるればなり、さりながら之を書すはたゞに害なきのみならず予が證する如く讀者の爲に大に有益なるにより之を書すを緩慢にするの故なきなり。

其種類は左の如し、飢渴なり、讀經なり、及び各人の力に應じて終宵眠らざる儆醒なり、日中又は夜間にも屢々有益に行ふ許多の叩拜なり、叩拜を三十と定め、其後尊き十字架を拜し、此を以て終るは是れ汝の爲に最少限となすべし。しかれども己の力に應じて此叩拜の數を增す者も之あり。或は淸醒なる心を有し、强ふるなく、意思の緊腠もあるなくして、地に俯伏し、一の祈禱に三時間を費す者も之あり。此の二の種類は各人に其價値に準じて與へらるゝ恩惠若くは恩寵の富を顯はし且證するなり。しかれども强ふるを免るゝ祈禱と之に止まる方法とは如何なるか。此事は口述を以ても書に筆するを以ても之を說明せず。此祈禱の順序をあらはさゝるを以て予は當然と認む。何となれば讀者は讀む所のものを理會せずして、あらはす所の

ものを無益と爲すべく、或はもし彼は此を知るならば此事に於る秩序を知らざる者を賤むべくして、前者に於ては之を一笑に付すべく、後者に於ては譴責の言を發せん。さらば其時は使徒が豫言する者につきて用ひし言の如く予も此の如き事に於て異國人と認められん。故に此事を確知せんことを願ふ者は、前文にあらはせる路を行きて、其爲す所の練習を智力と應せしむるを致すべし。而して實に此事に着手する時は自然に之を確知すべくして、終に師を要せざるべし。けだし言ふあり、庵中に坐せよ、さらばこは自然に汝をすべての事に敎へん。眞實なる神に光榮は世々にあるべし。アミン。

第六十　說教

世より極て上なる窄き路を進行する者に對し魔鬼の戰ふ種々なる手段の事。

我等の敵たる魔鬼が此苦行に就く者等に對し狡猾にして其戰を殊異多樣にするは古來の習慣にして、彼等に對し種々なる器械を利用し、其人の意向に依り其戰の方法を變ずるなり。意志の緩慢にして思想の薄弱なる者には特別の注意を向けて、最初より强く攻擊す、けだし彼等に對し堅固にして猛烈なる試惑を開始するは、行路の始めに惡謀のあらゆる方法を彼等に經驗せしめんが爲にして、最初の苦行により彼等に畏を抱かしめ、其途は彼等の爲に慘憺として通過し易からざるものゝ如く見え、左の如く言はしめん爲なり、曰く、もし行路の始めがかくの如く苦しく且難くんば、前途幾多の攻擊に誰か終に至る迄堪ふるを得んと。故に此時より彼等は最早再び起ちて前進する能はざるのみならず、其安心を與へざる憂慮の爲に他の何事をも見るさへ能はざるべく、久しからずして魔鬼が彼等と殘忍なる格鬪を作すは、かくの如くして彼等を敗走せしめん爲なり。之を確言すれば神は自から魔鬼の彼等を打負すに放任して、毫も彼等に助けざるなり。何となれば彼等は自尊と冷淡とを以て主の苦行に就きたればなりと。けだし神は言へり、主の事を行ひて怠り、手を止めて血を流さゝる者は詛はる、〔イエレミヤ四十八の十〕又言ふ、主は彼を畏るゝ者に近し〔聖詠八十四の十一〕けだし神は畏れず冷淡ならずして魔鬼に抵抗すべきを命じて言へり、たゞ彼を滅すに着手し、突進して彼と戰ひ、勇氣にして抵抗せよと。天下のあらゆる敵に汝を畏れしめんと主は言ひ給ふ。復傳律令十一の二十五、けだし

神の仁慈の爲に甘んじて物體上に死せずんば、神より離れて圓らず靈神上に死せん。

故に汝の運命は此の如くならば、不滿を懷かずして神の爲に一時の苦みを甘受すべし、神の榮に入らん爲なりげだし主の苦行に於て肉體上に死するならば、主は自から汝を褒賞すべくして、汝の尊き遺骸には致命者の榮を神は與へ賜はん。ゆゑに予が前文に言ひし如く彼等は最初怠慢懦弱にして己を死に付するを決せざりしにより、其時よりすべての戰に劣等なる者とあらはれ勇氣なき者とあらはるゝなり。之を確言すれば神は戰鬪に於て彼等の追擊窘逐せらるゝに放任す、何となれば眞實に神を尋ねずして、却て試むる如く、或は嘲笑する如くに神の事を企つればなり。此により魔鬼も自から最初より彼等を探知し、彼等が意思の如何を試みたり。ゆゑに恰も暴風の如く彼等を追擊す、げだし諸聖人に於て見慣れし精神上の力を彼等に於て見ざればなり。神に進向する人の自由に依り、及び神の爲に或る目的を達せんとする意向に依り、神も協力し、且扶助して、人に其照管をあらはす。さればもし人は怠慢ならずして、神も放任せずんば、魔鬼は人に近づく能はざるべく、或は試むる能はざるべじ。されどもし誰か自負と高慢とを以て、或は疑念と二心とを以て恥づべき思念を入るゝを自から許すならば、魔鬼はかくの如き者等を試むるを請求せん。

しかれども尋常にして未熟なる新進修道士をば聖にして大なる者を試むる如くに請求せざるべし。げだし此の如き者等の魔鬼の手に陷るを神は放任せざるを知るによる（何となれば彼等には魔鬼の試惑に對して充分の力無きことは神の知る所なればなり）たゞ予が既に逃べたる源因の一ある時は神の照管の力は彼等より遠ざからん。是れ魔鬼の戰の第一手段なり。

魔鬼の戰の第二手段

然れども勇强剛毅にして死を無視し、大なる熱心を以て出で戰ひ、すべての誘惑と死とに己を付し、此世の肉體的生活とあらゆる誘惑とを輕んずる者等を見るや、之を迎ふるが爲に、魔鬼は猝然には攻せず、久しく自から彼等にあらはれず、持重して彼等に餘地を與へ、彼等が第一突進の際には彼等と相會せずして、之と戰を交へざるなり。げだしすべて戰鬪の始は最熱烈なるを知り、苦行者の大なる熱心を有すると熱心なる兵士の勝ち易からざるとは彼の知る所なればなり。然れども魔鬼の此くするは彼等を懼るゝが爲に非す、彼等を繞りて魔鬼を煩かす神の力を懼るゝなり。

ゆゑに彼等のかくの如くなるを見る間は、彼等に觸るゝことだも敢てせずして、時を待つ、即彼等の熱心の冷になると彼等が意中に備へたる武器を彼等自から脫して、彼等に協力救援する神の言と其記憶とに違反するの時を待つなり而して其怠慢の時に當り彼等に注目して、其最初の意志より多少離るゝと、彼等に流るゝ姑息の念慮により彼等を屈服せしむべきものを彼等が自から創設すると、怠慢より生する意思の高超により其心情に冷淡が王となりて其靈魂の爲に滅亡の坑を自から穿つことに注意せんとす、魔鬼が彼等を攻擊するを中止するは、甘んじて之を爲すに非ず、彼等を惜み又は彼等を恥づるによるにあらず、けだし彼等を無視すればなり、之に反して予は斷定す、燃ゆるが如くなる熱心を以て神に突進し、小兒の如くなる感念を以て苦行に出で、何等願慮する所なく世を棄つるも、神に依賴し、神を信じて、何者と戰はんとするをも知らざる者等を或る力は圍繞するありと、故に神は彼等の爲に魔鬼の惡計の猛烈なるを拒ぎて彼等に近づかしめざるべし、敵は彼等を常に護る守護者を見て牽制せらるゝなり、けだし勁の源因、即祈禱と勤勞と謙遜とを自から己れより棄てずんば、保護者と助力者は決して遠ざからざるなり、愼んで此事を己の心に銘せよ、何となれば甘美を嗜むと安佚を愛するとは放任の源因なればなり、然れども誰か弱らすして之を節制するならば、神の助は決して彼を棄てずして、敵には彼に近づくを許されざるなり、もし何の時か彼を瞰解せしめん爲に彼に近づくを許さるゝありとも、聖なる能力は彼に伴ひ且固む、ゆゑに彼は魔鬼の誘惑を畏れざるべし、何となれば彼の思想は此能力の爲に勇みて誘惑を輕んずればなり、けだし神聖なる能力の人々を救ふるは、譬へば人あり小童に游泳を教ふるが如し、弱れんとする時は彼を水より携出さん、何となれば小童は救者の手によりて泳げばなり、ゆゑに溺れんを怯るゝときは、彼を手に持する者は自から彼を勵まし、呼んで言はん、畏るゝなかれ、我は汝を持す」と、又譬へば母が小兒に步むを教へ、遠ざかりて彼を呼び己れに就かしむる如し、彼れ其母の許に行かんとし搖々として足も肢體も軟弱なるが爲に仆れんとする時は、母は趨りて彼を其懷に抱かん、神の恩寵も此の如し、淨潔且正直にして己を造成者の手に托し、全心より世を棄て、行きて主に從ふ所の人々を扶け且救へん、然れども出でゝ神に從ふ人よ、汝は其苦行の何れの時にも其途の始めと、最初此事を始めたる時の熱心と汝が初度己が家を出でゝ軍隊に入りたる時の燃ゆるが如くなる思想とを常に記憶せよ、かくの如くして毎日己を試みよ、汝の着たる武器の一により、及び汝が苦行の始めに

汝に燃えたる熱心により、其心の熱愛を冷却せしめざらん爲なり、又汝が苦行の始めに汝の着たる武器の一を奪はれざらん爲なり、而して軍營の中に在りて不斷其聲を揚げよ、右方の子、即其意思の勇氣を鼓舞振作して、他の一方即敵の一方には汝の清醒なるを示すべし、ゆゑに汝を驚かす試惑者の突擊を最初に發見するあらば、弱わるなかれ、此突擊は思ふに汝に益あらん何となれば汝を救ふ者は此事に於て汝を益せん爲に何の設備もなさゞるときは何者にも徒に汝に近づくを許さゞればなり。

さりながら最初に怠慢をあらはすならば、恐らくは此處に怠慢をあらはすならば、前進行動するとき汝は衰へて、汝を襲ふ患難に抵抗するに最早堪へざる者とならん、即飢餓、疾病、恐るべき妄想及び其他の患難の如き是なり、汝は苦行の立定者の意思を誤解するなかれ、何となれば汝の何を期するを敵の發見せざらん爲に敵に對して汝に扶助を與ふればなり、之に反して不斷神を呼び及び其恩寵の前に泣くべし、汝に扶助者を遣はさゞる間は涙を流して自から勞すべし、げだし汝を救ふ者を一たび己の近きに發見せば、最早汝に抵抗する敵の爲に勝たれざるべし、視よ此處に至るまで言せるものは是れ魔鬼の戰の第二手段なり。

有力にして剛毅なる者に對する敵の戰の第三手段。

故に此すべての後、魔鬼は何人に反抗するも、最早彼と鬪ふ力はあらざるべし、之を確言すれば彼を堅めて彼に助くる者と鬪ふ力はあらざるなり、人は此救援により敵より上に擧げられ救援する者より能力と忍耐とを借るべし、ゆゑに粗き物體的なる身を以て無形にして靈的なる者を制するに至らん、されどもし敵は神より受けたる此のすべての能力を認め、人の外威は見ゆる物體と聞ゆる聲音の爲に打負されずして、諂媚と誘惑との爲に弱らざるを見る時は、此欺瞞者は彼の人に助くる天使を人より引離さんが爲に何等の方法をか見出さんを願ふ、之を確言すれば此欺瞞者は助を施さるゝ人の才智を盲まして無助者たらしめ、人に驕傲の念慮を起して、人のすべての剛毅は自己の能力を以て反對者と殺人者とより己を守護するものの如く思はしめんを願ふ、ゆゑに時として人は斷定す、敵に勝てるは偶然なりと、又時として斷定す、敵の無力の爲に勝てりと(たゞ想起するのみにても心の戰慄すべき他の方法と誹謗的念慮とのことは茲に予は言はず)然して或時は敵も神より出る啓示の狀に托し、其美觀を中間に引出して、夢中には人に或物をあらはし、不眠の時には聖なる天使に容を變じ、漸々人を勸めて幾ばくなりとも自己に同意せし

むるを得んが爲にも人の其手に渡さるゝを得んが爲にもすべて爲さゞる所無きなり。しかれども善智なる人は其意思を無難に保持するならば之を確言すれば彼に協力する者を忘れざる記憶を保ち、其心の目を天に注ぎて、彼に耳語する所の者を見ざるときは、敵は他の方法を發見するを新に企てん。

頑固なる敵の第四の戰の事。

終に敵には左の一計の存するありけだし天性が之と親和するにより之を以て人を滅亡に致さんことを特に希望す。其狡計は如何なるか。人の天然の必要を以て人を窘逐する是なり。苦行者の智は感じ易き物を屢々見るにより、及び其物の近づくにより昏まさるべくして之と接近するときは易すく戰に打負かさるゝなり。剜や其物は直切人の目前にある時に於てをやゆゑに兇猛なる魔鬼は事の諳練と老熟とを以て此方法を利用す。即剛毅にして有力なる多くの苦行者の之が爲に陷りしをば實驗上に之を確知して、狡猾に此事を行ふ。けだし獸想を以て保護せられ其居る所は罪の手引と源因とより遠ざかるにより、彼は人をして此を實地に行はしむる能はずといへども、力めて苦行者の智をして此を幻像に於て見せしめ、眞實の假面の裡に假僞なる妄想を形造らしむるなり。其妄想するものを渴望せしめん爲に彼等に癢感を起し、恥づ可き思念に心を留め、之と同意せしめて、彼等を罪ある者となし、たゞ此により其幇助者を彼等より遠ざけんとはするなり。けだし人の勝利と、其凱旋と、其財寶と、其保護と、すべて苦行者にある所のものは其意思によりて行はるゝ、されどもし意思は位置より動きて、彼の高處より地下に降り、自由を以て一瞬間に之に同意を表するならば事は暫時の間に成らんこと多くの聖者が婦人の美を妄想する際に起りし如くなるべきは敵の知る所なり。もし彼等は一里二里、或は一日の距離と雖も、世に近づくならば、敵は實際婦人を彼等に引誘せんが爲に奔走するは毎々の事なりき。しかれども世と遠ざかり居る者等を此網中に捉ふる能はず、故に妄想により彼等に婦人の美を不適當なる形狀にてあらはし、之に心を留めしむるに或は衣服の裝飾を以てし、或は交際の自由を以てし、或は身の裸體を以てするなり。此等により敵は或者等を實に打負かせり、然して他者は其意思の汗漫により妄想の爲に欺かれて、之により絶望の深きに達し、世に傾きて、其靈魂は天の希望を失へりき。

然れども他者は彼等に比すれば更に剛なり、ゆゑに恩寵に照されたる彼等は敵と其妄想に打勝ち、肉體の樂を蹂躙して、神の愛に棣達なる者となりぬ。敵は又黃金寶

物、又は純金製の寶を妄想により彼等に見せしむること往々之あり、而して或時は寶際に此を彼等に示して、かくの如きの種々なる妄想により其或者の進行を止め、其網と長き網の一を以て彼等の足を鉤るに或は成効すゝあらんことを希望したりき。

然れども汝主よ、我等が弱きを知れる主よ、我等を此の如きの誘惑に入るゝなかれ、有力にして大に練達なる者たりとも、此の如きの戰より勝利者として出來らんことは未だ必し難し。

誘惑を以て聖者と戰ふとき、誘惑者たる魔鬼に此すべてを許さるゝは此の如きの誘惑を以て彼等が神を愛するを試みられん爲にて、彼等は遁世により、此等の物を遠ざけ、剝奪と空乏とに際し寶に愛神者たるや否神を愛するに止まりて眞實に神を愛するや否而して此等の物に接近するときは神を愛するにより之を輕んじ、之を賤むに盡力するや否やを試みられて、彼等自ら勝利を讓らざるや否を試みられん爲なり。且かくの如く試みらるゝは之により神に知らるゝ者となるのみならず、魔鬼其者にも知らるゝ者とならん爲なりげだし多くの事を以てすべての者を試み、能くするならば探知して之を誘惑せんことを神に請求するこゞ義人イオフを請求せし如くせんことは魔鬼の素願なればなり、ゆゑに些少なりとも神の旨あらば誘惑者たる魔鬼は接近して制し難からん、然れども不法なる魔鬼の彼等と戰ふは其試みらるゝ者の力に準ずべくして彼の願に依るにはあらざるなり。而して神を愛するに堅立する所の眞の愛神者は此を以て試みらる、彼等は此のすべてのものを輕んずるや否常に謙遜にして、すべての者に榮を歸するや否苦行の時に當り己を神の手に付し、「主よ汝は力あり、此苦行は汝に屬す、汝は我等の爲に戰つて勝てよ」と神に告ぐるや否を試みらるゝなり。其時彼等の試みらるゝは金の鎔鑛爐に試みらるゝ如くなるべし。

さりながら假僞なる愛神者も如此の誘惑を以て探知せらるべく、認識せらるべくして、彼等は敵に地位を讓り、有罪者となりて、其心の汗漫の爲、或は其驕傲の爲に不潔なる者として神より離落つるなり、何となれば諸聖人に徹底したる力を彼等は受くるに堪へざればなり。しかれども我等に協助する力は勝たれざるなりげだし主は全能にして、あらゆる者より强し、ゆゑにもし戰に臨み、苦行者に降るあらば、何れの時にも死すべき體に於て勝者となるなり。もし彼等が勝たるゝあらば主なくして勝たるゝものなること明にして、是れ彼等は自己の任意に循ひ忘恩によりて

神を己れより遠ざけたるなり、ゆゑに勝利者に助くる力を彼等は賜はらざるのみならず、其の力戰の時に當り常に自から有したる力をも奪はるゝを自から感ずるに至る。さりながら如何樣に此を感ずるか、彼等が墮落は其眼中に樂しく且は愉快なる如くあらはるゝ、敵に對する戰の慘酷を忍耐するは彼等の爲に困難なるを見ん、先には彼等熱切と敏速とを伴ふ天然の運動突擊により、熱心を以て斷じて勝を得たりしも今や彼等は其靈中に之を見ざるなり。

苦行の始めに當り、怠慢懦弱なる者は此等の格鬪を懼るゝのみならず、樹葉の颯々たる響にも畏を抱きて心を擾し缺乏の際には些少の窮迫と飢餓と聊の薄弱にも打勝たれ、苦行を棄てゝ逡巡せん、然れども眞實にして棟達なる苦行者は蔬菜野果だも飽食せざるのみならず、枯草の根を以て己を養ひ、定めたる時間の先には何物をも食ふを肯んせず、溯弱の身を以て赤地に寢ねん、彼等が眼は身體の非常の衰弱の爲に僅に見るありて、其壓迫の故に肉體と殆ど分離せんとするに至るも、自から勝利を讓らずして、堅固なる自由を棄てざらん、けだし一時の生命と之が安息を有せんよりは、神を愛するにより己を強ひんことを願望して、德行の爲に勞するを更に愈々愛すればなり。されば誘惑の來るや彼等は特に之を樂みて之を以て更に成全せらるゝなり、其前に臨める大なる勞苦の中に在りても、ハリストスを愛する心に動搖を來さず、生命を失ふに至る迄は勇氣にして攻擊を忍耐するを熱心に願ふて退かざるべし、何となれば此を以て成全せらるればなり、我等が神に光榮は世々に歸す、アミン」。

第六十一　說教

心を神に近づかしむる爲に人に益するもの、事、如何なる眞實の源因は人に助を窃に近づかしめて、如何なる源因は人を謙遜に導くか。

己の弱きを認識する人は福なり、何となれば此認識は人の爲にすべて善良なる進歩の基礎となり、根本となり、又原因となればなり。人は己の弱きを確知して實に之を感するならば直に其靈を認識を暗ます衰弱より起して、警戒の心を備へん。しかれどもし人は或は身體或は靈魂を疲らすものを以て些少の試惑なりとも放たるゝ、あらずんば己の弱きを決して感知する能はざるべし。之を放たるゝ時は己の

弱きを神の助と比較して其助の大なるを直に認識せん。之と同く其使用したる多くの方法と警戒と節制と庇蔭と其靈魂の保護とを研究し、之により靈魂の安全を得んことを望めども見ずして其の心は畏懼と戰慄の爲に安靜を有せざらん時は、人の心の此畏懼は人の爲に他の或る協力者の必要にして欠く可らざるを顯はし且證するものなるを曉るべく、且之を認識すべし。けだし心は之を擊ちて其內部に格鬪するの恐れにより何か足らざる所あるを證して之を知らしめ、安然として居る能はざるを此を以て明示せらるゝなり。何となれば予が既に言ひし如く神の助けは之を救へばなり。さらながら神の助の必要なるを認識したる者は多く祈禱を行ふべくして、祈禱を增加する程ばいよ〳〵心は謙遜にならん。けだしすべて祈る者と願ふ者は謙遜にならざる能はざればなり。碎けて謙る心を神は輕んぜず」聖詠五十の十九ございふ。故に心は謙遜にならざる間は舞揚して止む能はざれども、たゞ謙遜は之を纏めて一に集中するなり。人は謙遜になるときは直に憐みは人を繞るべくして其時心は神聖なる助を確知せん。何となれば其心に惹起さるゝ或る確信の力を看出せばなり。然して人は神聖なる助の實に人を救援するを感知する時は、其心は瞬間に信仰に滿たさるゝなり。

此よりして人は了解せん、祈禱は助を求むる者の避難所なると、救濟の泉なると、安全の寶なると、大なる暴風より救はるゝ港なると、暗黑に居る者の光なると、無力なる者の支柱なると、誘惑の時の保護なると、病の分離期に於る救助者なると、戰鬪に於る救命の盾なると、敵に向つて征がれたる矢なるとを了解せん、簡短に之を言へばすべて此等の幸福の多きは祈禱により人に近づくを發見して、今より後人は最早信仰の祈禱を以て樂まん。人の心は希望により光明なるを得べくして、如何にも口頭一片の言顯により從前の昏蒙に止まらざるなり。さりながら此の如く之を了解する時は、寶物の如くなる祈禱を靈中に求め獲て大なる歡喜により、祈禱の狀態ば變じて感謝の聲とならん。されば視よ、各物に其固有の方式を定めたる者の論じたる言は左の如くいへり、曰く「祈禱は感謝を捧ぐる喜なり」と。是れ即彼は神を認識するにより行はるゝ祈禱即神より遣はさるゝ祈禱をいへるなり。何となれば其時人は祈禱するにすべて此恩寵を感知する以前に祈禱したる如く勞と倦とを以てせざればなり。乃ち中心の喜びと嘆美とを以て、數ふ可からざる拜跪により、謝恩的動作を斷えず顯はし、神の恩寵の前に認識と嘆美と慇懃とを多く喚起せらるゝにより、俄に其聲を高め、神を歌頌讃美しつゝ感謝を捧げ、非常の慇懃により其舌を

動かさん。

實に此處に到達し妄想を以てせずして、多くの標識を實に心中に置き、久しく自から己を試みて、多くの特徴を察知したる者は、予が言ふ所を知らん、何となればこれ眞實に達はざるによる。ゆゑに今よりして後無益なることは思ひ止むべく、不斷の祈禱により、長懼と戰慄とを以て神の前に退かず止まるべし、神の大なる助を奪はれざらん爲なり。

此等の幸福はすべて己の弱きを認識する人に生ずるなり。げだし神の助を望むの大願により、祈禱に止まりて、人は神に近づけばなり。而して其望願を以て神に近づく程は、神も其賜を以て人に近づきて其大なる讓遜の爲に恩寵を人より奪はざるなり、何となれば裁判者の前に於る寡婦の如く、敵を防がんことを退かず呼べばなり。故に宏慈なる神が恩寵の賜を止むるは、人の爲に神に近づくの源因とならん爲及び人が其要求の爲に益となるべきものを流出する者の前に離れず止まらん爲にして、神は或る願をば速に成就せしめ、即ち是なくんば誰も救はるゝ能はざるものをば速に成就せしむれども、他の願をば之を成すを遲延し、而して又或る場合には敵の焚盡す力を人の爲に拒ぎ且散らせざるも、他の場合には誘惑に陷るを許すは、是れ予の既に言ひし如く、此試が人の爲に神に近づく源因とならん爲なり、人の學んで誘惑に實驗を有せん爲なり。視よ聖書に言ふ所は左の如し、主は多くの民を遣し、彼等を滅さずしてナワインの子イスラエルの手に付さゝりしは、之を以てイズライリの子を敎へん爲、イズライリの子の齊をして其敎訓に注意し、敵を學ばしめん爲なり。士師記三の一、二けだし己の弱きを認識せざる義人の行爲は恰も剃刀の尖に在る如し、彼は墜墮と人を害する獅子、とより全く遠ざからず、驕傲の魔鬼より遠ざからざるなり。而して又己の弱きを知らざる者は讓遜に乏しく、讓遜の足らざる者は完全に達し得ずして、完全に達せざる者は常に畏に居らん、何となれば彼の城郭は鐵柱と銅闘の上に確立せず、即讓遜の上に確立せざればなり。されど讓遜は人が砕けたる心悟と己を賤んずる思念とを常に得らるゝ方法を以てするに非んば、受る能はざるべし。ゆゑに敵も人を迷はしめん爲に蹤跡を捜すこと屢々之あり。げだし讓遜なくんば人の行は成る能はずして、其自由の手書に神の印を押されざるなり、之を確言すれば今に至るまで彼は僕にして、其行は畏を免れざるなり、何となれば讓遜なくして其行を修め誘惑なくして學ぶことは何人にも能はざるべくして、既に學ぶなくんば誰も讓遜に達せざればなり。

此によりて見るに主は聖者に謙遜の爲及び熱切の祈禱に心を碎く爲に源因を遺置くは主を愛する者をして謙遜に由り主に近づかしめんが爲にして、彼等をして其天性の嗜慾と耻づべき不潔なる思念に偏し易きことを以てすることしばしばこれあり、且詰責と、凌辱と、人々より頬を批たるゝ事とを以てすることも亦しばしばこれありて、時としては疾病と身體の薄弱とを以てし、又他時には赤貧と欠くべからざる雷用に缺乏することを以てし、或は強き畏懼を以て苦しむると、放棄と常に彼等を嚇着する顯然たる魔鬼の戰とを以てし、或は種々なる畏るべき出來事を以てするあり。是れ皆人に謙遜に達する源因を有せしめんが爲にして、或は病弱なる苦行者をして、其の居る所の境遇により、或は未來の恐れにより、惰眠に陷らざらしめんが爲なり。ゆゑに誘惑は必ず人々に益あり。しかれども此事を言ふは人は耻づべき思念を以て甘んじて己を弱らすべくして、其の記憶は人の爲に謙遜の發端とならんとの間には非ず、又人は勉めて他の誘惑に陷らざるべからずとの義にもあらず、反つて人は善なる行爲を以て何れの時にも謹愼し、其靈魂を守るべくして、人は即受造物なると、隨て變化に屬するものなるを思ふべしとの謂なり。げだしすべての造物は己を保護するに神の力を要すべくして、凡て他より保護を要する者はこれを以て天然の弱きを顯はす。然して己の弱きを認識する者の必ず謙遜ならんことを要するは、己の爲に必要なるものを其與ふるを能くする者より受けんが爲にして、もし人は最初より己の弱きを知り且目擊するならば、怠慢にならざるべくして、怠慢にならずんば睡眠に耽ることもあらずして、其覺醒により凌辱者の手に付さるゝことあらざるべし。

終に神の途を進行する者はすべて遭遇するものゝ爲に神に感謝して、自己の靈魂を責め、且罵るべくして、照管者を以て之を許さるゝは自己の或る怠慢により或は其心を覺醒するが爲なると、或は人が漸々高慢し始めたるが爲なるとに外ならざるを知らんこと肝要なり。故に人は擾亂せざるべく、進行と苦行とを棄てざるべく、己を責むるを息めざるべし、二倍の禍の人に及ばざらん爲なり。何となれば義を流す神に不義はあらざるによる。然り、此あらざるなり。彼に光榮は世々に歸す。アミン」。

第六十二　說教

神聖なる書の悔改を奨勵する諭言、及び人間の弱きに對して此を陳べられしは人々生活の神より離れて亡ぶるを免れんが爲なる事、及び之を轉じて罪を犯す緣由と爲すべからざる事。

諸神父が其神聖なる書を以て要求する悔改に於るの勇氣と使徒及び豫言者等の書にあらはせる悔改の旨趣とは、我等之を轉じて罪を行ひ不可侵なる主の定法を破るが爲の助と爲すべからず、是れ古より諸聖人の口により悉くの書と立法に於て罪を滅さんが爲に神の力を以て定められしなり。げだし彼等は悔改の希望を有せしむる爲我等が感情に絶望の恐れを豫め除かんごとに工夫を費せり、故に凡ての人は急ぎて悔改し敢て罪を犯すを免るべからざりしなり。就中神はすべての書にあらゆる方法を以て長を勸誘して、罪は神の憎む所なるをあらはせり。げだしノイと同時代の族は如何して洪水に滅びたるか、人々狂亂してカインの女の美を望みたる姪蕩の爲にあらずや、貪銀、偶像、妖術及び戰爭は當時にはあらざりき。又ソドムの邑は何故火に焚かれたるか、其肢體を欲望と不潔とに委しあらゆる汚穢不適當の行を以て自由自在に管理したる爲にあらずや。一人の淫行の爲に神の家子イズライリの子孫の二萬五千人は瞬間に死を速ぎしにあらずや。偉人サムソンが母胎の中に在て神を以て聖別せられしは、ザハリヤの子のイオアンが生前天使の祝福を受けて大なる能力と大なる奇蹟とを賜はりし如くなりしに、神に棄てられしは何故なるか淫婦と同棲して聖なる肢體を汚したる爲にあらずや。神が彼より遠ざかりて彼を其敵に付したるは之が爲なりき。然してダワイドは神慮に適ひ、其の德行の故に列祖に許約せられしものは其齋より發し、全世界の救の爲にハリストスは彼より光り始むるを賜はりし人なりしが、或る婦人の美を目擊して其靈に矢の落づるや、彼と淫行を遂げたる爲に罰せられしにあらずや。之が爲に神は其家に戰を起し、ダワイドの多涙を以て悔改を表したるに拘はらず其同胞は彼を逐へり、然るに涙を以て其罪を濕せしにより、神は豫言者を以て彼に告げて言へり、曰く「主は汝の罪を除けり」サイムル後書十二の十三。又彼より先なる或者等をも記憶せん、四十年の間神品の職を以て飾られたる義な

る老司祭イリイの家に神の怒と死の降りしは何の爲か。其二子オフニとフィヂッスの不法の爲にあらずや。げだし彼自分は罪を犯さずして二子は父の同意なくして罪を犯せり。然れどもこは主の前に罪を犯したる彼等を罰する熱心の父にあるあらずして、主の命令よりも尚更に彼等を愛したるによるものにして、主は其生存の日を悉く無法に送りし彼等にのみ其怒を現はすと人をして思はざらしめんが爲なり、故に此の荒唐なる罪の爲に其熱心を主に近き者に、司祭に、士師に、君主に、主に神聖とせられて奇蹟を行ふを信任せられし者にあらはすなり。神の立法を犯したる者の現はるゝや神は決して注意なくして舍かざるを此を以て知らしむるなり、イエゼキリの書に記されし如し、言へらく見えざる劒を以てイエルサリムを滅さんことを命じ、其人に告て言へり、我が祭壇の前に立つ者等より始めよ、而して老人をも青年をも遺すなかれと。イエゼキリ九の六。是れ恐れと恭敬とを以て神の前を行き其旨を行ふ者等は神に近くして變せらるゝ所以と、剛勇なる行と清潔なる良心とは神の前に聖とせらるゝ所以とを之を以て證するなり。主の道を辱しむる者は主も辱かしめて、彼等を其面前より遠ざけ、其恩寵を彼等より奪ふ。げだしワルタサルに對し判決の俄に出で手を以て壁つ如くなりしは、何の爲か。イエルサリムに於て神前に供へたる不可侵なる供物に手を觸れ之を奪掠して、妃妾と共に自から之を食ひし爲にあらずや。かくの如く己のるを敢てする者等も見えざる打擊により亡びん。

故に我等は神聖なる書を以て臭へらるゝ勇氣を以て悔改を期し神の言と其警告を輕んせざるべく、其行の不當を以て神を怒らしめて、神に事ふるが爲に一次永遠に聖にしたる肢體を汚さゃるべし。げだし視よ、我等も神に聖せらるゝことイサヤ及びエリセイの如くなるべく、豫言者の子と、他の聖者、及び童貞等の大なる奇跡を行ひ神と相對して談話したる如くなるべく、又すべて彼等の後にありては例へば貞潔者イオアン、及び聖なるペトル、及び其外新約の福音者又は傳道者等の一隊が己を主に聖として、一は主の口より、他は默示により主より奥義を受けて、神と人々の間の媒介者となり、全世界に天國を傳へたる如くなるべきによる。

第六十三　說教

修道士の生涯の美は如何して保護せらるゝか、神に榮を歸するの順序。

修道士はすべての行狀と動作に於て凡そ彼を見る者の爲に建德の模範とならんことを要す、光線の如く光り輝く許多の德行の爲に、眞理の敵も彼を見て「カリスティアニン」に堅固不拔なる救の希望あるを自覺せざらんを欲すとも得ずして、八方より、彼に集ひ來ること、宛も眞實なる避難所に集ひ來る如くならん爲なり。之が爲に敎會の角は敵に向つて高められるべく、多くの者は修道士の德行と競爭せんが爲に進んで世を棄つべくして、修道士は其生涯の美の爲に衆人に尊敬せられん、何となれば修道士の生涯はハリストスの敎會の名譽なればなり。

ゆゑに修道士はすべての關係に於て秀美なる行狀を有せんことを要す、卽見ゆるものを輕んずると、嚴格なる無慾と、肉體には全く心を用ひざると、高き禁食と、沈默を守ると、官能の齊整と、視るを戒むると、此世に屬する何事の爲にもすべての爭を絕つと、言語の簡なると、怨を棄つると、思慮に於ては誠實にして、才智の怜悧と活動と運用に於ては僞なくして正直ならんことを要するなり。彼の爲に必ず知らんを要するは、現世の空しくして暫時に過ぎ去ることと、眞實にして靈的なる生命の近きことを是なり。人々に知らるゝ者或は非難せらるゝ者とならざるべく、何人にも交り或は之と契を結ぶを以て己を縛らざるべし、居所は幽靜なるを有すべし、常に人々を避け、弱らざる忍耐を以て祈禱と讀經とを務むべし。名譽を好まざるべく、賄答の爲に心を奪はれざるべく、誘惑は勇氣にして忍耐すべし、世の欲望と世事の穿鑿と記憶とより自由なるべし、常に眞實なる一方に意を致して、之を熟思すべし、哀みて皷に祝はれたる面を有し、晝も夜も不斷涙を流すべし、然して此のすべての外特に自己の貞潔を守り、膓を悅ばすことと大小の缺點とより免れて清潔なるものとならんこと肝要なり。視よ簡短に之を言へば修道士の德行は世のために全く死者の如くなると神に接近することを證するにあるなり。

ゆゑに我等は何の時にも此等の德行に意を致して之を得んこと肝要なり。然れどももし誰か此等を詳細に解明して、概括的簡短にあらはさゝるは何の要ありやと問ふあらば、答て言はん、是れ緊要の事なり、是れ自己の生命に注意する者が此等の德行の或るものを其靈中に搜して此の計算せるものゝ中何に於てか乏しきを發見するあらば、之により彼は或る德行に於る自己の缺點を認識せんが爲にして、此記上するものは彼の爲に見て之を想起するの益とならん爲なり。然るに此處に解明したるものをすべて已れに得る時は予が未だ記さゞる他の德行をも彼に識らしむるを得ん。さらば彼は聖なる人々の爲に神に築を歸するの起原者となるべく

して、此生命を去る以前に猶此處に於て靈魂の爲に安息の位置を備へん、我等が神に榮を世々に歸せん。アミン」。

第六十四　說教

神より定められたる默想の路を進行する者に如何なる轉變變化を生ずるか。

默想に生活せんと其心に決したる者は、己を整備して、默想の順序に循ひ、餘日を其練習に送るべし。汝の靈魂が內部に暗黑を滿さるゝ場合ある時（こは神の恩寵にて定められたる默想の順序に於て常に之有るなり）たとへば太陽の光線の地上雲霧の爲に蔭はるゝ如く、或る時間心神の安慰をうばゝれて靈魂を蔽ふ慾雲の爲に恩寵の光が內部に暗くなり、隨て歡喜を生ずる力も多少汝に減少して、非常なる混霧の心意を蔽ふ時は、汝思慮を擾すなかれ、靈魂の無知に手を假すなかれ、忍耐して諸父の書を讀み、己を祈禱に強ひて助を待つべし。汝の知らざる助は速に來らん。げだし地の表面が太陽の光線により、地を包圍する大氣の暗黑の中より現るゝ如く、祈禱も慾雲を靈中に散じ盡し、愉快と安慰の光を以て心意を照すを得ん、これ祈禱が神聖なる聲中より自から糧を借り、心意を庶護する儆醒を有する時常に我等の思念に生ずる所のものなり。諸聖人の書を不斷に學ぶは不可思議なる靈嘆と神聖なる愉快とを靈魂に滿たしめん。我等が神に光榮は世々にあるべし。アミン」。

第六十五　說教

默想者の事。

默想者が其行爲を以て無邊の海に至る。即沈默の生涯に至るを理會し始むるは何の時なるか、其勞の結果を產するを多少望むを得るは何の時なるか。

予は汝に或事を語げん、此に疑を容るゝなかれ、又予が告る所の他の言をも頗細なるものゝ如く輕んずるなかれ、何となれば之を予に傳へたるは信ずべき人々にして、予は此言に於ても、又予のすべての言に於ても汝に眞實を告ぐればなり。もし汝は自己を其目の瞼に懸け、之に由り涙に達するときは、其生涯の間に最早何物をか

得たる如く思ふなかれ。げだし今に至る迄、汝に隱れたるものは世に事べ、即世の生活を營みて神の事は、外部の人を以て之を爲せども、內部の人は猶無結果なり、何となれば其果は、涙を以て生ずればなり。涙の域に到り達する時は、知るべし汝の智は此世の獄より出でゝ、其足を新世界の衢に立て奇異にして新しき空氣の香を嗅ぎ始めたるを。其時は涙を流すを始めん、何となれば靈兒の誕生が近づきたればなり。衆人一般の母たる恩寵は來世の光の爲に神聖なる形像を奧密に靈中に生出せんを願ふ。然して產期已に至る時は、智は彼處にある所の或物に喚起せらるゝこと、猶嬰兒が其肢體の內部に吸收し之を以て常に養はるゝ呼吸に類するありて、こは彼の爲に猶非常なるにより、之に得堪へずして、俄に其體を動かし、蜜の甘きを混和したる叫聲を發す。而して之を以て心中の兒の養はるれば養はるゝ程涙は增加するなり。然れども此の子が書する涙の順序は默想者に間歇的に生ずるものを言ふには非ず。何となれば默想を以て神と共に居るすべての人にも時として此安慰の生ずるありて、或は抽象的直覺に居り、或は聖書の言を學び、或は祈禱的談話を爲す時に生ずるあればなり。さりながら予は此の涙の順序のことを言ふには非ずして、豈夜不斷哀む者に生ずる所のものを言ふ。

しかれども此等の狀態の眞實なる價値を發見せん。げだし彼の目は渾々として已まざる源泉の如くなること二年有餘に亙るべくして、其後彼は思慮の鎭靜に至らん。然して性の幾分をか籠めて思慮の鎭靜に至りたる後彼は聖パウェルが言ふ所の安息に入らん（エウレイ四の三）而して此穩靜なる安息の後智は奧義を直覺し始めん。其時聖神は彼に天上の事を默示し始むべく、神は彼に住みて神の果を彼に復活せしむるなり。ゆゑに多少明了を欠き推察的なりとはいへども、人は自から其內部の性の種々なる改新により變化を受けを感ずるなり。

予は自己の記憶に充つる爲にも、又此文を讀むすべての人の記憶に充つる爲にも、聖書により、及び義なる口により傳へられたるものゝ中より借り、又自己の實驗よりも少からず借りて、其儘此を書するは之を益用する者の祈禱により予の爲に助くならん爲なり。何となれば予は此事の爲に少からざる勞を用ひたればなり。然れども又聞くべし、今予が汝に告ぐるものは僞らざる口により敎へられしものなることを。思慮の鎭靜の範圍に入る時は、涙の多きは汝より泰はるべくして、其後涙は適宜に、又は緊要の時に汝に生せん。是れ最適確なる眞理なり、之を箇言すれば

すべての敎會はかくの如く信ずるなり。

第六十六　說教

世に貧者となりて、神を尋ぬる爲に出發したる神の僕は、眞理の了解に達せざらんを恐れて尋ぬるを停止すべからず。又神聖なるもの、神の奥義の研究を愛するにより生ずる熱愛を冷にすべからざる事、及び智は慾の記憶により擾さるゝ事。

人の昇進する等級は三あり、新進（修道士の等級と、中間の等級と、完全なる者の等級是なり。初級に居る者の意思の有樣は善に傾くといへども、心の感動は慾にあり。第二の級は慾に從ふ狀態と無慾との中間に位し、右と左の思想は一樣に人に起りて、既に言ひし如く、彼は光明をも暗黑をもすべて發して息まざるなり。されば若し神聖なる書を頻に讀むを暫く停止し、內部の守りと充分なる尺度の行爲の生ずべき外部の警戒と共に力に應じ智を以て考る者を眞理の狀態を以て鼓舞する神聖なる智的想像を心に畫くを暫くも止むるならば、人は慾に引誘せらるゝなり。若し如上の事を以て天然の熱愛を養ひ、討究穿鑿して、遠く此に向ふを罷めず、たとひ之を見ずといへども、神聖なる書を讀みて其意を會するに循ひ、思想を養ひて、其左方に傾くを止め、眞理の狀態の下に何等の邪なる感得をも己れにうけず、特に愛を以て其靈魂を守り、倦まざる祈禱を以て忍耐して神に願ふならば、神は自から彼に其願を遂げしめて、彼の爲に其門を開くべく、特に其謙遜の爲に之を開き給はん。何となれば奥義の啓示は謙遜なる者にあらはさるればなり。しかれどもし此希望中に死するならば、たとひ彼の地を近きに見ずといへども、予は思ふ彼の嗣業は古義人等が完全に達するを望んで見ざりしと同じかるべきこと、聖使徒の言ふ所の如くならん。（エウレイ十一の三十九）彼等は其の悉くの日を自から勞苦して希望の中に世を終へたりき。然らば我等は何を言ふべきか。若し人は完全の象樣なる約地に上るを得ず、即天性の力に依り、眞理を明かに理會するに達せずんば、之が爲に彼は此事を停止して、其の悉くの意向は左方に傾き最下劣等の級に止るべきか。或はたゞすべての眞理を悟らざる爲に最下劣等の級に止まりて、之を認識せず、且は之を願望せざるべきか。或は予が述べたる中間の路迄昇り達するは彼に適當なるかげだ

したい鏡を以て見るが如くなる外には之を見ざるべしといへども、遠く望みて、此希望を以て祖先に並ぶべく、たとひ此處に於ては完全なる恩寵を賜はらずといへども常に恩寵と交り、全幅の精神を之に向けて畢生之を願望するにより、彼は惡念を截斷するを得べくして、神が此希望を其心に滿たしめたる丈にて此世を逝らん。すべて譲遜を有するは極めて美なり、神聖なる書の了解を以て導かるゝ智に神を愛するを敎ふる、靈的敎訓は、靈魂を以前の惡なる思想より內部に擁護して、智を未來の幸福を記憶するを以て守らん、彼れ其怠慢の爲に弱らず極めて善なる記憶に代へて世事の記憶に占有せられざらん爲なり、何となれば之が爲に彼は奇異なる感動の力を漸々冷却し、無益にして愚なる慾望に陷れば也。我等が神に榮を歸すべし。

第六十七　說教

神に依賴する種類、當然に神に依賴する者と無思慮に且無智にして依賴する者の事。

心の信仰により神に依賴するあり、こは最美にして思慮と知識とに一致す、又他の此と異なる無法の結果なる依賴あり、こは僞なり速に亡ぶべきものにはすべて意を致さずして、昼も夜も己を全く主に托し、世の何事をも慮らずして、德行の爲に勵精するに依り、時を全く神聖なる務に用ひ隨て己の爲に衣食を備ふると、肉體の爲に住所を營む等の事を疎にする人あり、かくの如き人は最美にして智慧を以て主に倚賴するなり、何となれば主は彼の爲に欠くべからざるものを備ふれば也。これ實に眞正にして最賢明なる倚賴なり、かくの如き者の神に依賴するは當然なり、何となれば神の僕となりて神の事に勵精し、如何なる事故ありとも怠慢に陷らざればなり、かくの如き者は神が特に其照看をあらはすに値す、何となれば彼は神の誡を守ればなり、曰く「先づ神の國と其義とを求めよ、然らば此等のもの皆汝等に加はらん」（マトフェイ六の三十三）肉體の慮を慾に變するなかれ（ロマ十三の十四）けだし我等がかくの如き傾向により、世は我等にすべてを備ふること或る僕の如くなるべく、必ず我等に從ふこと主君に從ふ如くなるべくして、我等の言と我等の旨に悖らざるべし。かくの如き人は不斷神の前に立つを妨げざらんが爲に身體の欠く可らざる需要に對する憂慮に沈まず、神を畏るゝ心により、すべてかくの如くなる心意の滿足と誇大とを得んとする大なる或は小なる掛念を免れて自由なる者

となる一事の外他を一も慮らざるべし、然れども之を慮らず之が爲に苦辛せずして奇跡により之を受けん。

しかれども心は全く地に埋もれて常に蛇と共に塵を食ふ人は決して神に悅ばるゝ事を慮らず、反てすべて肉體に屬するものゝ爲に疲れ且弱り、人々と不斷交遊し て浮戲放心するにより、一の德行にも意を致さず却て之が爲に何等の口實をか設け、かくの如き人は實に此の怠慢と遊蕩の爲に善行より遠ざからん、而して或物に缺乏し或は死の爲に迫まられて、自己の不法の結果に壓せらるゝ時は、彼も大方次の如く言ふならん、「我れ希望を神に托す、ゆゑに我を哀なき者と爲して我に猶豫を與へ給はん」と。無思慮なる者よ此時に至る迄汝は神を念はず、其行の放蕩を以て神を辱かしめて、神の名は異邦人に非難せらるゝこと錄して言ふ所の如し、〔ロマ二の二十四〕然れども今や口を開きて敢て言はんとす、曰く「彼に希望を托す彼は我を助けて我を慮らん」とかくの如き者等を辱しめん爲神は幸に豫言者を以て告げ給へり曰く「彼等は日々に我を尋ね求め我が途を知らんことを欲す、義を行ひ神の法を棄てざる民の如く義鞫を我に求む」と〔イサイヤ五十八の二〕其意思は神に近づかざれども忠難に圍まるゝときは希望を以て手を神に擧ぐる此の無思慮なる者はかくの如き者等の數に屬す、かくの如き者を百方了解せしめんが爲に彼を火に焚くを要すること幾回なるか、何となれば神に希望を有するに相當なる事を彼は一も爲さゞればなり、之に反して其惡行の爲及び爲すべきことに怠慢なるが爲に罰に相當するも恒忍なる神はたゞ其憐により彼を忍耐し給ふ、故にかくの如き者は已を欺くなかれ、其生活の如何なるを忘るゝなかれ、神に倚賴すと言ふなかれ、げだし罰せられん、何となれば信の行は一も彼にあらざればなり、彼は遊蕩に止まるも神の行に生涯を送る者の如く、神は緊要なるものを我に與ふるを信ずと言ふなかれ、或は未だ曾て念頭に神を有せざるも、今や陷りしにより「希望を神に托す彼は我を救はん」といはん爲に無分別にも自から井に投するなかれ、無思慮なる者よ、自から欺くなかれ神の爲に勞すると働きて汗を流すとは神に倚賴するに先だつ、神を信ずるならば善く働くべし。

さりながら信は行を要して、神に倚賴するは德行の爲に苦を受るに於て顯はるゝなり、神が其造物の爲に慮りて能はざる所なきを信ずるか、汝の信仰は之に相當する行爲を伴ふべし、其時は神は汝を聞かん、風を支へて一掴にせんと盡力するなかれ、即ち行なき信を支へんと盡力するなかれ。

人は野獸或は殺人者或は之に類する者等の居る路を知らずして行くこと屢々之あらん、視よ神の一般の照管は彼を如此の害より救ひ、或は惡獸の過る迄何と以てか旅人の進行を遲滯せしむることあり、或は人あり彼と相遇ふて其途より遠ざからしむることあり、又或時は毒蛇の路に臥して見えざるあらんに、神は人の其咬害に罹るを欲せず、蛇をして俄に啾々たる聲を爲して、其所を離去らしめ、或は蛇が其前に匍匐するを旅人をして見て用心し、其害を免れしむることあり、人は獨り自ら知る所の隱れたる罪の爲に此事に當るに堪ずといへども、神は其憐により彼を禍より避けしむるなり、又家或は壁或は巖石の鳴動顚倒せんとして、其處に或る者等の坐するあらんに、神は仁慈なり、坐せし者等の其所を起つに至る迄又は何を以てか彼等を他に移して其處に一人も止らざるに至る迄は、天使に命じて其顚倒を支へ且止めしめ、彼等の立去るや直に倒るゝこと屢之あり、然して或者は不意の事件に遭遇するも何等の害もうけざることありげだし之を以て其力の限りなく大なるをあらはさんと欲するなり。

すべて此等のことは一般的にして、何の處にも之ある神の照管の働なり、然れども義人は離れざる照管を已れに有するなりげだし他の人々には神は命じて自己の事を已の思慮にて處理し、神の照管と共に自己の知識をも益用すべきを以てすれども、義人は自己の事を處理するが爲に此知識に必要あらず、何となれば此知識に代へて信仰を受け「凡そ神の知識に悖ふ高慢を取ればなり」（コリンフ後十の五）ゆゑに前文に數へたるものを一も恐れざることなし、如く勇ましく（箴言二十八の一）すべてに對し信仰を以て勇むは是れ主を試みんが爲にあらず、主に目在して、聖神の能にて武裝せられ、之を以て圍まるゝによる。されば其恒久にして易はらざる愛慮を神に捧ぐる如く、神も彼の事を次の如く言はん、曰く「愛の時我彼と偕にし、彼を拔け、彼を榮せん、壽考を以て彼に飽かしめ、我の救を彼に顯はさん」（聖詠九十の十五、十六）衰弱して其行に怠慢なる者は如此の希望を有する能はず。しかれどもすべて神と偕に居り、其行の善良なるを以て彼に近づきて、其心の目は眠らず彼の恩寵に向ふ者は神聖なるダウィドの言ひしものを自己の爲にも言ふを得ん、曰く「我が目は我が神を望みて瘁れたり」（聖詠六十八に四）彼に光榮尊

第六十八　說教

世を棄つる事、及び自由の交際を愼む事。

世を遁れ、世の人々に遠ざかるを愛し、始むる時は、涕泣と思慮ある中心の悲痛の如く我等を世と分離し、我等に慾を殺して、我等を靈神上の事の爲に喚起皷舞するものはあらざるなり、げだし溫柔なる者の身は其愛さるゝ者の讓遜に倣ふ、之と同く人の笑を惹起し、交際に恣なるにより、意思の高超する程、我等を世と世に居る者又は世にありて飮酒に耽り放蕩に委する者等の仲間たらしめて、神の睿智と奥義の認識とより我等を遠ざくるものはあらざるなり、これ放蕩なる魔鬼の行なり、さりながら至愛者よ、汝の哲學を余は實驗して熟知したるにより、愛を以て汝に懇請す、願くは敵の害を豫防せんことを、恐らくは妄語は汝の爲に十字架上に酢を嘗めたるパリストスを愛するの熱情を汝の靈中に冷にせん、恐らくは敵は汝の美なる練習と神の前の勇氣とに易へて、汝の不眠の時は多くの妄想を汝の靈に滿たし、汝の睡眠の時は盲昧なる瀆語を以て之を房にして、聖なる神の使等は其惡臭に堪へざらんことを、其時は汝は他の爲には失脚の因となるべく、自己の爲には銳き棍棒とならん、故にパリストスの謙遜に倣ふに己を强ひよ、彼が汝に入れたる火の迅速に燃えて、世のすべての憧憬の新人を殺すものとをこれによりて殄滅せんが爲なり、げだし余は聖なるパラエルと共に敢て言はん我等は神の殿なりと(コリンフ前三の十六)故に我等は神の自から潔き如く彼の殿をも潔くせん、之に住するを欲し給はん爲なり、又彼の自から聖なる如く其殿をも聖にし、すべて善良身正なる行を以て之を飾り、神の旨の安息の香と淨潔にして熱心なる新禱とを以て之を薰せん、これ世の勤亂に屢關與しては得る能はざる所のものなり、かくの如くなれば神の光榮の雲は靈魂を蔭ひ、其威嚴の光は心中に輝き始めて、神の里の悉くの住者は喜ひと樂みにみたされ、赤裸々にして無疵なる者等は聖神の火焰により消滅せん。

故に兄弟よ、不斷已を責めて下の如く言ふべし、曰く「不幸なる靈魂よ、予は禍なり、汝が身體を脫する時は近づけり、今日棄てゝ永久に見ざるべきものを何の爲に樂むか、以前の生活を回顧し、注意して思慮判斷せよ、汝は何を爲したるか、何故かく爲したるか、汝の行は如何なりしか、其生活の日を誰と共に送りしか、或は地上に於る汝

の行爲の勞を誰か益用したるか、其戰を以て誰を喜ばしめて、汝が世を去る時誰に出でゝ汝を迎へしめんとするか、誰の爲に艱難勞苦して、彼に喜んで就かんとするか、來世に誰を友とし得て、汝が出で去る時汝を受けしめんとするか、如何なる田に雇はれ働らきて、日暮汝が別去る時誰か汝に工錢を與ふるか」と。

靈魂よ、己を試みて省察せよ、汝の領地は何の處にありて、當事者の爲に苦きを產する田を汝は通過せしや否や、慨嘆と不安とを以て號び且呼べよ、汝の神は穢物と燔祭とよりも之に安んじ給はん、汝の口は悲痛の聲を發せよ、聖なる使等はこれを喜ばん、汝の眼の淚を以て其險を洗へよ、聖神は汝に止まりて惡の汚穢より汝を洗はん、淚を以て汝の主を和げよ、彼は汝に助けん、マリヤとマルファを呼べよ、彼等は哀泣の聲を汝に敎へん、主に呼んで次の如く言ふべし、

主イエスよ、我が神よ、ラザリに泣きて、彼に哀みと同情の淚を漏ざし者よ、我が愁嘆の淚をも受け給へ、汝の苦難を以て我が慾を醫し、汝の血を以て我が血を淨め、汝が生活を施す體の香氣を以て我が體と和し給へ、願くは諸敵が汝に飮まれしめたる醋は敵の我に飮ましめたる苦味よりも我が靈を樂ましめん、願くは十字架の木の上に伸べ給ひし汝の體は魔鬼を以て引下されたる我が心意を汝に伸ばさん、願くは不信者を以て十字架に釘せられし汝の至聖なる手は我を滅亡の淵より汝に引上ぐること、汝の至聖なる口の約せし如くならん、願くは詛はれし者等の爲に批たれ且唾せらるゝを自ら甘んぜし汝の面は不法を以て傷はれたる我の面を照さん、願くは十字架の上にありて汝が父に交付したる汝の靈は汝の恩寵を以て我を汝に導かん、汝を尋ぬる爲に悲痛する心は我にあるなく、子輩が自己の嗣業に引入れらるべき痛悔も碎けたる心も我にあるなし、主宰よ、慰藉の淚は我にある無し、我が智は世事の爲に昏まされ、悲痛して汝に眼を擧ぐる力を有せず、我が心は誘惑の多きにより冷却して汝に對する愛の淚に煖められるゝ能はず、然れども汝主イエスハリストス、神萬善の寶藏なる者よ、全くの痛悔と疲れざる心情とを我に與へ給へ、我が靈を全うして汝を尋ぬるに着手せん爲なりげだし汝なくんば予は何等の善にも遠ざからん、故に善なる者よ、汝の恩寵を我に與へ給へ、永遠無限に汝を其懷より出す、父は汝の狀を我が中に新にせん、我は汝を棄てたり、汝は我を棄るなかれ、我は汝より去れり、汝は來りて我を尋ねて我を汝の牧場に導き、汝が選べる群中に我を數へ入れて、汝が神聖なる奧義の業を以て彼等と共に我を養ひ給へ、彼

等が純潔なる心は汝の住所にして、汝の啓示の光の瞭然と彼處に光り耀くは、是れ慰籍なり而して此慰安は汝の爲に種々の患難と殘害とに於て苦辛したる者等の爲なり。我等が救世主イイススハリストスよ、願くは汝の恩寵と汝の仁慈とに依り我等も此光輝を世々に惠まれん。アミン。」

第六十九　說教

懸念を有せざるは默想者の爲に有益にして、其出入は有害なる事。

懸念の多き人は溫良なる沈默者となる能はず、何となれば彼を煩はす事故の避く可らざるは彼をして欲せずと雖強て之に從事し、之に時を遂るを餘儀なくせしめて、其安靜と沈默を散ずればなり。ゆゑに修道士は實に其智力を保護し、窃に心中に起る所の小なる動搖を止め且除きて、其出入するものを思念の安靜により辨別せんと欲せば、己を神の面前に立て、常に髮らずして其眼を神に擧げんこと肝要なり。修道士の頻に繁忙なるは彼等がハリストスの誡命を行ふが爲に用意するの薄弱なるを示す徵候と爲すべくして神聖なる務の爲に彼等の短所を顯はすなり。

感覺の弱る時に方て、懸念より脫するなくんば、其靈中に光を尋ぬるなかれ安靜も沈默も尋ぬるなかれ、事の忙はしきに際して、其忙はしきを增すなかれ、さらば其智に於ても或は其祈禱に於ても高超を見るなけん。連綿として斷えざる祈禱なくんば神に近づく能はざるなり。祈禱の勞の後新なる懸念を智に課するは思を浪費せんの。

祈禱の時に於る涙と、叩頭と、祈禱を續くるを愛する熱愛を心中に惹起して、心情は賞讃すべき愉快と共に神に高く舉げられ、呼んで言、はん、我が靈は汝勇毅生活の神に渴く、主よ我れ何の時か來りて汝の顏の前に出でん。聖詠四十一の三。此酒を飲みて其後之を忘はれし者は、棄てられて如何なる憐むべき狀態にあるか、其衰弱の爲に何を取上げられたるかを獨り自から知るあらん。

人々と面會することも、彼等と談話することも、默想を專ら務むる者の爲に幾ばく惡しきか。實に兄弟よ、默想を守らざる者の爲に惡しきよりも特に惡しゝ。たとへば大なる白雨の俄に降りて樹果を枯らし且滅す如く、人々に面會することも、たとひ

甚だ暫時にして一見したる所は善良なる目的に出で、許可せられしものゝ如しといへども、默想の融和により僅に開披して、悔改の水邊に植ゑられたる（聖詠一の三）靈魂の莖を優しく美しく飾りし德行の花を枯らさん。又たとへは嚴霜が僅に地中より萌出たる野菜を襲ふて之を燒く如く、人々に面會することも德行の蔬菜を生じ始めたる智の根を燒かん。或事には節制なれども、或事には少しの缺點を有する人々と談話するは、常に靈魂を害するならば、無智にして思慮なき人々と面會談話するは、更にます〳〵有害なるにあらずや。予は最早俗人とは此事を言はず。たとへば貴族にして尊敬すべき人あり、爛醉して己が身の貴族たるを忘れ、其地位を汚すときは、酒により彼に入りたる他の思念の爲に其尊敬は一笑に付されん。此の如く靈魂の貞潔も人々に面會すると彼等と談話するとにより援されて、其戒愼を忘れ、其意の企圖は人の思に消滅して、生命を賞讃すべく建設するが爲のすべての基礎は根絕せられん。

故に默想の中に在る者に意思の高超と共に偶然に起るべき人々との面會及び放心或は何物をか見或は聞く爲に之に近づくのみなりとも、其視覺又は聽覺の門により入るものは神聖なるものゝ爲に心の冷淡と昏盲とを人に生せしむるに最早充分なるべくして、節制なる修道士に暫時にしてかゝる害を被らしむるを得べんば、不斷の面會とは之を何とか言はん。腹より出づる蒸發氣は智に神聖なる認識を受るを許さずして、却て之を昏ますこと恰も濕地より騰りて空氣を暗ます濃霧に似たるあり。然れども驕傲は暗中を行くを解せずして、賢明の何たるこゝの理會を有せず。げだし彼は昏迷に居りつゝ如何して此事を知るを得ん。此により彼は自から空虛薄弱にして主の路を認識するに堪へざるも、其昏まされたる思想を以て衆中に傲然たるなり。ゆゑに主は其旨を隱して彼に知らしめず、何となれば謙遜なる者の路を行くを欲せざればなり。我等が神に光榮は世々にあるべし「アミン」。

第七十　說教

夜間儆醒の行の愉快により神に接近し人に顯然たる者の行路の事、及び此の當事者は其生活の凡の日を蜜にて養はるゝ事。

人よ、すべて修道士の爲す所に於て夜間の儆醒より重要なる何等の務かありと思

ふなかれ。實に兄弟よ、儆醒は節制者の爲に重要にして最欠く可らざるなり。もし苦行者は身體に屬する事と暫時に過ぎ去るものとを慮るが爲に分心擾亂することあらずして、己を世より守り、儆醒を以て己を護するならば、其智力は暫時に飛揚すること羽翼を生ずる如くにして、高く神を樂むに至り、神を榮するに速に達すべくして、動かし易きと輕きとにより人間の理解に超越する知識に入らん。もし修道士は思慮を以て儆醒を務むるならば、己を見ること肉體を有せざる者の如くなるべし。けだしこれ實に天使の品位の行爲なり。此務に全生を送る者は其覺醒と心の不眠と其意思を神に專ら向はしむるとにより、大なる賜なくして神に棄てらるゝ能はざるなり。此儆醒を務むるに自から勞し之を以て卓越する靈魂はヘルワイムの如き目を有し、視力を不斷高めて、天の觀場を直覺せん。

予は思ふ知識と思慮とを以て此の大なる神聖の勞を選び此重きを己れに任はんと決心したる者は、此の選べる頌讃すべき行爲に於て格鬪して、晝は集會の擾亂と事物の懸念とより己を護せざること能はざるべし、然らずんば之により受けんを希ふ奇異なる果と大なる樂みとを失ふの虞あるによる。此事を等閑にする者につきては、予は敢て言はん、彼は勞すると、眠を禁ずると、讃美の歌を續くると、舌を苦しむると、徹夜の叩拜とを以て己を疲らすの何故なるを知らずして、反つて其心は聖詠を唱ふにも祈禱にも關るなく、恰も習慣により導かるゝものゝ如く、無思慮に勞するものなりと。若し此は予の言ひし如くならずんば彼が毎々勞して種を播くに拘はらず、大なる恩惠と果實を穫るの力とを奪はるゝは、何故なるか。けだしもし此等の懸念に易へて神聖なる書の誦讀に黽勉し、之を以て智を堅め、特に祈禱の爲に灌漑となりて祈禱に密着合同すると共に智に光明を與ふる儆醒に助くるならば、此誦讀により正しき路に向つて嚮導者を得べく、祈禱的直覺を存養するすべての爲に種子となるべきものと、意思を高超より遮止すべきものとを得て、旋回して無益なるものに養はるゝをゆるさゞるべく、神を念ふ記憶を不斷靈中に蒔き、神意を悅ばしめたる諸聖者の路を指示して、智は銳敏と聰慧とを得るに至らん、一言にてこれを言へばかくの如き行爲の成熟なる果實を得ん。

人よ、何故かく無思慮に己を處するか。夜は徹夜の拜を行ひ、詩章、歌頌、祈願を以て自から勞すれども、晝に至り暫時の勉勵により人と共に苦むが爲に神の恩寵を賜はるを汝には難澁にして容易ならざるものゝ如く意ふか。何故汝は自から勞して夜間に播くも、晝に至り其勞を滅して無結果なる者となり、其得たる所の不眠と、惺々

たる心と熱愛とを浪費し、人と物とに接するの煩はしきを以て徒らに己の勞を減して、之が爲に何等の確たる辯解もあるなきかげだし汝の爲に日中爲す所と心的談話の熟愛とは夜間の練習に相應するものとなりて、彼此の間に間歇あるなくんば、曾時にして汝はイイスの懷に投ずるを得ん。

さりながら汝が無思慮に生活すると、修道士の徹夜せざるべからざるは何故なるを知らざるとは此により明了なり。汝は此事を定められしはたゞ汝を困しめんが爲にて之より生ずる他の何の故にもあらずと思ふ。しかれども苦行者等が何の希望を以て睡眠に抗し、天性を強ひて、其身體と意思の不眠なる狀態により毎夜其願を獻ぐるの何故なるを思寵に依り確知するを賜はりし者は、日中保護の力を知るべく、ごは夜間の默想により智に如何なる助を與へ、思想の上に如何なる檻を執りて如何なる淨潔に達すると、强ふるなくして智に德行の群を如何に與へらるゝとを知り、思想の貴きを自由に認識せん。然して予は之に加へて言はん、もし身體は無力の爲に弱りて禁食する能はざらんときは、智は一の警醒を以て靈魂を尊貴にみちびき、心に開悟を與へて靈神上の力を確知するを得んたゝ願くは日中反抗する事故の增加するが爲に滅されざらんことを。

ゆ名に神の前に惺々たる心と新生命の認識とを得んと欲する汝に願ふ、汝は畢生儆醒を務めて怠るなからんことを。げだし之により汝の目は開かれて、此生涯のすべての榮と正義の路の力とを見んとすればなり。然れどもし願くは之れあらざらんことを。汝に怠惰の念の再び生ずるあらば、恐くは彼は汝に巢を作らん、何となればすべて此の如きを常に汝に許す汝の扶助者は汝を試みんと欲するによる、何の理由により汝は或は熱愛に或は冷淡に變ずるか、或は身體の薄弱によるか、或は常に汝が執行する聖詠を歌ひ續くることゝ、心を込むる祈禱と汝が行ふに慣れたる無數の跪拜の勞を忍耐するが爲に力の乏しきによるか之を試みんと欲するによる、ゆゑに愛を以て汝に願ふ、もし汝に此力足らずして、之を遂ぐる能はずんば、坐すといへども醒し、心にて祈禱せよ、眠に就くなかれ、すべての方法を用ひ、坐して善良なる思想を練りつゝ不眠を以て夜を送るべし。其心を頑にするなかれ、睡眠を以て之を呑まずなかれ、然らば恩寵に依り以前の熱愛と輕快と能力とは再び汝に來りて踊躍し、神を感謝しつゝ大に悅懌せん。何となれば此の冷淡と如此の悒鬱とは人を試驗し且探知するが爲に許さるゝものなればなり。もし人は己を奮起し、熱愛と少しく己を强ふることを以て之を己より振落すならば、恩寵は彼に近づくこと

以前の如くなるべくして、すべての幸福と種々の助けの隱るゝ他の能力の來るあらん。さらば人は以前の悒鬱と其變せし輕快と能力とを想起し、此差異と、動かし易きと、かくの如き變化を俄に己れに受けたるとを想像し、愕然として驚かん。さらば此時より聰慧なる者となるべくして、もし此の如くなる悒鬱の人に起るあらば、先の經驗により之を知らん。然れども人は初度に奮鬪せずんば、此經驗を得る能はざるべし。人は身體の性の衰弱せざる限りは、少しく己を奮起して戰時に忍耐するならば、幾ばくか智慧付けらるゝを見るか。しかれども此は最早爭鬪には非ず、薄弱のために已むを得ざるなり。げだし此場合に天性と鬪ふは益なきなり。さりながら他のすべての場合に於てはすべて人に有益なるものに己れを強ふるは人の爲に甚だ善なりとす。

不斷の默想と併て讀經すると、節制して食を甞むると、儆醒とは、其默想を破るべき何等の事故もあらずんば、速に意思を皷舞して愕然たらしめん。默想する者等に豫め力むるなくして自然に生ずる意思は、其流るゝ涙と其瞼を洗ふ富とにより、兩眼を洗盤の如くならしめん。

しかれども汝の身體は節制と儆醒と默想に專なるとにより鎭められざれど、汝の身體に天然の感動にあらずして放蕩なる慾念の起るあらば、知るべし汝は驕傲の意思を以て試みらるゝを。其食に灰を和し、其腹を地に貼け、汝の何を思念したるを探究して、其性の變化と其天然に悖る作用とを審知せよ。其時は思ふに神は汝を憐み汝に光を遣はして、汝に謙遜を學ばしめ、汝の罪は汝に成長せざるべし。ゆゑに自ら悔改を認めず謙遜を見付けずして、我等の心が神に安んずるに至らざる間は、奮鬪して盡力するを止めざらん。彼に光榮と權柄は世々に「アミン」。

第七十一　說教

罪なる敗壞は如何して生じ、如何して止むか其力と勢力の事。

人は罪の源因を實に中心より憎まざる間は、罪の勢力により引出さるゝ感觸を免る能はず。此は血を流すに至るも人に屈し下らざる最無慚なる戰にして、人の自由は德行に對する愛の一致を之により試さるゝなり。是れ即刺殺と名づけ、又格鬪と名づけらるゝにして、不幸なる靈魂は此の一の惡臭により靈中に生ずる避く可らざる戰の爲に弱らん。是れ罪の廣大なる力にして、之により敵は貞潔者の靈魂を

常に擾じて、淨潔なる感動は未だ曾て自己に全く受けざりしものを強て試みるなり。愛すべき兄弟よ、茲に於て己の忍耐と熱心と勉勵とを證せん。げだし是れ謂ゆる見えざる苦行の時にして、修道士の品位は常に之に勝つなり、此戰と會するに當り、敬虔なる心はもし力めて武裝せずんば、速に援されん。

主よ、すべての助の泉なる者よ、汝は此の時に於て、此の苦難の時に於て、彼の己を汝天の新郎に喜んで聘定し、汝と聖なる盟約を締ぶに眞實なる情を以てして虛僞を以てせざる靈魂を堅むる大なる力なり。ゆゑに眞理に對して誇る所の堅固なる城郭とすべての高處とを勇氣にして破壞する力を彼に與へ給へ、恐らくは其戰の血を流す時に當り、堪へ難く忍び得ざる壓迫により、其企圖の無效となり了らんことを。

此の猛烈なる戰爭に於て貞潔は苦行を常に支ふるには非ず、げだし人は試惑のために助なくして棄てらるゝによる。此の決戰に於て試みられたる無力の者は禍なり、何となれば此戰は己が思念と同意を爲して自己を打擊に付する者に對し、得たる所の慣習により大なる力を有すればなり。

至愛者よ、閑散を豫防せよ、何となれば彼に死の隱るゝことは確に知られて、彼無くんば修道士を捕獲せんと要求する者の手に陷る能はざるによる。彼の日に於て神が我等を審判するは、聖詠の爲にあらず祈禱を廢したるが爲にもあらずして、此の放下により魔鬼に入口を自由に與へらるゝによる。然れども魔鬼が自から其所を發見し、入りて我等の眼扉を閉る時は、暴虐と不潔とを以て我等に執行して、當事者を神の定罪と至重の罰に服せしめん、されば此の切要なるにはあらざれど、然も賢哲の晉する如くハリストスの爲に感るに値するものを放下したるにより、我等は彼の屬下とならん。己の意志を神に從はしめざる者は神の敵に從ふ、故に此の汝には小なりと見ゆるものも我等を捕ふる者を防禦する城壁とならん。啓示の精神に依り、庵中にて此を遂行することは我等が生命を守る爲に敎會の秩序を維持する智者を以て定められたり。此を放下するを不智者は認めて輕微と爲す。げだし此より生ずる害を彼等は看取せざるにより、彼等の路の始初も中間も無知の自由にして慾の惹れるに如かず。げだし時に合はざる此の自由の終は無慚なる奴隸の役なればなり。

汝に五感が活動して勢力を有する間は、何物に遭遇すとも、己を死者と思ふべし、何

となればもし汝のすべての肢體に罪なる火焰の滅するあらずんば救を得る能はざればなり。もし修道者の中誰か其心に此を自から豫防せんと言ふに同じ。其友を欺く者即其類を批たるゝも彼は之を知ることをさへ欲せずと言ふ者あらば、是れは律法に依るに詛に當る。之に反して自から己を欺く者は惡行の過失たるを知れざる、知らずとして自から之を蓋ふによりて如何なる罰をうくべきか。しかれども彼が之を知る所以は良心の責めは之を證す。知らざるを伴るを彼の知るは彼を苦めん。

呼慾の爲の機會は何ぞ愉快なるや。人は時として慾を斷つべく之より遠く離れて安靜を樂み、慾念が止むときは欣然として喜ばん、然れども人に慾の源因をあらざらしむることを能はず。故に欲せざるも誘はるべくして、我等は慾中にあるときは哀めども之が機會の我等に止まらんことを愛す。自らは罪を願はざれども我等を之に引誘する源因をば樂んで受く。此により後者は前者の勢力に於るの本源となるなり。慾の機會を愛する者は心ならず欲せずして慾の屬下となり之に苦使せらるゝなり。罪を惜む者は罪を犯すを止むべく之を告白する者は赦を受けん然れども人は先つ罪を敵視する心を求めずんは、罪の慣習を止むる能はずして、罪を犯したるを告白する先には赦を受る能はざるなり。げだし敵視は眞實なる譴逐の源因にして、告白は恥ぢて心中に生ずる傷める心の源因たるなり。

非難に値するものを惜まずして、之を其心中に懷抱する間は、此のすべての勢力の爲に其惡臭と汚穢とを感ずる能はざるべし。不合宜なるものを自から棄擲するに至らざる間は汝は如何なる恥に覊はれて、之が爲に幾ばく赤面すべきかを察せざるなり、しかれども自己の重荷を他人の上に認むるときは、汝に在る所の恥を察知せん。世より遠ざかるべし。其時は世の惡臭を察知せん。しかれども遠ざからずんば、世の幾ばく〳〵臭穢なるを察知せずして、反つて直に其惡臭に圍まるゝこと、芳香に圍まるゝ如くなるべく、其恥の露出を以て光榮の帷幕と爲さん。

世と世の開黑に遠ざかりて獨り己れに注意する者は、福なり。げだし聰慧と思慮とは生命を無益なる行爲に送る者に働き或は助ること能はざるべし。然り、其援さるゝ思慮は何れか當然なるを如何して區別するを得んや。酩酊して眠を催すを免れ、此酩酊せしむる子の如何に飽くを知らざるを他人の上に發見する者は福なり。其時は彼は己の恥を識らん。しかれども人が己の罪により酩酊したる子を自己に懷抱する間は、爲す所のものはすべて彼の爲に相應と見ゆること幾許なるか。もし天

性は自己の順序を失ふならば、酒に醉はしめらるゝも或は色に醉はしめらるゝも全く一樣なるべし。何となれば彼も此も緊要なる狀態より脫して、彼を以ても此を以ても一樣なる激發は之を己れに容るゝ體中に起れればなり。方法は異なれども溶解は一なり。變化は一樣なれども、源因の差は種々同しからずして、然も各人の感受性によりても辨別せらるゝなり。

凡ての安樂には艱難隨ひ、神の爲に受るすべての不幸は安樂を伴ふ、すべて此世にあるものは敗壞に屬せざるなうして、敗壞は此世に於ても、來世に於ても、又其出發の際に於ても、反對の源因により生じ、殊に放蕩なる奢侈により、或は此奢侈と反對して之を壓にする際に忍耐する苦難により生ずるならば、神が人を愛するにより此をも定め給ふは、或は其旅行の時に於て、或は其終りに於て、我等に罰を嘗みしめんが爲にして、其時は最早神の豐なる憐により甲の場合には或る報酬として乙の場合には賜質として路を過ぎしめんが爲なり。末後の際に至る迄善を求むるを禁せざれども、實に惡をば禁ず、何となれば惡に樂てらるゝは錄して言ふ如く罰に當る者なればなり。此世に於て罰せらるゝ者は自己の恥の爲に自己の地獄を嘗みるなり。

苦しき奴隸の役に先だつ自己の自由を戒めよ。戰に先だつ慰めを戒めよ。試惑と會するに先だつ知識を戒めよ、然れども悔改を成すに先だちて此と會せんを願ふ心の起ること屢々之あり。げだし我等は皆罪人にして何人も試惑の外にあるにあらざれば、德行の一も悔改の外にあるにあらざるなり。何となれば悔改の行爲は決して完全なる能はざればなり。悔改は救を捉へんを願ふ悉くの罪人にも幾人にも常に適當にして、成全に畛域ある無し、何となれば最完全なる者の完全も實に終りある能はざればなり。此により悔改は死に至る迄時をも又行をも限られざるなり。記せよ、すべての快樂は之に憎むべきものと苦味とを伴ふこと離れざる同道者の如くなるを。

變化の源因の合せざる喜を戒めよ。げだしすべて高上なる照覽の際るゝものに關して汝は之が變化の界限と源因とを理會認識する能はざるなり。直道に由り行く者と假定する者を恐れよ、何となれば彼等は謂ゆる道路の外を往來すればなり。容智を以て世の大艦を御するを能くする者はすべて世にあるものに變化すべきを感し給へり、されば此の變化の外にあるものは影なり。

肢體の安息には熱中と思想の擾亂とを伴ひ、過當なる行爲には煩悶を伴ひ、煩悶に

は熱中を伴ふ。さりながら甲の熱中は乙の熱中と同じからず。安息によりて起る第一の熱中には放盪なる戰を伴へども、煩悶より起る熱中には己が默想の院を築くゝ所々に流轉するを伴ふ。然れども適當にして熱心を以て續くる行爲は無價なり。此が減少は快樂を增し、過當なるは熱中を加ふ。兄弟よ汝の性の愚の汝に克つを忍耐せよ、何となれば汝は彼の永遠なる權威の榮冠を受くべき容智に備へらるればなり。其知識は肉體を有する者の才智より一層上にありて、天の像即世の王の來るとき成らんとする彼の樂みに備へられたるアダムの身を以て援劍を恐るゝなかれ、性の變化と援劍とに驚かさるゝなかれ、何となれば此業を愉快に受る者の爲には非ずして、死すべきを挫折する生命に居り、嬰兒の如き性を模ましめ、奢侈を寬縱して之を燃着融解せしむる生命に居るに非ざるなり。實驗の爲に汝が引入らるゝ苦行の難きを忍耐せよ、神より榮冠を受けて此世を去りし後安んせんが爲なり。彼の終りなき安息と諂はざる生命と完全にして易らざる攝理の定則と、天地萬物に宰たる神を愛するを要する生憐たることとを記憶せよ。パリストスの恩寵を以て我等も之を賜はらん、彼に光榮は始無き父及び聖神と共に今も何時も世々に歸す。〔アミン〕

第七十二　說教

心を守る事、及び幾徹なる直覺の事。

綱に庵中に居りて、眞實なる直覺の力を未だ得ずんば、常に「トロバリ」と「カフィズマ」を誦するとき、死の記憶と未來の望とを以て己を練るべし。是れ皆心を一に趨めて眞實の直覺に至る迄旋轉するを許さゞるなり、何となれば精神の力は慾より强ければなり。而して未來の望により神を記憶するを以て己を練るべく、「トロバリ」の趣旨を善く會得するを勉めて、すべて汝を慾望に奬勵する外部に屬するものを戒めよ。然

れども此と併て汝の庵中に於て汝が行ふ所の小なるものをも戒めよ。己の思想を常に試み、其すべての務に於て汝は目を有せんことを祈禱せよ、汝に喜びは此れより流れ始まるべくして、其時は蜜より甘き哀みを發見せん。

適切にして顯然なる德行を以てするにあらずんば、誰も慾に克つ能はざるべく、靈的知識を學ぶにあらずんば、誰も心意の高超を鎭壓する能はざるべし。我等が心意は輕し、もし或る默想を以て拘束せずんば、高飛して息まざらん。然れども前文に述べたる德行に於て全備するなくんば、此守護を受る能はざるべし、何となれば人は敵に勝たずんば平和に居る能はざるによる。而してもし平和が王たらずんば、如何して平和に許されたるものを見るを得ん。慾は隱れたる心の德行の爲に障碍となるべし、先づ顯然たる德行により慾の貶黜せらるゝなくんば、之が爲に內部の德行はあらはれざるなり、げだし牆外にある者は牆內にある者と交通する能はざるによる。太陽を圍黑の中に見る者はあらず、德行もかくの如し、打續く慾の擾亂の際には靈性にあらはれざるなり。

神の願と渴望とを汝に感せしめ給はんことを神に祈るべし。げだし此直覺と神の渴望の汝に生ずる時は世より遠ざかるべくして、世も汝より離れん。しかれども默想と苦行と之が爲に定められたる讀經に從事するなくんば、何人にも此を感せしむる能はざるべし、後者なくんば前者を尋ぬるなかれ、もし尋ぬるならば其尋ぬるものは漸々に變じて有形なるものとならん。會得する者は會得せよ、容智なる主は我等汗を以て此餠を食はんことを欲し給へり、是れ惡意によるにあらず、我等に不斷練あらずして我等死するを免れん爲なり。げだし德行は各他の德行の母なり。故に德行を生む母を棄てゝ母を搜す先に往て其女を尋ぬるならば、其德行は靈魂の爲に低價なるものとならん。もし之を自から棄てずんば速に死せん。

第七十三　說教

神を愛する表徵及び其働の事。

神に向ふ愛は天然に熱烈にして、もし人に過度に落るときは、其靈を狂喜なるものと爲す。故に此愛を感じたる者の心は之を容れて之に堪ふる能はず、却て其起れる愛の性質に準じて彼に非常の變化はあらはるゝなり。視よ、此愛の適切なる表徵は左の如し、人の面は火の如く喜ばしきものとなりて、其體は媛めらるゝなり。恐れと

耻とは彼より去りて、彼は狂喜する者の如くなるなり。心を一に趨むる力は彼より消失して、彼は失神する者の如くならん。恐るべき死を見て喜びとなし、其智力の直覺は天上の事を思念するを止むる何等の斷絶をも如何しても許さず。在らずして誰にも見えざるものは談話することを現在する者の如くならん。其天然の知識と觀察とは過去りて、外物の爲に惹起さるゝ感動を彼は官能を以て感知せず、何となれば何を爲すとも其を全く感せざればなり。因りて其智は直覺に騰上して、其意思は常に他の或者と談話する如くなるべし。

在昔使徒及び致命者等は此心醉を以て醉はしめられたり。一者は辛苦艱難し、誹謗を忍耐して、世界を周行し、他者は其斬伐せられし肢體より血を流すこと水の如くなりき。恐るべき苦難にも畏縮せずして剛毅に之を忍耐し、智者たりしも無智と認められたりき。而して或者等は野に、山に、巖穴又は地窟を遍歷し、紛亂の中に在て最整然たる者なりき。願くは神は我等をも此恩に達せしめ給はんことを。

汝は誰遁の都に入る以前に慾の擾亂を免れて安ずるを自己に認むるならば、信ずるなかれ。げだし敵は汝に或る網を備ふればなり。反つて平安の後に大なる動搖と大なる擾亂とを待つべし。もし德行の途上に於てあまねく住所を經過せずんば、其勞より安んずるを見ざるべく、聖なる誰遁の住所に達する迄は敵の奸計より免れて安息するを得ざるべし。神よ汝の恩寵を以て我等にも此に達するを得しめ給へ。

「アミン」

第七十四　說教

德行の種類。

苦行的生活は聖德の母にして、靈的知識の初級と名づけらるゝハリストスの奥義を感ずるの第一報は此より生ずるなり。誰も自づから欺くことなかれ、先見に誇ることなかれ。汚されたる靈は潔淨の國に入らずして、諸聖人の靈と配合せざるべし。涙と禁食と靜默とを以て汝の貞潔の美を平均にせよ。神の爲に受る小なる患難は患難なくして成就する大事に愈れり。何となれば任意の患難は信の實驗を愛にて證すればなり。之に反して安息の行爲は良心を眠らしめたる結果なり。故に諸聖人はハリストスを愛するにより其練達を自から證するに患難に於てしたれごも、爽快に於てせず。何となれば勞なくして成就するものは世の人々の義にして彼等は

外部に屬するものにより矜恤を行へども、自己には一も得る所あらざるによる。然れども汝苦行者にしてハリストスの苦難に傚ふ者よ、自己に於て勗ふべし、ハリストスの榮を味ふを汝に賜はらん爲なり。げだしハリストスと共に榮せられん（ロマ八の十七）もし體はハリストスと共に榮せられざるなり。終に人間の榮を輕んずる者は神の榮を賜はり、靈魂と共に其身體も榮せらるべし。げだし體の榮は神の助を以てする貞潔の從順にして、智の榮は神の事の眞實なる思辨なり。眞實なる從順に二樣あり、一は行爲に於てし、一は誹謗に於てす。故に體が苦むときは之と共に心も亦苦まん。もし神を知らずんば神に對する愛情は汝に起る能はず、もし神を見ずんば、神を愛し始むる能はず。然して神を見るは神を認識したる結果なり、何となれば彼を直觀するは彼を認識するに先だゝざればなり。

主よ我に與へ給へ、汝を認識して汝を愛し始むるは智力を竭して研究するにより得らるべき知識を以てするには非ずして智が汝を直覩しつゝ世の感觸を意中より棄ひ去る直覺により汝の性を讃榮する知識を我に與へ給へ、空想を生む意見より上に昇り、十字架の鎖を以て縛らるゝ汝を熟視して、之に智力を釘し、智的想像の影響を脫して、汝を不斷直觀する超性的直觀に自由に安んずるを我に與へ給へ、汝に對する愛の我に成長すると汝の愛に追隨して此世を棄つることを我に遂げ行はしめ給へ、我を起して汝の讃遜を曉らしめ給へ、げだし汝が聖なる處女に賴り我等の肢體を借りて之を己に負へる此住所に於て世に消光し給ひしは、此の不斷忘るべからざる記憶により我をして其性の讃遜を樂んで感得せしめん爲なり。

十字架に上る方法は二あり、一は肉體を釘するなり、他は直覺に入るなり、初は慾を脫したる結果にして、次は心神の働の結果なり。體は智に從はずんば智は從はざらん、智の國は體を十字架に釘する是なり、而して自由は靈智に從はざるときは智は神に從はざらん。初心にして幼稚なるを免れざる者に或る高上なるものを授くること難し。汝の王の童子たる國よ、汝は禍なる哉（傳道之書十の十六）己を神に從はしむる者には萬物も幾んど彼に從はん。己を認識したる者には一切の智識を與へらる、何となれば己を認識するは一切に於る知識の充滿にして一切は汝の靈魂の下に汝に屬すればなり。汝の生涯に讃遜が王となる時は、汝の靈魂は汝に服從して、之と共に一切は汝に服從せん、何となれば汝の心に神の平和の生るゝによる。しかれども汝が讃遜の外にある間は、たゞに慾のみならず、すべての事情も不斷汝を窘逐

せん。實に主よ、もし讒遜ならずんば我等を讒遜ならしむるを罷むるなかれ。眞實なる讒遜は知識の所產にして、眞實なる知識は試惑の所產なり。

第七十五　說教

不斷の禁食の事、自己に集中して一所に止る事、其結果の事、及び凡て此等を正しく適用するを知識により區別するを學ぶ事、

久しく右と左に試みらるゝ予は二の方法により幾回か己を試み敵の無數の打擊を受け、大なる救援を竊に賜はり、多年の間に經驗を求め獲て、神の恩寵により實地に確知したるもの左の如し。すべて善良なるものゝ基礎と、靈魂を敵の俘虜より回復し光にみちびきて生命に至らしむるの路は、是れ皆自己を一に集中すると常に禁食すると此二の方法に在り、即腹を節制すると一所に出でずして止り神を思ふを以て不斷の業とすると善智とにより己の爲に立てゝ規則とすることは是なり。感覺の從順は是より生ずべく心意の覺醒は此より生ずべく、身體に起る烈しき慾の鎭壓は此より生ずべく、思念の溫良は此より生ずべく、思の淸き感動は此より生ずべく、道德の行に勉勵するは此より生ずべく、高尙にして精微なる智的想像は此より生ずべく、何れの時にも流れて其量を知らざる涙と死の記憶とは此より生ずべく、意思を誘ふすべての妄想より全く遠ざかる純然たる貞潔は此より生ずべく、聰明と先見は此より生ずべく、神聖なる言の助により智の到達すべき深遠奧妙なる觀念と、心中に生ずる內部の感動と、聖なる力と眞實なる觀察とに於ても空しき妄想に於ても精神上に係るものゝ分開と區別とは此より生ずるなり。思想の海に於て緩慢と等閑とを截斷する徑路の間の恐れと、如何なる危きをも蹂躙して如何なる恐れにも勝つ熱心の畑と、すべての願欲を輕んじて之を心に消滅すると、之と併て暫時なるものに於ける何等の記憶をも忘れしむるの熱愛とは此より生ずるなり、之を略言すれば眞實なる人の自由と、心中の喜びと、パリストスと共に天國に復活するとは此より生ずるなり。

しかれどもし誰か此の二の方法を等閑にするならば、知るべし彼はすべて前文に述べたるものを以て己を害するのみならず、此の二の德行を輕んじたるが爲にすべての德行の基礎をも動搖せしむるを。此等の德行はもし誰か之を己に涵養し

て此を守るならば心中に於る神聖なる練習の起初となり、首腦となり、パリヌトスに至るの門となり、路となるべく、もし誰か之より離れ遠ざかるならば、之と反對なる二の惡弊に達せん、即身の放浪と無耻なる嗜甘とに達せん。これ如上の事に反對の始にして、此等は心中に於て慾に所を與ふるなり。

一の源因の第一起初は先づ柔順なる感覺を解放して之を節制の鏈鎖より脫せしめん、然らば此より終に何事を生ずるか。墮落に近づく不適宜にして不意なる集合と、視覺を鋭動ずる激浪の擾亂と、身體を管領して之を頷に繋ぐ目の俄に燃起つと、思の偏し易きと、墮落に向ふ遏む可らざる思念と、神の事に愛情の冷なると默想を貴ぶ念慮の漸々に衰べて其行爲を全く棄つるとを生せん、然して心ならざる種々の狀態に於て人に顯はるゝものと、此方より彼方に流轉する際に遇ふ所のものとに因り己に忘却せる惡しき行の再び新にせらるゝと、是より先に知らざる他の行を學ぶとを生せん。さらば神の恩寵により、心に守る記憶を忘れたるが爲に既に心中に死して斷盡したる慾念は再び動き始めて、心を之が爲に働かしめん。視よ是れすべて其他の事は詳しく言はず、且穿鑿せされども、彼の第一源因により現はるゝものなり。即身の放浪により獸想の難きを任ふを忍耐せざるが爲にあらはるゝもの

なり。

然るに他の源因の結果は如何なるか、即我等は豚の行を始むるならば如何なるか、己は如何なる行なるか。これ其腹に際限なく不斷滿たすを許して身體の需要を充す爲に示されたる靈智ある實體の適當に守るべき時を有せしめざるにあるにあらずや。然して是より終に何事を生ずるか。頭は重く、體は大に難澁にして塔へ難く膽は弱りて之により神の奉事を欠くの餘儀なきに至ること是なり。何となれば奉事に於て祖の叩拜を行ふに懶きと、通常の叩拜を粗畧にすると、意思の昏暗と冷淡と、思念の擾亂と、大なる昏闇とにより心が頑になりて思慮する力のあらざると、重密にして透見す可らざる濃霧の全心に瀰蔓するとにより、すべての神事に際し又讀經に際しても強き煩悶を生ずるとによる、げだし人は神の言の甘美を咀嚼するに堪へざればなり、又緊要なる事を成すに大なる懶惰と、地上到處に放浪せんとする制す可らざる心意を生ずべく、四體に液の多く聚ると、夜々色慾に滿たさるゝ汚穢なる幻像と取り留めなき形像の不潔なる妄想とを生ずべくして、此等は靈魂に透り心中に於て其望を不潔に成遂ぐるなり。されば不幸なる者の臥榻と衣服又は其全身も耻づべき不潔の多きに汚されて、其者に遷ぐこと泉よりする如くならん、而して

こは人に夜間にのみあるにあらず、日中にもあらん、何となれば身體は常に不潔を流して、其思念を汚す、よりて人は之が爲に貞潔を薬つればなり、人の全身を、擦ぐる愉快は不斷堪ふべからざるの熱により生ずべくして、誘惑する思念は彼に起りて其前に美貌を現じ、何れの時にも之と交談するを以て心意を刺激し且擦ぐらん。されば人は理性を昏ますにより、之を慕ひつゝ、少しも躊躇せずして此思念と配合するなり、是れ預言者が言ふ所のものに同じ、言へらく視よやソドムなる妹に報ゆるを、彼は奢侈にして食物に飽き足れり云々〔イエゼキイル十六の四十九〕此事を大なる賢哲の一人は述べて左の如く言へり、曰くもし誰か大なる奢侈を以て身體を養はゝ、其靈魂を戰に陷れん、さらばもし己に反りて自から勞を任じ、自己を制するが爲に己を強ひんとするも、肉體の非常に燃ゆるが爲に爲し能はざるべし、何となれば其慾望を以て靈魂を捕ふるにより起る所の刺激と肉痒とは强く且遏ればなり、此等の無法なる者の幾微を此により察するかと、彼は又言へり、肉體の快樂の温柔なると潤膩なるとを以て青年の慾は靈魂の受くる所となり、死は靈魂を圍みて人は神の審判に落つ。

之に反して己が本分の記憶に占有せらるゝ靈魂は己の自由に安んず、されば其懸念は大ならずして、道德のことを慮り慾を制し德行を守りて、悔ゆる所あらざるべく、成長するに隨ひ哀なき喜を誘引し、善なる生命を安然なる淺に引入れん、しかれども肉體の快樂は慾を熾にして、之を心中に回復するのみならず、靈魂をも根こそげ捩取るに共に不節制無秩序の爲に腹を燒きて甚しき奢侈に至らしめ、肉體の要求を時ならず充たしめん、此に勝たるゝ者は少しの飢をも忍耐して己を制するを欲せず、何となれば彼は慾の俘虜たればなり。

是れぞ嗜甘の恥づべき結果なる、之と相反して前文に著はす如く忍耐し一所に止りて默想を務むるの結果は靈魂に大なる益を與へん、故に敵も我等が天性を充さんを欲する天然の要求を熾ならしめ、惡なる思の想るを知りて、即此の如きの時に我等をして天然の要求を熾ならしめ、惡なる思の想像を我等に撒き、館くするならば慾をして猛烈なる戰に於て天性に勝たしむるに盡力す、而して人は罪中に溺る、故に敵の時を知る如く我等も自己の劣弱と自己の性の方とを知らんこと肝要にして、我等の力は彼の時に於て突擊と運動とに抗する爲に足るあらずして、意思の微細なることは我等の眼中に輕くして毛の如し、ゆゑに此等を察し我等と遭遇するものに抵抗する能はざるべし、されを不幸にして

我等は屢々陷り我等の敵の試みを多く實驗したる故に、終に智慧附けられて、我が安息の望を輕々しく遂ぐるを自から許さず、而して飢渴に勝を讓らざるのみならず、飢餓の我等を疲らし且苦しむるあるも其默想の地より移らず、我等の爲に便利の處に轉せずして、野より離るゝ爲に口實と方法とを自から設くることを爲さゞらん。けだし是れ敵の顯然たる謀計なり。しかれども野に居るならば、誘惑にかゝらざるべし、何となれば婦人をも又汝の品行の爲に如何なる有害なるものをも見ずして、不適當なる聲を聞かざるによる。

「爾は何爲れぞエキペトの途に在りてゲオンの水を飲みしや」（イエレミヤ二の十八）といふ、予が汝に告る所のものを理會せよ、小なるものに於て自己の忍耐と自己の練達とを敵にあらはすべし、大なるものを汝より搜さゞらん爲なり。此の小なるものは汝の爲に其敵を斥くる所以を指示して、彼に時を有せしめざるべく、汝の爲に大なる係蹄を穿たしめざるべし、けだし敵に聽從して己が默想の地位より五歩だも退くをゆるさゞる者は、聽從して野より離れ、或は里に近づくべきか。己が默想の庵にありて窓より一見するさへ肯んぜざる者は、庵より出づるを肯ずべきか。曉來最少量に食を吃するを僅に肯ずる者を時に先だちて食ふ念慮は捉へ得べきか。何等の低廉なるものにも飽くを恥づる者は、高價なる食物を願ふべきか。己の容貌を見廻すことさへ肯ぜざるものは他の美形を見るの好奇心に捉へらるべきか。

此に因りて見れば或者は最初小なるものを輕んじて之が爲に打勝たれ、かくの如くして敵に大なるものを以て攻擊するの端緒を與ふること明なり。此世の生命を暫時たりとも長うせんと、此事の爲に懸念するをなさゞる者は、願ふ所の死に誘引する殘害と苦難とを恐るべきか。是れ思慮ある戰なり、何となれば賢者は大なる苦行を企つるを自から許さずして、其小なるものに於てあらはす忍耐は彼等を大なる勞苦に陷るより保護すればなり。

是故に魔鬼は心中不斷の祈禱を廢せしめんが爲に最初より盡力し、其後定められたる時間に身體を以て行ふ祈禱と規則とをも輕んずるを勸むるなり。かくの如くして最初に意思は或る小量の食物と瑣細にして言ふにも足らざる食物とを時に先だちて食ふの弱きに從ふ、されど陷りて其節制を破るに及んでは人は過度と放埒とに滑り入らん。先づ人は己より衣服を脫するとき、或は身體の要求の爲に出づるあり、又は水邊に來るあるときは、其體の露出を見んとし、或は其肢體の他の美を見んと欲する望の爲に勝たれて（確言すればこは其眼中に瑣々たるものと見ゆ）其

感覺を鈍らし、或は敢て手を其衣裡に入れて其體を撫るを始むべくして、之に次で其餘のことは最早彼此相接して起らん而して是より先に心の堡砦を保護して、前文に言ひし如く、或る一事の爲に屢ひし者は、其時己の爲に廣くして危き入口を開かん、何となれば思念は水の如し、各方面より堰止めらるゝ間は善き秩序を守れども、少しく其堡砦より外に出る時は、其防備の破壞と大なる荒廢とを生ぜん。げだし敵は日夜我等の目前に立ち、我等が感覺の開けたる口により入らんとして、之に注目し、之を期待し、且之を熟視すればなり。ゆゑに我等は前文に言ひしものゝ中或る一事に於て懈怠を自ら許すときは、狡猾にして無恥なる此犬は我等に其矢を放たん。而して或時には天性は自から安佚と放縱と戲笑と思の高超と怠慢とを愛するを始めて、慾の泉となり、擾亂の淵となれども、又或る時には敵は之を靈魂に勸め入るゝなり、しかれども我等は終に吾が無視する所の小なる勞苦を以て大なる勞苦に換へん、げだし此の我等が輕視する勞苦は、既に示したる如く、多大の苦行と、遂げ易からざる勞苦と、最烈しき格鬪と、重き打擊とを預め遠ざくるならば、此の先んずる小なる勞苦により甘美なる安息を己れに求むるに誰か急がざらんや。

噫聰慧よ、汝は如何に嘆美すべき哉、如何にしてすべてを遠く先見するか、汝を得たる者は福なり。彼は青年の怠慢より救はれん。もし誰か其所有の瑣細なる物を以て大なる慾の療法を購求むるならば、彼は爲し得て善し。昔一哲學者あり、弱きによりて體を左右に搖動しけるが、此を覺るや、直ちに己を直なる態度に復して坐しぬ。人あり一見して大に之を笑へり、然るに彼は答ていへり、予は此を恐れしにあらず、乃怠慢を恐る、何となれば小なる怠慢は大なる危險を引起すこと度々なればなり。然れども予は秩序を破りしを速に改めたるが爲に此を以て予の覺醒と恐る可きにあらざるものをも輕んぜざることを示せり」と。視よ、哲學は人が何を爲すとも、たとひ微にして重要ならざる事に於ても、常に謹愼する者となるにあり。人が己の爲に大なる安息を預備して寢ねざるは、或る反對なるものを迎へざらんが爲にして、好時に之が源因を絕たば、瑣細なる事により小なる哀を忍耐し、之を以て大なる哀を滅すなり。

然れども無思慮なる者は此世の國の床上に安んじ、怠慢の爲に罰せられんよりは苦行の苦みを忍耐するの愈れるを知らずして、遠き國よりも近く小なる安息を貴ぶ。死は智者の望む所なり、たゞ願ふ覺醒せずして或る行を成せし爲に責を受けざらんことを。故に智者は言ふ、己の生命の爲に眠らずして惺々なるべし、何となれば

心意の眼は眞死と同性質にして、死の象なればなりと。抱神者ヲシリイ言へり自己に關係する或る小事に怠る者が大なる事に卓越すといふを信するなかれ。

事が汝に生命を與ふるに關係するならば煩悶するなかれ、此事の爲に死するを遲延するなかれ、何となれば怯懦は煩悶の表徴にして、怠慢は彼と此との母なればなり。障病なる人は二の病に苦むを自から報告す、此世を愛するは不信の表徴なり、然れども此世を愛するは、不信の表徴なり、然れども之を輕んずる者は全靈を以て神を信ずるなり。

誰か危難と苦行と誘惑となしに神に近づきし者あらば汝も彼に效ふべし、心の剛毅と危難を輕んずるとは左の二の源因の一により生ず。即或は頑心によりて生じ、或は神を信ずる大なる信念により生ず。頑心には驕傲を伴ひ、信念には心の謙遜を伴ふ。人は先づ己の量に臨ひ神の旨を行はずんば、神に依賴するを得る能はざるべし。げだし神に依賴すると心の勇氣とは良心の證明より生じて、たゞ我が智の眞實なる證明により我等は神に希望を有するなり。然れども智の證明は人が力に準じて爲さゞるべからざる所の事に怠るを良心の少しも咎めざるにあり。もし我が心は我を罪せずんば神の前に毅然たるべし（イオアン一書三の二十一）ゆゑに勇毅は

道德と善なる良心に進歩の結果にして、苦しき行爲は肉體に屈從する是なり。神に依賴するを多少己れに感ずる者は、此の殘忍の主人たる肉體に餘儀なく役事するを最早肯せざるべし。我等が神に光榮は世々に歸す（アミン）

第七十六　說教

沈默と默想の事。

不斷の沈默と默想を守ることは左の三の源因により人に生ず、或は人間の名譽の爲、或は道德に銳意熱心するが爲に生じ、或は人が或る神聖なる交通を己の內部に有して之に心を引かるゝにより生ずるなり。故にもし何人にか此の後なる源因の一あるなくんば、彼は先なる劣弱を病む者なること必せり。道德は身體上に行はるゝ種々樣々なる行の顯現には非ずして、其希望に於る最賢明なる心にあり。何となれば正しき目的は彼を神に依るの行に結び付くればなり。智は身體上の行なくしても善を成すを得べし。しかれども身體は心の聰慧なくんば何を爲すとも之より益を引出す能はず、さりながら神の人は善なる行を成すが爲に便宜を發見するときは、其爲す所の勞を以て神に愛を證せざるに堪ふるあたはざるべし。第一は常に進

步す、第二は頻に進歩すれども、時としては然らず、しかれども人が慾を起すの源因より常に遠ざかるを以て瑣事と思ふなかれ、我等が神に光榮は世々に歸す、アミン」

第七十七　說教

肉體上の感動

時に合はざる好色の強き念慮あるなくして肢體の下部に生ずる感動の燃ゆるが如く起り、心ならずして靈魂を不幸に引誘するは、腹を飽かしめたるの結果なること疑なし、しかれども腹は食の節制を守るも、肢體は如何なる狀態にてか心ならず感動するならば、知るべし身體其ものに慾の泉のあることを、されば此戰に於て己の爲に强固にして勝たれざる武器となすべきは、婦人の顏を視るより遠ざかるにあり、何となれば自然が自己の力を以て爲し得る所の者に反對者は逆こと能はざればなり、げだし子を生むが爲又此苦行を務むる者を試みん爲に神が天然に下種し給ひしものを自然は忘却すると思ふなかれ、しかれども欲する所の望が目的物より遠ざかるは、肢體に於て慾念を殺ぎ、之を忘れしめて、之を滅さん、或る思念は最遠き目的に關してたゞ意中にのみ生じ、輕微にして僅に覺ゆる感動を起さん、しかれども或る思念は目的を視るに必意を埋めしめ、之を自から忘れしめずして、切に慾念を煽動し、之を以て人を養ふこと、たとへば油が燈の燃ゆるを養ふ如く、既に死して消えたる慾念を燃起すべくして、肉體の海は思想の船を動搖攪亂するなり、子を生むが爲に我等に固有する天然の感動は、外より附加するものなくんば、任意の淨潔を亂して、貞潔を動搖せしむる能はざるべし、何となれば神に向ふ善良なる任意に勝つべき力を神は天性に與へざればなり、然れども誰か或は刺激の爲或は肉慾の爲に煽動せらるゝならば、其時彼をして天性の境を脫して自己の本分を超えしむるものは、天性自然の力にはあらずして、意思の引誘により、我等が天性に附加する所のものなり、神は何を造るも、すべて秀美に且適當に造り給ひき、されば天然に適合する定限を我等に於て正しく守る間は、天然の感動は我等をして强て路を離れしむることは能はず、反つて肉體に一の整然たる感動起り、我等に天然の慾あるを知らしむるのみにて、貞潔を妨ぐべき痒感と援亂とを生せしめざるべく、又刺激の爲に心意を暗まさゝるべく、平安なる狀態より恐るべき狀態に引誘せざるべし、しかれども時として感じ易き慾に誘はるゝあり、之が爲に刺激も往々天然に悖る方向を取る、或は食に耽り、或は飮を貪りて定量の外に超ゆるあり、或

は婦人に接近し、又は觀望し、或は女談に耽り、之が爲に體中に慾火の燃えて速に蔓延するあらば、此時は或は體中に液汁の多きに因り、或は種々なる物を觀るに因り、その天然の温良を變じて猛烈とならしめん。

然れども時として我等が自負の爲に神意により肢體に感動を起すことあり、而して此感動は最早以前の如きものにはあらざるなり。げだし此戰は自由なる戰さ名づけらるべくして、人性一般の行路は、此戰に於て顯然とあらはるゝなり。されど我等が自負の爲に放任に因り生ずる此戰の事につきては、知るべし、こは我等が久しく己れに注意して勞苦するのみならず、多少己を進歩せりとさべ思ふとき、我等に謙遜を學ばしめんが爲に此戰を爲すを許さるゝをされや此源因あるなく、我等の力に應せずして起る所の他の戰は、これ我等の怠慢により生ずるなり。げだし天性は美食の爲に感じ易き嗜慾は加へて或る物を自己に受るときは、其造成の時に定められたる秩序を守るを最早肯せざるなり。患難と庵中に止まりて出でざるさを隨意に拒みし者は罪を愛し始むるを餘儀なくせらるゝなり。げだし患難なくんば怠念の誘惑と訣別する能はざるべし。勞苦の加はる程は罪は少なくならん。何さなれば、患難と危懼とは肉慾を殺せども安息は之を養ひ且長せしむればなり。

終に我等は窮乏にあるときは、神と其使等は悦べども、安息にあるときは、魔鬼と其役事者の悦ぶことを予は明白に確知せり。神の誡命は患難と困迫の中に成就せらるべきものなるに、我等は之を賤んずるならば、これ最早我等は神の命令に反き、我等が安佚によりて生ずる慾念の爲に誡命を輕んずるを謀るものにして、道德の因たる困迫と患難とを無爲ならしめ、我等自己に受る所の安息の量に循ひ慾に所を與ふるなり。何となれば壓迫せらるゝ體に於ては意思は徒らに高超する能はざればなり。誰か勞苦と患難とを悦んで已れに任ふときは、思念を力めて抑制すちを得べし。何となれば此等の思念は勞苦の爲に休息せしめらるゝによる。人が以前の罪を記憶して己を罰するときは、神も彼を安んせしめんを慮り、神の路を離れたるが爲己れに罰を加へて悔改の號と爲すを神は悦び給ふべくして、人が靈魂を强ふる程は、其尊敬は特に神を以て增加せらるゝなり。然れども すべて道德に源因せざるの喜は之を受けたる者に肉慾の感動を直ちに煽揚す。さりながら我等が此を言ふは、其意すべての慾望に關するものにして、天然の希望に關するには非るなり。我等が神に光榮は世々にあるべし。アミン。

第七十八　說教

誘惑の各種類、及び眞理の爲に起る誘惑を忍耐する、は幾許愉快にして、善智なる人は如何なる階級により昇進するか。

道德の彼此相承るは道德の路の難く苦しきものとならざらんが爲なり、序に循ひ之に進歩して此事に於て自己の爲に輕減を見るを得んが爲なり、而してかくの如く善の爲に忍耐する困難が或る善なるものゝ如く嘉はしきものとならん爲なり。けだし誘惑を悦んで忍耐するの自信なくして、己を之に備へずんば、何人も眞實の無慾を得る能はざるべし。又己を患難をうくるに備へたるにより身體上の安息に超ゆるものを受るを得べしと信じたる者の外は、何人も誘惑を忍耐する能はざるべし。故にすべて己を無慾に備へたる者は、先づ患難を愛するの心を喚起せらるべくして、其後此世にあるものを求めざらんとの思を生せん。而してすべて患難を忍耐するに着手する者は、先づ信仰を以て堅められて、其後患難に就かん。物體に屬するものを己れより奪ひ去れども、官能の勢力即視ると聽くとを自から除かざる者は、己の爲に二倍の患難を備へて、二倍に苦み且悲まん。之を確言すれば嗜慾に屬する物を己れより奪ひ取れども、感情は此等を樂まば、何の益あらん。げだし此等の物によりて起さるゝ感應により人は以前事を行ふ時に容忍せしものを同く容忍せん。何となれば之に慣習したることの記憶は其意中より去らざればなり。然れども其物なくして、其物を思ふ心の想像は、人に痛苦の感を起すならば、もし其物が我等の側にありて、我等に接近するならば、之を何とか言はん。終に遁世的生活は太だ美はし、何となれば大に協力して思念を太く抑壓し、遁世的生活に止まるを以て我等に力を入れ、人に及ぶ遑く可らざる患難を大に忍耐するを敎ふればなり。

生活の狀態の汝と同じからざる人は、たとひ極めて智なりとも彼より敎訓を借らんと求むるなかれ、實地に試みずして自己の推究に依り判斷する該博なる哲學者よりも、無學なれど實驗を以て事を試みたる人に己の思想を信任すべし。實驗とは何ぞや。實驗を得るとは人が或る事物に接近せず、之に關する知識を己れに受けずして、時々之を熟視するのみなれども、之と久しく交るにより、其益と其害とを實驗上明に覺知するをいふ。げだし物は外見上有害なるが如く見ゆれども、內部には全

く益を滿てるを認めらるゝこと往々之あり。之と反對なる者のことも之と同く了解すべし、即物は有益なる如く見ゆれども、內部に害を滿てること稀なりとせず故に見たる所は有益なる其物より損害を受る者多く之ありて、知識の證明は眞實にあらざるなり。故に如何なる判斷を要するを忍耐して熟思するを能くする勸敎者を益用すべし。此によりて見るに信用すべきの價値あるものは、すべての敎訓を與ふる者にあるには非ずして、たゞ先づ自から己の自由を善く管理して非難と讒言とを恐れざる者にあるなり。

途上に於て躓ずべからざるの平安を見る時は、恐れよ、何となれば諸聖人が艱難の足を以て蹈破れる直道を遠く離るればなり。けだし汝が未だ帝都に達せずして途上にあるに當り、汝の神都に近づく表徵となるべきものは左の如し、大なる强き誘惑は汝を迎へ、いよ〳〵近づきいよ〳〵進めば汝に臨む誘惑は殊に加はらん故に其途に於て最大最强なる誘惑を己の心に感ずるならば、知るべし此時汝の靈魂は實に高上なる新なる階段に窃に入り、其立つ所の地位に於て恩寵の增加したるを、何となれば恩寵の大なるに準じ之と同樣の尺度を以て神は靈魂を誘惑の悲みに引入るゝによる、而し其引入らるゝ誘惑は惡習と顯然たる行爲とを止むる爲に或者等が遭遇する如くなる世俗的誘惑にはあらざるなり。之と同く誘惑を以て有形的擾亂なりと解するなかれ、是乃ち修道士の爲に其默想に適當する所の誘惑にして、此事は後に至りて詳述せん。而して靈魂は薄弱にして大なる誘惑に堪ふる充分の力ある無く、隨て其誘惑に入らざらんことを願ひ、神も之を聽許するならば確に知るべし、靈魂が大なる誘惑の爲に充分の力を有せざる程は大なる賜の爲にも不充分にして、大なる誘惑に近寄るを禁せらるゝこと如く大なる賜をも禁せらるゝことを、何となれば神は大なる賜を與へざればなり。神に造られしる者等の理會すべからざる神の容智に依るに、賜は誘惑に準じて神を以て定めらるゝなり。終に神の照管を以て汝に遣はさるゝ甚しき誘惑に依り汝の靈魂は神の威德より如何なる尊敬を受くるかを理會せんがけだし慰安も悲哀に準ずべければなり。

問　然らば何ぞや先づ誘惑ありて其後賜あるか、或は先づ賜ありて其後最早誘惑は來るか。

答　もし靈魂は己の尺度よりも大なるものと雖て受けたる恩寵の神とを先づ窃にうけずんば、誘惑は來らざるべし。此事は主の自から受け給ひし試みも、同く亦使

徒等のうけたる試みも之を證するなり、彼等は撫恤者をうけざる間は、試に入るを許されざりき。幸福を受くる者には誘惑をも忍ぶこと適當なり、何となれば彼の患難は幸福の後にあればなり。衆人と此の如く爲し給ふは善なる神の旨なり。而して此事は實に是の如く恩寵は誘惑の先にありと雖も、然れども自由の實驗の爲に誘惑を感ずるは必ず恩寵を感ずるに先だつ。げだし恩寵は何人にも決して誘惑の實驗に先だゝざるなり、恩寵は智力に於ては先慮すれども、感情に於ては遲延す。而して此等の誘惑の時に於て毫も相同じからざる二の正反對なる感情を有するは、げだし諸聖人の啓かれたると恐れとを有するは己に我等に適當なり。喜を有するは、げだし諸聖人の啓かれたる路により、確言すればあらゆる者を復活せしむる者の啓かれたる路により行く者と認めらるゝによる、こは誘惑を考査するにより明白なるべし。然して我等恐れを有せざるべからざるは、驕傲の爲に誘惑を受るを免れん爲なり。さりながら謙遜なる者は恩寵を以て智慧附られて此のすべてを區別し、且確知するを得べし、即如何なる誘惑は驕傲の結果なると、如何なる誘惑は愛を蒙る者を鞭撻するが爲なるとを區別するを得べし。善良なる行爲に入りし時と、其行爲が成長したる時の誘惑は心の驕傲に向つて之を瞭解せしむる爲に放たるゝ誘惑とは同じからざるなり。

第七十九　說教

驕傲の事。

驕傲なる神の敵の試惑。

其思を以て神の仁慈の前に高ぶり、傲然として神の仁慈を辱かしむる無耻の人々

謙遜の德ある神の友の誘惑。

靈魂を以て靈魂を發達成長せしめんが爲に起る所の誘惑あり、靈魂は之を以て教訓せられ、試驗せられて、苦行に引入れられんが、其誘惑は左の如し。怠慢なり、身體の難澁なり、四肢の衰弱なり、煩悶なり、思想の擾亂なり、身體の溺弱より起る狐疑なり、身體の靈魂と、死せるが如き心と、謙遜とを得べくして、人の造成者を渴想し始むると否とは之を以て確知せらるゝなり。照管者は誘惑を以て受る者の力又は其必要に平均せしむ。愚安と打擊と、光と暗と、戰と助と、之を畧言すれば狹きと廣きとは我等に渾然として融合するなり。而して是は人が神の助により進歩する記號となるべし。

第七十九　說教

に對し、神意によりて起る誘惑は、左の顯然たる魔鬼の誘惑にして、心靈の力に超絶するなり、即人々の有する智慧の力を奪はるゝと、其慢心を抑へん爲に放たるゝ放蕩なる思を內部に感じて、安心を與へざると、速に怒るとすべてに我意を張りて諍論し、非難せんを欲すると、心に衆人を輕んずると、才智の全く迷ふと、神の名に對する愚にして笑ふに堪へたる非謗之を確言すれば涕泣に値する非謗と、其思想は人々之を輕んじて、其尊敬を無視し、陰にも陽にも種々の方法を以て之に恥を蒙らしめて魔鬼より侮辱せらるゝと、終に世と交際往來して、顧えず嘿々し、荒唐放言し常に己の爲に新奇を尋ね、且は僞預言をさへ搜し己の力に過ぐる大なるものを約せんとすること是なり、視よ心靈上の誘惑は此の如し。

身體上の誘惑に屬するものは下の如し、即纏綿として久きに亙り、人の易く治すべからざる病の發作と、惡者及び無法者と始終相會することと是なり、或は凌辱者の手に陷り、其心は彼に且常に故なくして神を畏るゝにより搖動すると、岩石高處又は之に類する處より墜落して、身體の爲に恐るべき挫折を屢々受ると、終に神聖なる力と信の望みとを以て心を助くるものに乏しきを感ずると是なり。之を畧言すればすべて能はざるものと力に超ゆるものとは彼等自己と其近者とを追ふなり、我等

があらはしたる此のすべては驕傲の誘惑の數に屬す。

此等の誘惑の始めて人に現はるゝは、其限中に己を賢なりと思ひ始むる時なるべくして、かくの如き驕傲の意思を己に有するに準じて人は此等の悉くの不幸を經過せん。終に其誘惑の性質により汝の心意の幾微の路を歸結すべし。もし其誘惑の或ものは先に述べたる誘惑と混ずるを見るならば、知るべし汝が此等を有する程は驕傲は汝に深く徹底するを。

又誘惑につきて歸結すべき他の方法をも聽くべし。すべて困迫なる事情と凡そその患難とは、もし其際に忍耐せずんば、二倍の苦みとならん、何となれば忍耐は人に於て不幸を反拒すれざる、怯懦は苦の母なればなり。忍耐は慰安の母にして、心の廣きにより常に生せらるゝ或る力なり。人は所繫して退かざると涙を注ぐとにより得らるべき神聖なる賜なくんば、其患難に於てかくの如きの力を見んこと難し。

人を更に大なる患難に服せしむるは神の意なるときは人の怯懦の手に落つるを許し給ふ。怯懦は人を屈服せしむる煩悶の力を生み、之により人は心靈の壓潰せらるゝを感せん。是れ地獄を試みるなり、此により憤心は人を襲ふて、百千の誘惑は之より流れ出でん。擾亂、忿怒、詬濱、運命を怨ふると、思の轉變して定まらざると、一方よ

り他方に移ること等是なり。もし汝は此のすべての源因は何なりやと問はゞ、余は答へん、汝の怠慢なりと。汝は自がら之が爲に療方を尋ぬるを盛らざりき。此のすべての爲に療方は一なり、たゞ此療方の助により人は其心に慰藉を速に見ん。こは如何なる療方なるか。心の諫遜是なり。諫遜なくんば何人も此等の惡の障碍を破る能はずして、不幸の彼に勝を制するを直に發見せん。

怒るなかれ、子は汝に眞實を言ふ。汝は心を盡して諫遜を尋ねざりき。もし欲するならば諫遜は汝を其弊病より脫せしむるを見ん。諫遜に準じて汝は其不幸に於て忍耐を與へらるべく、忍耐に準じて、汝の患難の重きは輕くせられて、慰藉をうくべく、然して汝の慰藉に準じて、神に對する汝の愛は增々大ならん。義を愛する我等の父は其眞實なる子の爲に誘惑を取上げずして、誘惑に於るの忍耐を彼等に與へ給ふ。されば彼等は其忍耐の手を以て此の悉くの幸福を受けて其靈を全うせん。願くは

ハリストス神は其恩寵により我等心の感謝を以て彼を愛するにより、惡を忍耐せしめ給はんことを。アミン。

第八十　說教

德行の種類の說明、及び彼等は各々如何なる價値ぞ如何なる特質を有するか。

身的德行は默想により身體を物體的なるより淨むれども心の德行は靈魂を諫遜にし、之を粗き有害なる思より淨めて、慾の爲に占有せらるゝを免れしむるのみならず、特に直覺に專ならしむるなり。此直覺は靈魂を殆ど才智を脫ぐに近づかしむべくして、之を非物的直覺とは名づくるなり。是れ即靈的德行にして、思を地に屬するものより昇せて、之を第一の靈的直覺に近づかしめ、其思をも又其言ふべからざる光榮の直覺をも神の前に立て、是れ即神の性の大なることを思ふ想像の興起なり。智を此世と此世の威嗣より離すなり。之により我等は彼の許與せられたる望に堅く立ちて、之を遂ぐべきを保證せられん。是れ使徒の謂ゆる勸誘（ガラティヤ五の八）即保證にして我等に許約せられたる希望により心は想像を以て歡喜に導かるゝなり。

神に依る身的生涯とは身體上の行爲なり、身體上の行爲と名づけらるゝものは道德上の實踐を以て肉體を淨むるが爲に顯然たる動作によりて行はれ、之を以て人は肉體上の不潔より淨めらるゝなり。心的生涯とは審判の事、或は神の義と神の定制の事を念々思慮すると共に撓まず續行する心の作用にして、之と同く連綿として斷えざる心の祈禱と、個々に於ても一般に於ても全世界の中に窺はるゝ神の照管と其慮の事を思ひ、神秘なる靈的範圍に慾に屬するものを一も起らざらしめんが爲に隱なる慾より己を保護すること是なり。是れ皆心の行爲にしてこれを名づけて心的生涯とはいふなり。靈的實踐と名づけらるべき生涯の此行爲により心は益々精微になりて、天然に反する空しき生活と親むより遠ざかる、然れども其後時として喚起せられて肉體の需要と成長の爲に造られたる五感に屬する物を回想看視するを始むべくして、其物の助により體中の四元素に力を與へらるゝ所以を了解せん。

靈的生涯とは五感の與からざる實踐なり。此事は神父等あらはせり。諸聖人の智は此生涯を己れに受るや、物體觀〔Ὑποστατικὴ〕と肉身の肥大なるとは直ちに中間より奪去られて最早聰明なる智的觀望始まるべく〔物體觀とは元始天然の受造物を指す〕人は此の物體觀より容易に高く擧げられて、寂然たる生涯の認識に到り達せん、これ明に說明する如く神に驚嘆するなり。是れ未來の幸福を樂むときの高上なる性狀にして、不死なる生命の自由と復活の後の生命に與へらるゝなり、何となれば人性は受造物に對する何等の念頭をも全く有せず、彼處に常に神に驚嘆して已まざればなり、けだし何か神と同じき物のあるあらば、智は或時は神を以て其物に引寄せらるべく、或時は其物自から之を引寄せん。さりながら受造物の如何なる美も其未來の革新に於ても、神の美よりは遠く降るならば、如何ぞ智は其看望に於て神の美より遠ざかるを得ん。然らば何物なるか、心を悲ましむるものは死するの免れざることなるが、或は肉體の重きか、或は親族の記憶、或は天然の要求、或は艱難、或は障碍、或は知れざる心意の高慢、或は人性の不完全、或は元行の圍繞、或は相互の面會、或は煩悶、或は人を疲らす身體の勞苦なるか。全く然らず、此すべてのものは世に之あるに拘はらず、慾の覆を心の眼より脫して未來の榮を達觀する時は、思は直ちに高く昇せられて、狂喜大悅せん。神は此生命に於て如此の性狀に界限を置て、幾ばくか此に躊躇せしむるを爲さゞるのみならず、畢生の間人に此事を許與せられしならば、人は此世に於ても之を看望するより遠ざかる能はざるべし、矧んや前文に計算

したるものゝ絕て有る無き處に於てをや。けだし此の道德は界限を有せずして、生涯の爲に之を賜はるならば、我等も眞實實際に王門の內部に入らん。此によるに如何して智は此の奇異神妙なる直覺を避け且之に遠ざかりて、或る他物の爲に阻止せらるべけんや。禍なる哉、我等は自己の靈魂を知らず、如何なる生涯に召さるゝをも知らずして却て此の薄弱なる生命と、此の生存の狀態と、世の患難と、世其ものと、世の惡弊と、其安樂とを何か價値あるものゝ如く思ふ。

然れども ハリストス、獨一全能なる者よ、力は汝にあり、心の路を汝に向くる人は福なり」聖詠八十三の六。汝主よ、我等の面を世に背けて汝を慕はしめ給へ。然らば我等は世の如何なるを知り、影を實體の如く信ずることの息むに至らん。主よ、死に先だちて、我等の心に勉勵を更に起して之を新にし給へ、我等が出發の時、我等此世に入り且出づるの如何なるを知らん爲なり。然らば我等は最初汝の旨に依り生命に召されたる其事を遂行すべく、次で聖書に約する如く汝の愛を以て第二の造成に備へ給ひし大なる幸福を受けんとの願に滿たさるゝ希望を感受するに至るべくして、我等は機密を信ずるにより、此記憶を守らん。

第八十一　說教

肉體と靈魂と智との淨潔。

肉體の淨潔は肉體上の汚穢に犯されざる是なり。靈魂の淨潔は心中に起る隱なる慾念より自由を得る是なり。然して智の淨潔は奥義の啓示により成就せらるべし。けだし智はすべて粗大にして五感に屬するものより潔めらるゝなり。小兒は身體に於ては無罪にして、靈魂に於ても無慾なれども、誰も彼を名づけて智に於ても淨潔なるものとは言はず。けだし智の淨潔は天を觀望するの行動其ものに於けるの完全にして、彼の天上界の高上なる整飾と無數なる奇蹟の靈妙なる力により五感の關係を待たず喚起せらるべく、而して此樂みは彼等の見えざる勤めにより、智力を以て想像し得らるゝ幾微神妙なる啓示の不斷何れの時にも變化するものを以て彼此の爲に分與せらるゝなり。我等が神は自から我等に授はれざる智力を以て神を直視するを賜ふべくして、其後直に之を洞看するを世々に賜はらん。彼に光榮は歸す。アミン」。

第八十一　說教

第八十二　說教

靈的智慧に充たさるゝ有益なる主眼。

信仰は機密の門なり。身體の目は五官に屬する物を見る如く、信仰は精神の目を以て神秘なるものを熟視す。神父等言ふ如く我等に心靈の目の二あるは身體の目の二ある如し、然れども視覺の要求は心靈の目各々同じからず。一の目を以ては天地萬物に隱るゝ神の榮の奥秘を視る、即神の力と容智と又我等を統治するの大なるにより理會せらるべき神の照管の我等に關するものを視るべくして、之と同く其目を以て我等と同く奉事する天上の品位を直覺するなり。しかれども他の目を以ては神が我等を靈界の機密に引入れて我等の心中に信仰の海を開拓するときは、至聖なる神の性の光榮を直覺せん。

第八十三　說教

悔改の事。

恩寵に恩寵を加ふる如く人に洗禮の後悔改を與へらる、何となれば悔改は神により生るゝ第二の更生なればなり。而して我等は信仰により聆質を受け、悔改により其賜物を受くるなり。悔改は熱心を以て尋ぬる者の爲に開かれたる憐の門にして、我等は此門により神の憐みに入るべく、此入口の外には憐を看出さゝるなり、神聖なる使徒の言ふ如し、曰く「人皆罪を獲義とせらるゝは彼の恩寵に賴る」〔ロマ三の二十三、二十四〕悔改は第二の恩寵にして信と畏れとにより心に生ずべく、而して畏れは靈界幸福の樂園に達するに至る迄は我等を統御する父の杖なり、然れども既に達するときは彼は我等を棄て去らん。

樂園は神の愛にしてすべて幸福の承る糧により養はれにる處にして、生命の樹の果を彼處に味ふや、彼は呼んで左の如く言へり、曰く「神が己を愛する者の爲に備へしものは目未だ見ず、耳未だ聞かず、人の心に未だ入らざるものなり」と〔コリンフ前二の九〕此樹の果は魔鬼の陰謀の故にアダムに禁せられたり。生命の樹は神の愛にして、アダムは之より離れたり、ゆゑに其時より彼は最早喜を見ずして、荊棘の地に勞動辛苦せり。神の愛を奪はれたる者はたとひ正道を行くといへども、原人の陷りし後食ふを命せられたる汗の餅を自己の勞により食はん。愛を受るに至る迄は我等が爲す所は荊棘の地に於てすべ

くして、我等の種くは義を種くと雖、我等は荊棘の中に種き且之を刈りて、時々之が爲に傷つけらるべく、己を義とするが爲に何を爲すありとも、面に汗して生活せん。然れども愛を得る時は、天の餅に養はれて、勞動辛苦なしに力を堅められん。天の餅は天より降りて「世に生命を與ふる」〔イオアン六の三十三〕ハリストスなり。是れ即天使的食物なり。

愛を得たる者は毎日毎時ハリストスを食ひ、之によりて不死なる者とならん、けだし言へり、「此の餅を食ふ者は世々に生きん、我が與へんとする餅は云々」〔イオアン六の五十一〕イイススなる愛の餅を食ふ者は福なり。しかして愛を食ふ者はあらゆる者の上に存在するハルストス神を食ふ所以なるをイオアンは證明して「神は愛なり」といへり。終に愛に生活する者は神により生命の果を產すべくして、猶此世に於て、茲に感ずる所のものにより彼の復活の空氣を嗅がん。此空氣を以て義人等は復活の後に樂まん。愛は即國なり、主は之を使徒等と奧密に約し、其國に於て之を食はんことをいへり。けだし言へり「我が國に於てわが席に飮食せん爲なり」〔ルカ二十二の三十〕と、是れ愛を示すにあらずして何ぞや。愛は食と飮とに代りて人を養ふが爲に充分なり。是れ人の心を樂ましむるの酒なり。〔聖詠百三の十五〕此酒を飮む者は福なる哉。不節制者は之を飮みて慚愧し、罪人は飮みて碍路を忘れ、大酒者は飮みて禁酒者となり、富者は飮みて貧者たらんを願ひ、貧者は飮みて希望に富み、病者は飮みて强健になり、無智者は飮みて聰明になれり。

大船と小舸となくんば大海を渡る能はず、此の如く、畏れ無んば何人も愛に達する能はざるなり。我等と心の樂園との間なる臭海は畏の舵師ある悔改の小舸に乘りてのみ渡るを得ん。しかれともし此の畏の舵師等は此世の海を越えて神に移るべき悔改の大船を御せずんば、此の臭海に溺れん。悔改は大船なり、畏は其舵師にして、愛は即神聖なる湊なり。是故に畏は我等を悔改の大船に引入れ、生命の臭海を渡りて、愛なる神聖の湊にみちびくなり。凡て勞苦して悔改を任ふ者は此湊に到着せん。而して愛に達する時は我等は神に達すべく、我等が旅行は終を告げて、父と子と聖神のまします彼處の世界の島に至らん。彼に光榮と權柄は歸す、願くは我等をも其畏を以て彼の光榮と愛とに當るものとなさんことを。「アミン」。

第八十四　說教

知識の尺度と信仰の尺度は如何程大なるか。

信仰に先だつ知識と信仰を以て生ぜらるゝ知識とあり。信仰に先だつ知識は天然の知識にして、信仰を以て生ぜらるゝものは靈的知識なり。善を惡より別つ天然の知識あり、名づけて天良是非の心といふ、これにより學問を待たずして善と惡とを天然に識別するなり。此の是非の心を神は靈智ある天性に賦與し、學問の助によりて彼は成長と增加を受くるなり之を有せざらん人はあらず。是れ聰明なる靈魂に賦與せられし天然認識の力にして、靈中に不斷活動し、善と惡とを識別するなり。此力を奪はれたる者は靈智ある天性より下くなれども、之を有する者に於ては靈性は緊要なる狀態にあり、ゆゑに彼等は靈智ある人間の尊敬の爲に神を以て天性に與へられしものを一も害はれざるなり。善を惡より別つ此の認識の力を失ひし者を豫言者は責めて言へり、曰く「人は貴きに在りて知らず」〔聖詠四十八の十三〕。靈智ある天性の貴きは善を惡より識別する分別心にありて、之を失ひし者を豫言者が靈智と理性とを有せざる無智の動物に比するは當然なり。此の分別心を以て我等は神の路を看破するを得べし。是れ天然の知識なり、彼は信仰に先だち神に至るの路程なり。之を以て我等は認識を求め得て、善を惡より分別し、信仰を受けん。而して人が此の萬物を造りし者を信ぜざるべからざる所以と其誡命の言を信じて之を實行せざるべからざる所以とは、天性の力も之を證明して、之を信ずるにより神を畏るゝの心は生ずべく、信仰が行爲を伴ひて漸々に活動し來る時は、靈的知識を生ぜん、これ我等信仰により生ずと言ひし所のものなり。

天然の知識即我等が性に神より賦されたる善と惡との分別心は自然に我等を勸誘して、萬物を存在せしめたる神を信ぜざるを得ざらしむるなり。然して信は我等に畏を生ぜしめて、畏は我等を悔改と其行爲とに要するなり。かくの如く、人には靈的知識、即奧義を感ずるの感覺を與へられて、此感覺は眞實なる直覺の信念を生ずるなり。かくの如くなれば靈的知識は單に一片の裸體的信念より生ずるには非ずして、却て信念が神を畏るゝ心を生みて、神を畏るゝ心と共に活動し始むるときは、此の畏の作用により靈的知識の生ずることは、聖金口イオアンの言ひし如し、曰く「誰か神を畏るゝ心と思想の正しき狀態に相副ふの意志を受る時は、彼は神秘なるものゝ啓示を直に受けん」と。彼は靈的知識を名づけて神秘なるものゝ啓示とはい

へり。

しかれども神を畏るゝ心が此の靈的知識を生むにはあらず。げだし天性に賦與せられざるものは生ずることも能はざればなり。反つて此知識は神を畏るゝ心の作用に恩賜として與へらるゝなり。神を畏るゝ心の作用を注意推究する時は、其作用は即悔改なるを發見すべくして、靈的知識は生ずるなり。これ我等先にも述べし如く、此聰質を我等は洗禮に於て受れども、其賜物は悔改によりて受けんといへるもの是なり。悔改により受けんと我等が言ひし此賜物は是即靈的知識にして、此賜物は畏の靈能により與へらるゝなり。靈的知識は神秘なるものを感ずるなり。若し誰か此の見えずして大に超絶する所のものを感ずる時は、其感は之により靈的知識の名をうくべくして、此の感知により最初の信仰に反對せずして却て其信仰を堅むる他の信仰は生ずるなり。之を名づけて直覺的信念といふ。此時に至る迄は聽覺なりしも、今は直覺なり、而して直覺は聽覺よりは更に確實なり。

是れ皆善なるものと惡なるものとを識別する天然の知識より生るゝものにして、此知識は道德の良善なる種子たることは、我等既に言へり。然れどもし此の天然の知識を自己の放蕩なる望みを以て暗ます時は、此のすべての幸福は奪はれんそれ此の天然の知識と與に之に隨て人に生ずるものは、良心の不斷の刺戟と、死の間斷なき記憶と、世を去るに至る迄續く或る苦しき配慮とにして、其後生ずるものは悲哀なり、煩悶なり、神を畏るゝ心なり、天然の羞恥なり、既往の罪の爲に哀むなり、緊要なる注意なり、一般の行路を忘れざる記憶なり、あらゆる人性の通過せざるべからざる此門に安んじて入らんことを涙を以て神に願ふなり、世を輕んずると、德行の爲に烈しく奮闘することなり。これ皆天然の知識を以て求め獲らるゝなり。故にすべての人は其行を之と對照すべし。げだし人が之を獲たるを認めらるゝ時は、是即人は天然の路に由りて行くを示すなり。然れども之を超越して愛に入る時は、天性より上に立ち、奮闘、畏懼、困難及び疲勞はすべて人の爲に終を告ぐるなり。親よ是れ天然の知識の結局にして、自己の放蕩なる望みを以て此知識を暗まさゞる時は、此を自己に發見すべくして、我等を此のすべてのものより免れしむる愛に達するに至る迄は、此階段に止まらん。すべての人は此の我等が逃る所のものに據り、之と對照して己を試むべく其進行は何れにあるか、天然に反對するものにあるか或は天然に超越するものにあるかを試むべし。此の進行の方針によりすべての人は其一生を如何に統治

せらるゝを明白迅速に看出すを得ん。されど我等が定めたる如く、人は謂ゆる天然と適合するものに於て顯れず、又天然に超越するものに於てもあらはれざる時は、彼は天然と反對なるものに衝落されしものなること明なり。我等が神に光榮は世々に。アミン」

第八十五　說教

謙遜にして聽く者に愛を以て告ぐる有益なる教訓。

神の恩寵によらずんば善意は心中に降り來らざるべし。誘惑と實驗との爲にあらずんば惡念は靈魂に近づかざらん。自己の劣弱の程度を識るに達したる人は謙遜の完全に達せん。不斷の感謝の爲に惹起さるゝ心は人に神の賜を誘引せん。常に心中に惹起さるゝ不平なる思は靈魂に誘惑を被らしめん。主は人間のすべての劣弱を忍耐すれども、常に不平を懷く人をば寛容せず、敎訓なくして置かざるなり。如何なる知識の照明にも遮ざかる靈魂はかくの如き不平なる思に沈まん。常に感謝する口は神より祝福を受くべくして、心が感謝に止まるならば恩寵は之に降らん。謙遜は恩寵に先だてども、自負は罰に先だつ。驕傲なる者には誘惑に陷るを許され、勉

勉なる德行を以て自から高ぶる者には迷謬に陷るを許さる。然して自己の賢明に誇る者には暗黑なる無智の網に陷るを許さるゝなり。

神を忘れざる記憶に全く遠ざかる人は、近者に對する惡しき記憶の爲に擾さるゝ思を心中に懷かん。神を記憶する時にすべての人を尊敬する者は、奥密に神の指麾に依りすべての人の助を己れに得ん。侮辱せられし者を保護する者は神を己の保護者と爲さん。手を近者を助くるに伸ばす者は、自己を助くるに神の臂を受けん。兄弟の瑕瑾を訴ふる者は、神を己の原告者と爲す。兄弟を密室に匡正する者は、自己の瑕瑾を愈さん。之に反して人を集會の前に訴ふる者は、己の疵の痛苦を大にす。兄弟を窃に療する者は、自己の愛の力を顯然なるものと爲す。之に反して彼を其友の目前に辱しむる者は、自から猜忌の力をあらはす。窃に證責する友は賢明なる醫なり。之に反して衆の目前に療する者は寳に罵詈者なり。同情の徵候はすべての負を赦すにあり、之に反して思の惡しき狀態の徵候は陷りし者と抗論する是なり。康健者たらしめんとの目的を以て敎誨を爲す者は愛を以て敎誨す、之に反して報復せんと欲する者には愛あらず。神は愛を以て敎誨すれども、報復せず。然り之あらざるなり反つて其像を愈すが爲に監守し、怒を藏して時を待たざるべし。愛の此方法は公

正の結果にして、報復の情に傾かざるなり。義なる賢哲は神に匹似す。けだし人を罰するは全く罪の爲に報復するには非ずして、或は其人の改悛せんが爲、或は他の人々の恐れんが爲なり、此の如くならざる罰は敎誨にあらざるなり。報酬の爲に善を爲す者は速に變ずるとも、其思は高ぶらすして、德行より離れざらん。神に應分の報を爲すが爲に己の智を磨く者は、靈を以ても體を以ても謙遜の深きに降らん、けだし人は認識に近づく以前には其行狀は或は上り或は下る、しかれども認識に近づくならば、全く高處に擧げられん、されども高められるゝに至る迄は、其認識の上昇は完全に達せずして、彼の光榮の世の來らざる間は、人は其充分の富をうけざるなり。けだし人は神の前に成全なるほどは神の跡に追隨すべくして、眞實の世に於て神は其顏を彼にあらはさん、されども其如何なるを示すには非ず。けだし義人は神を見るに入る迄は鏡を以て像を見る如し、されど彼處に於ては現實の顯はるゝを見ん。枯れたる薪に燃着たる火は辛うじて消し得ん。もし世を棄てたる者の心に神の溫媛の顯はれ降るあらば、其燃着は消えずして、溫熱は火より烈しからん。酒の力の肢體に入るあらば、心はすべてに嚴肅を忘れん。神を忘れざる記憶も靈中に牧地を占むるときは、すべて有形なるものに於る記憶を滅す。靈的聰慧を獲たる智は艤裝せし船に海中に値ふ人と同じ、之に乘るときは、此世の海を出帆して、來世の島に到らん。此世に於て來世を感ずるは海中に小島を見付ると同じ、彼に近づく者は最早此世の現象の波間に勞苦を爲さゝるなり。

商賈は仕拂を終るときは、急ぎて己の家に歸らん。修道士も其勤勉の時の殘る間は、此身と別るゝを哀めども、時を購ひ得て、聘質を受けたるを心に感ずる時は、來世を慕ふ、商賈は海中にある間は、其肢體戰慄す、恐らくは波浪起りて其營業の望を水底に沈めんと。修道士も世に居る間は、生涯恐を抱く、恐くは暴風起りて少より老に至る迄辛苦したる己の事業を亡さん。商賈は堅き陸地に注目し、修道士は死期に注目す。

航海者は海中を駛行するときは星を望み、湊に達するに至る迄は星に依りて船の方向を定む。修道士も祈禱に注目す、何となれば祈禱は彼自己を矯正して、其進行を彼の湊に向はしめ、其生涯は旬時の祈禱により左右せらるればなり。航海者は船を繫ぐべき島嶼を發見し、彼處に路用を辨じて、其後他の島嶼に向ふ。修道士の進行も、此生命に居る間は此の如し。修道士は島嶼より島嶼（即認識より認識）に移り、此の島

嶮(即認識)の轉換によりて大に進歩し、海より出でゝ其進行を彼の眞の都に達せしめん、けだし彼の都の住者は復た貿易を營まずして、各々己の富に安んずるなり。此の空しき世に居り、此の大海の中にありて、其貿易を亂調に至らしめざる者は福なり。其船の破壞せず、喜んで湊に達する者は福なり。

泅者は眞珠を發見するに至る迄は、衣を脫して、海底に沈む。賢なる修道士も眞珠なるイイススハリストスを自己に發見するに至る迄は、すべてを脫して、生命を送る。而して彼を發見するときは、最早彼と共に世に存する何物をも求めざるなり。眞珠は庫中に貯へらる、修道士の樂も默想に於て守らるゝなり。童貞に有害なるものは民の集會に於て種々の人々と共にするにあり、修道士の心に有害なるものは衆人と談話するにあり。鳥は何處にありても己の巢に向ひ、彼處に於て雛を孵化す。思慮ある修道士も己の居處に急ぎ、自から生命の果を造らん。蛇は全身を擊摧がるゝも其頭を守る。賢なる修道士も生命の原始なる己の信仰を何れの時にも保護す。雲は太陽を蔽ひ、言の多きは祈禱的直覺を以て輝き始めたる靈魂を暗ます。博學者の言に依るに「エロデイ」と名づくる鳥あり居る所の地より遠ざがり曠野に達して、彼處に住むときは、欣々として喜ぶといふ。かくの如く修道士の靈魂も、人々より遠ざかり幽靜の地に來り居る時は、天の歡喜を己れに感じ、彼處にありて己が出發の時を待たん。傳に言ふ「シレーナ」と名づくる鳥あり、凡そ其好音を聞く者は、心を奪はれざるなく、彼を追ふて野に徘徊しつゝ、其鳴く聲の愉快なるが爲に己の生命をも忘れ倒れて死せんとするに至ると。是れ靈魂に起る所のものを形容するを得べし。靈魂が天上の愉快を感ずるときは、感覺を以て心に傳へらるゝ神の言の好音により、靈魂は全く此愉快を追ひ、突進して身體の生命を忘るゝに至る。ゆゑに身體は其欲望を奪はれ、靈魂は此生命より擧げられて、神に到らん。

樹は先づ酋葉を脫せずんば、新葉を生ぜざらん。修道士も從前の行の記憶を其心中より投出さずんば、ハリストスイイススに於る新しき果と葉とを產せざらん。風は樹上又は田中の果實を肥さん、神の爲の配慮は心中の果實を肥す。眞珠の生ずる貝中には、人々言ふ如く、電氣を以て火花の如きもの生出し、空氣によりて貝は此物質を己れに受く、然れども其時に至る迄は尋常の肉にて存すと。修道士の心も、通曉力を以て天の物質を己れに受るに至る迄は、尋常にして、其貝中に慰藉の果を結ばざるなり。

鼻孔を舐る犬は、己の血を飮めども、其血の甘きにより、其害を感せず。虛誇を嗣飮す

るを好む修道士も、自己の生命を飲みて、時々感ずる甘味に因り其害を自覺せず。世の名譽は水に覆はれたる海中の暗礁なり、船底を之に觸れて水を滿さるゝに至る迄は、航海者の爲に知られず。虐謔も人を溺らし亡すに至る迄は亦之に同じ。神父等は此事を言へり。靈魂の曾て避け且脫したる慾念は虛謔を好む靈魂に復歸すと。小なる雲は太陽の周圍を蔽へども雲の過ぎし後太陽は特に煌々と輝かん。小なる憂愁も靈魂を暗ませども、其後大なる喜は成らん。

神聖なる書中にある所の奥妙なる言には、祈禱と神の助を願ふことなくして就くなかれ。乃ち言ふべし、主よ、彼に含有する力を受るを我に得しめ給へと。祈禱は神聖なる書中に述べられし眞正なる旨趣に於る關鍵と思ふべし。心を以て神に近づかんと欲する時は、先づ身體の勞苦を以て彼に愛をあらはすべし。生涯の始は此勞苦に托せらるゝなり。げだし靈用の缺乏と、食の或る種類に己を慣らすとを以て心は神に多く接近せん、かくの如く此接近は身體の行爲の後に生ずるなり。ゆゑに主も之を以て完全の基礎となし給へり。閑散は心の昏迷の始めと思ふべし。談話の爲に會合するは、昏迷に昏迷を重ぬるなり。前者は後者の爲に緣由たり。有益なる談話も度なきときは昏迷を生ずるならば、況して無益の談話に於てをや。靈魂は神を畏れ心を以て保護せらるゝに拘はらず、續く談話の多きにより卑うせらるゝなり。終に心の昏迷は行爲に順序なきより生ず。

行爲に於るの節度と或る規則は智を照して擾亂を生じて昏迷により擾亂は再び生出せらるゝなり。平和は善き順序の結果なり、平和によりて、靈智と俗智との差異を其靈中に感せん、何となれば靈智により靈魂を占領するものは沈默にして、俗智により占領するものは思の高超の泉なればなり。されば第一の智慧を得たるにより、汝は其すべての思想を主宰する大なる諏遜と温良と平和とに滿たさるゝなり。此時より汝の肢體にも擾亂と騷暴は熄みて、沈默の至るあらん。然れども第二の智慧を得ること共に其念慮に驕傲を受け、得もいはれざる奇怪なる思想と、智の擾亂と、感情の無恥と、高慢とを受けん。肉體上の事に束縛せらるゝ人は、祈禱に於て神の前に勇氣を有せんと思ふなかれ。貧客なる靈魂は容智を奪はるれども、憐憫なる靈魂は精神を以て智慧附けらるゝなり。

油は燈の光る爲に必要なる如く、矜恤も心中に知識を養ふ。心に神聖なる賜を受く

る爲の關鍵は近者を愛するを以て與へらるべくして、之と同く心を身體の鏈鎖より脫する程は其前に知識の門は開かるゝなり。靈魂の世より世に移るは通曉力を受けしなり。近者を愛するは、もし其慮を以て我等を神を愛するより引離さずんば、如何に美にして且賞讃すべきや、我等が靈的兄弟と談話するは、もし其時に神と會話するを守らるゝならば、如何に愉快なるや。終に之が平稱を保たるゝ間は、此事を慮るも可なり、即神秘なる練習と行爲と神と不斷會話することを此行爲により失はざるを得る間は、之を慮る可なり。前者を確守するは後者の妨とならん。智は二の談話を爲す爲には不充分なり。世の人々と面會するは神に屬する事の爲に之を避けたる者の心に亂れを生せん。靈的兄弟と不斷談話するさへ害あるならば、況して世の人々をばたゞ遠くより觀望するのみなるも害あらん。五感が或物と接するは身體の働の爲には妨とならず。しかれども神秘なる練習に於て喜びを穫ることゝ思の鎭靜により果實を穫る如くせんと欲する者には、現象無くして一の音響のみなるも心の平安を援さん。內部に於て死者の如くならんことは、五感を不動作ならしめずんば、能はざるべし、身體の生活は五感の覺醒を要すれども、靈魂の生活は心の覺醒を要す。

靈魂は天然に身體より愈さる如く、靈魂の働も身體の働に愈れり。元始身體の造成は之に生命を嘘入るゝに先だちし如く、身體の働も心靈の働に先だつ。易はらずして常に落ちる弱き點滴は頑石を穿つ。

靈的なる人の汝に復活する時の近づく時は、一切の爲に死者の如くなることは汝に起るべくして、受造物とは比す可らざる汝の靈魂に喜は燃え、汝の思念は汝の心中の愉快を以て汝の內部に閉されん。之に反して世が汝に復活するときは、思の高超、陋劣不定なる念慮は汝に加はらん。世とは心の高超を生ずる慾を謂ふ。慾が生じて成熟に遂する時は、罪となりて人を殺さん。母なくして子の生れざる如く、思の高超なくして慾は生せず、慾と對話するなくんば罪の成るあらざるなり。

我等が心に忍耐の成長するあらば、是れ我等は愚痴の恩寵を密にうけたる徵候なり。忍耐の力は心を管領する喜ばしき意思より強し。神た於る生活は五感の衰なり。心が活くる時は五感は衰ふ。五感の復興は心の死滅なり。ゆゑに五感の復興するあらば、是れ心が神の爲に死したる徵候なり。良心は人々の間に行はるゝ德行よりは正しきを受けず。

第八十五　說教

誰か他の人々の爲に行ふ所の德行は靈魂を淨むる能はざるべし、何となれば事は神の前に報酬視せらるればなり。然れども人が自己に行ふ德行は完全なる德行に算へらるべくして、彼をも此をも達せん。即報酬視せらるべく、又淨潔をも生せん。故に前者に遠ざかりて後者に從ふべし。後者を慮らずして前者を存するは、神より明に離るゝなり。しかれども後者はたとひ前者あらざるも自から前者を補はん。

安息と閑散とは靈魂の爲に滅亡にして、之を害すること魔鬼より大なり。身體の弱なるを强ひて其力に超ゆる事を爲さしめんとする時は、汝の靈魂は昏迷に昏迷を加へて、之に大なる亂れを入れん。之と相反して、身體の强壯なるを安息と閑散とに委するならば、此の身體の中に居る靈魂に凡その弊病は成らん、されば若し誰か善を强く願望するも善に對して有する意思を速に奪はれん。靈魂が希望の喜びと神に關する樂みに醉はしめらるゝ時は、身體はたとひ薄弱なりとも、哀みを感せざるべし。げだし二倍の重きを負ふて力に乏しからざるのみならず、併て自から樂むべくして、たとひ薄弱なりとも、心靈の樂みに助けん。靈魂が彼の精神の喜びに入るときはかくの如し。

もし己の舌を守らば、兄弟よ、汝に心の感動の思徶を神より與へらるべく、之により

汝は己の靈魂を悟りて精神上の喜に入らん。されど汝の舌が汝に克つならば、汝に言ふ所のものと對照せよ、汝は如何しても昏迷より救はるゝ能はざるなり。心が汝に淨からずば、口なりとも淨からしめよと願なるイオアンは言へり。

人を善に向はしめんと欲する時は、先づ肉身上彼を安んせしめ、愛の言を以て彼を尊敬すべし。げだし汝によりて見んとする肉身上の幸福と尊敬との如く人を恥に傾かしめ其弊病を棄てゝ善良に向はしむるものはあらざるなり。誰か神の爲に苦行に入る程は其心は祈禱に於て勇氣を得ん。されど人が多くの事に引かるゝ程は、神の助を失はん。肉身上の缺乏を憂ふるなかき去ればなり。死を恐るゝなかれ、何となれば死は之を汝より全く除にすべて備へたればなり。

彼に光榮と權柄は世々に歸す。アミン」。

第八十六　說教

心が靈界に進歩する爲、神の照管に依り我等に喚起せらるゝ、天使的行動。

神の仁慈に依り人に入りて靈魂を生命にみちびく第一の意思は此の人性の出發に關して心中に落る意思なり。此思想に從ひ自然に世を輕んずべくして、人を生命にみちびく種々樣々なる善き行動は之により始まらん。人に伴ふ神聖なる力の人に生命を顯さんと欲するときは、此を人に置くこと、恰も或る基礎の如くなるべし。ゆゑに人は我が述べたる此意思を浮世の關係又は空論を以て之を己れに消滅せずして靜默を以て之を成長せしめ、直覺を以て之を守りて、之が爲に占領せらるゝならば、此の意思は人をみちびきて何人も言にて形容する能はざる深き直覺に至らしめんサタナが此思想を嫉視し、全力を擧げて攻擊するは、之を人に滅さん爲なり。ゆゑにもし能すんならば、全世界の國をも人に與へて、たゞ人を此の如きの思想より引離し之を其の心に消滅せしめんとす。予が言ふ如く、もし能するならば、彼は好んで此事を爲すならんげだし此思想が人に存するときは、人の智は最早此の誘惑の地に立たずして、サタナの人に對する奸計は之に近づく能はざること彼れ狡者の知る所なればなり。しかれども知るべし是は其想起を以て我等に死の記憶を喚起する最初の思想を言ふには非ずして、事の充滿につきていふ即死の離れざる記憶を人に入れて人が之を思念するにより、不斷慙嘆の狀態に立てらるゝものにつきて言ふなり。第一の思想は或る肉體上に屬するものなれども、此後者は靈神上の直覺と奇異なる恩寵なり。此直覺は清明なる意思を衣る。ゆゑに之を有する者は此世の事の穿鑿には更に立入らずして己が肉體の爲に繫がれざるなり。至愛者よ、此の眞實なる直覺を少時の間に神は人々に賜ふならば、こは此世に於て相傳授受すべきに非ること全く當然なり。此直覺は天然が抗し得ざる鏈鎖となるべくして、此の冥想を其心に受る者は各自個々の練習に比すれば更に最有力なる神の恩寵を以て受くるなり。而して此恩寵は中等の階段にありて心の正しきにより悔改を願ふ者に與へらるゝなり、即此世より遠ざかりて最善なる生命に移るに眞實適當するを神に知らるゝ者に神の善なる旨によりて與へらるゝものなり。然して此恩寵は彼等が遯世寂寞の室に於て彼等に成長し且止まらん。我等は祈禱

に於て之を願ひ、之が爲に長き儆醒を成して、涙を以て主に祈禱せん、何物にも比する能はざる此恩寵を我等に與へ給はんが爲なり、さらば此世の辛苦の中にありて復た弱わることあらざらん、これぞ人に於て義の充滿を行ふ生命の始めなる。

第八十七　說教

人に於ける第二の行爲。

此後人が善良なる生活を善く經過して、悔改の階段に昇る時は、他の行爲を生ずべくして、靈的認識の愉快を嘗むる恩寵を上より受くるときは、直覺と其行爲を味ふに近づかん、此行爲の始は左の如し、即人に於る神の照管を人は先づ信認すべく、造成者に對する愛を以て照さるゝと共に靈物の整然たると靈物に於る神の大なる慮とに驚嘆する是なり、此よりして神聖なる愉快は人に起り神に對する愛の焰は心中に燃えて、靈と形との慾念を燒盡さん、あらゆる受造物の性とすべて人が遭遇する所の對象とを聰明に熟考し、之を研究して、精神を以て判斷するならば、人は直に此力を己れに感知せん、ゆゑに人は其時始めてかくの如き有力神聖なる勉勵と善なる良心とにより、神聖なる愛を喚起せられて、俄に其愛に酩酊すること、酒に酩酊する如くなるべく、其肢體は弱わり、其思は駭愕の中に在りて、其心は神に捉へ去られん、かくの如くなれば手が述べし如く人は酒に酩酊したる者の如くなるべし。

而して內部の感情の強まるに隨ひ、其直覺も強まるべくして、人は善なる行爲と己を守ると、讀經及び祈禱に時を送ることに盡力する程は其力は人にます〳〵固くなりて確めらるゝなり、ゆゑに兄弟よ、時として人は此體を負ふことをも自から記憶せずして、此世にあるや否をも知らざるに至らんことは全く當然なり。

是れぞ人に於ける靈的直覺の始めなる、是れぞ智力の爲にすべての默示の始めなる、此により智は成長して神秘なるものに固めらるべく、之を以て人の天性に超越する他の天啓に昇せられん、之を略言すればすべて聖人が此世に於て受る所の神聖なる直覺と、靈的默示と、すべて人性が此生命に於て僅に知るを得る賜と默示とは、彼の天啓の手を以て人に傳へらるゝなり。これぞ我等が造成者を以て入れ給ひし我等の感應の根基なる、此の善良なる種子の人の靈中に落ちるや、守りて之を長せしめ、一時なるものを想ふ妄想と、思の高超とにより、之を自から濫費せざる者は福なり、我等が神に光榮は世々に歸す「アミン」。

第八十八　說教

光と暗との更迭は何れの時にも靈中に起る事、及び靈魂は右にも左にも傾く事。

至愛者よ、我等は祈禱の時、己の靈魂を省み、聖詠を誦するに當りて我等に專心なる祈禱的直覺ありや否やに注意せん。此直覺は眞實なる默想の結果なれば、昏迷の中に在る時も、我等に特別の理由あるにあらずんば援されざるべし。これ神の照管に歸すべきものにして、獨り神にのみ知らるゝ源因により行はるゝなり。けだし我等が靈魂は他時には非常に疲れ苦むこと、宛ら波浪の中に在る如く、聖書を讀み或は奉事を行ひ、如何なる事に如何樣に着手するをも人は知らずして、昏々迷々の中に在ることあらん。かくの如き者は事を廢棄して、彼に近づくことをも許さゞることを度々之ありて、こは一時の變化なることをも、人が平安に居ることをも、全く信せざることあるべし。此の時は失望と畏懼とに滿たされ神に依賴すると神を信ずるの穩藉とは心より全く拋擲せられて靈魂は疑圍と畏懼の念に全く滿たさるゝなり。此時是の波浪の中に在て試惑を大に忍耐したる者は、此事の終りに如何なる變化の生ずるを實驗によりて知らん。さりながら神は靈魂をかくの如き狀態に盡日棄て置かざるべし。何となれば、ヘリステアニンたる望を失ふべければなり。反て速に逃るべき法を備へん（コリンフ前十の十三）。ゆゑにもし此昏迷の援々たる狀態が更に續くときは、其生命の變化を待つべし。

然れども人よ、予は汝に注意して勸諭を與へん、もし汝は己を制して祈禱に其の面を俯伏する力を有せざらんときは、汝の爲に此昏迷の時の過ぐるに至る迄、外套を首に被りて臥すべし。慮中より出ることなかれ。智力上の生活を送らんを特に願ふて其進行により信仰の慰安を尋ぬる者等は大なる試惑に遇はん。故に此時彼等を大に苦め且疲らすに心の動搖を以てし、次で謗瀆の念は屢々起るべく、時としては復活に於るの疑と他の我等言ふべきにもあらざることの人に生ずるあらん。これ皆我等實驗を以て屢々確知せしもの、ゆゑに衆人を慰めんが爲に此の奮鬪を記しぬ。

肉身上の事に從事する者は、此等の試惑より全く免れん。彼等にもすべての人に知らるゝ他の煩悶の生ずることあれど、其狀態は此等の試惑と異なるあり。此等の試

惑に苦む者の健康と其療方とは默想より流れ出でん。是ぞ彼の爲に慰安なる。然れども他の交際に於ては決して慰安の光を受けざるべく、人々の集會を以ては愈されざるべくして、一時は安んせしめらるゝも、其後此煩悶は更に大なる勢力を以て人に起らん。ゆゑに彼の爲に緊要なるは、此事に實驗を有する敎化者にして、彼はすべて必要の場合には敎へ且固めん。然れども常に敎ふるには非ず。戸外に出でずして此を忍耐する者は福なり。げだし神父等の言ふ如く此事の後彼は大なる住所と勢力とに達すればなり。さりながら此奮鬪は一時に終るに非ず、又速に終るにもあらずして、恩寵もすべて俄に來りて心中に居るにはあらず、漸を以てするなり。而して彼此互に交代し、時として試誘あれども、時としては慰藉あるべくして、人はかくの如き狀態を以て存在して、其出發の時に至らん。しかれども全く之に遠ざかりて全く己を慰めんことは此世に於ては望むことも能はざるべし。げだし我等の生命の此世にかくの如く立てられて路を進行する者が之を忍耐するは神の自から喜ぶ所なればなり。神に光榮は世々に、「アミン」。

第八十九　說敎

神聖なる熱心の假面に覆はるゝ無智なる熱心の有害なる事、温良及び其の他の德性より生ずる助けの事。

嫉妬深き人は決して心の平安を得ずして、平安に遠ざかる者は喜にも遠ざかる。心の平安は完全なる康健と名づけらるれど、嫉妬は平安と反對するならば、惡なる嫉妬心を有つ者は最早重き病に苦むを示すなり。人よ、汝は一見したる所は他の病に對して自己の熱心を顯はす如くなるも實に己の靈魂の康健を奪へり。故に己が靈魂の健康を慮るの愈れるに如かず。もし弱き者を愈さんと欲せば、知るべし病者は謗責よりも深切に必要を有することを。しかれども汝は未だ他に助を爲さゞるに同時に自分を重く苦しき病に投ず。嫉妬は人々認めて賢明の一種とは爲さずして心靈の病の一と爲す。是即意思の有樣の狹隘なると大なる無知なり。神聖なる睿智の始めは謙遜と温柔とにして、こは大なる靈魂に屬し、人々の弱きを己れに擔はん。

けだし言ふあり、汝等強き者は弱き者の弱き柔の心を以て規すべし（ガラティヤ六の一）恒忍と平安を使徒は聖神の果實の中に計上す（ガラティヤ五の二十二）顯然たる肉身上の行爲に於る薄弱と無力との爲に哀みに滿たさるゝ心は此の肉體上の行爲をすべて自から補はん。心意の哀まざる肉體上の行爲は精神の入らざる身體と同じ。心は憂ふれども官能に自由を與ふる者は恰も身體は苦めども其口はすべて有害なる食物の爲に開く病者に類す。心は憂ふれども官能に自由を與ふる者は、恰も獨生の子ありて、之を自分の手にて漸々に堪る人に類す。心意の哀みは貴重なる神の賜物なり。之を適當に忍耐する者は恰も其肢體に聖なるものを滿たさるゝ人に似たり。舌に自由を與へて人々の是非を言ふ者は此恩寵を受るに當らざるなり。悔改と併せて人々と繁く交通するは、堕れたる樽に同じ。仁俠なる施與と共に其人の頰を批つは蜜に混せし劒と同じ。貞潔と併せて婦人と交際するは一家に獅子と羊と居るに同じ。神の前に憐のなき行は父の面前に其子を屠る人と同じ。心は薄弱にして他に路を敎ふる人に似たり。

一心に慈悲と公義とあるは、一家に神を拜する人と偶像に拜する人と居るに同じ。慈悲は公義と反對す。公義は精確なる尺度を一樣平均にす、何となれば各人に其受くべきものを與へて、報酬する時は一方に傾き或は偏頗あるを許さゝるなり。之と相反して慈悲は恩惠の爲に喚起せらるゝ哀みなり、されば衆人に同情を以て向ひ、惡しき待遇を受くべき者に惡を報いずして、善き報酬を受くべき者をば滿たして餘あらしむるなり。ゆゑに彼には公正の部分ありて、此には不正なる惡の分子あり。一家に枯草と火とあるを容さゞる如く、一心に公義と慈悲とあるを容さず。砂粒は金の大塊と平稱を有たざる如く神の公義の要求は神の慈悲に比して平稱を保たざるなり。

すべての肉體の罪に陷りしを神の照管と神の憐憫とに比すれば大海に投せられたる一掬の砂粒と同じ。渾々として湧出る泉は一掬の塵にて塞がれざる如く、造成者の慈悲も受造者の惡弊にて妨げられざるなり。怨を抱きて祈禱するは海中に種きて刈るを待つと同じきを示す。火の光明を妨げて上昇せざらしむることは能はざる如く、慈悲者の祈禱の天に上るを妨ぐるものはあらざるなり。水は傾斜の地に流るゝ如く、忿怒の勢力も我等が心意に近づくときは此の如し。心に讒遜を得たる者は世の爲に死せし者なり、而して世の爲に死者の如くなれる者は慾の爲に死者

の如くならん。近者の爲に心に於て死者の如くなれる者の爲に惡魔は死せん。これに反して嫉妬を求め得たる者は之と共に惡魔を斃さん。

神を畏るゝに由る謙遜あり、又神を愛するより起る謙遜あり。一は神を畏るゝによりて謙遜になり、他は喜によりて謙遜になるなり。神を畏るゝにより謙遜なる者に伴ふは何れの時にもすべての肢體の謙卑なると感覺の正しきと碎けたる心とにして、喜により謙遜なる者に伴ふは大なる正直と成長して潔ぐ能はざる心なり。

愛は恥を知らず、故に肢體に醜貌を加ふるを解せず。恥ぢずして己が尺度を忘るゝは愛の自然なり。吁大なる喜の湊よ、汝を得たる者は福なる哉。謙遜なる者の集會は神に愛せらるゝことセラフィムの會の如し。貞潔なる身體は神の前に貴重なることを貴ぶべし。何となれば彼は多くの害を止むればなり。腹を護るべし、然れとも親愛なり。

恭敬を以て其友に就くべし、かくの如く擧動するときは自己にも其友にも益を產す。何となれば靈魂は愛に托して謹愼の樽を自から振落すこと屢々之あればなり。會合を豫防せよ、何となれば彼は何れの時も有益なるに非ざればなり。集會に沈默を以て言ふべし、もし何か言ふあらば彼は直に汝の言に己が心に欲する如きの解釋を

を護るとと同うするなかれ、何となれば家裡の戰は外部の戰より輕ければなり。兄弟よ、身體を善良なる正しき狀態にみちびかずしても內部の念慮を止むるを得べしと信ずるなかれ。敵よりも習慣を恐れよ。習慣を自己に養ふ者は火に食を給する人と同じ、何となれば彼と此とに於る程度は養ふの多少にあればなり。もし習慣は何の衣服をか要求して其要求を遂げざるときは、他日其習慣の弱るを見ん。之に反して一たび其所望を遂ぐるならば第二次に於ては其習慣の特に大なる勢力を以て汝を攻擊するを見ん。

すべてに關し此事を記憶して忘るゝなかれ、何となれば預防の助は實際の助より重ければなり。誰か戲笑を好み人々に展示せんが爲に自から差出るを好むならば、其者は汝の爲に餘人にはあらざらん、何となれば柔弱に耽る習慣を汝に敎ふればなり。放蕩なる生活を送る者を欣ぐとして迎ふるなかれ、たゞ彼を憎まざらんやうに自から用心せよ、もし起たんを欲するならば、彼に手を與へよ。而して彼を得んことを死に至る迄心掛くべし。されど汝は未た無力ならば彼を治療するを避けよ、だし言ふあり、彼に汝の杖の端を與へよ云々。高慢にして嫉妬に苦む者には戒愼して言ふべし、もし何か言ふあらば彼は直に汝の言に己が心に欲する如きの解釋を

與へ、汝にある所の善なるものに於て他を躓かしむべきものを捜し、汝の言は彼の意中に變じて彼の病の爲に食とならん。誰か汝の前に於て其友を議し始むるときは面を俯せよ。かくの如く爲すときは神の前にも彼の前にも謹愼なる者と認められん。

困窮する者に物を與ふるときは、汝の顏色の喜ばしきは汝の與ふるに先だつべく好言を以て彼の憂を慰むべし。此の如く爲す時は、汝の深切は彼の心に汝のかくの如き賜與より貴かるべく、其肉體の要求より止にあらん。己の口を開き何人にか逆つて言ふあらんとする日には、たとひ其意思は汝をして明に當然なる建德の事を遂べしむるとも、神の爲に己を死せる者と思ふべく、其すべての行爲に於て無益なる者と思ふべし。げだし人は何の必要あり自己の家を毀ちて其友の家を修繕せんや。

或る病に苦む者の爲、及び身體或は心中に苦痛する善者或は惡者の爲に哀む日には、己を致命者と思ふべく、己を視ること、パリストスの爲に苦難を受くる者の如くすべく、表信者となるを賜はりし者の如くすべし。げだしパリストスの死せしは罪人の爲にして、義人の爲に非ざるを記せよ。視よ、惡なる人々の爲に哀み、義人よりも罪人に特に善を作すは、如何に大なる行なるか。使徒は此事を想起して、嘆美すべき行と爲す（ロマ五の六、八）。もし己の靈魂を自から義とするを得ば他の稱義を尋ぬるを慮るなかれ、汝に於て身體の清潔と良心の潔白とは汝のすべての行に先だつべし。げだし之なくんばすべての行は神の前に無益なり。すべての行はもし沈思と推究となくして爲さば、たとひ適當なりとも、無益と知るべし、何となれば神の義を歸するは思慮あるが爲にして、無思慮なる行動の爲にあらざればなり。

小なる義人は太陽の前の燈なり。怨を懷く者の祈禱は石上に種くなり。無慈悲なる苦行者は無結果の樹なり。嫉妬によりて責むるは誰當なり。狡猾者の讃美は蹉れたる網なり。恐なる勸諭者は盲目の番兵なり。考少き者と共に居るは心の惱みなり。善智者と共に話するは甘き泉なり。賢明なる勸諭者は希望の城なり。粗くして考少き友は害の藏所なり。恐者に從ふ智者を見んよりは、哀む婦人と共に居る者を見るは愈れり。惡しき品行の人と同居せんよりは、野獸と共に居るは愈れり。貪客にして飽く無き人と共に居らんよりは、猛鳥と共に居らん。好爭者たらんよりは、殺人者の友となれ。嗜甘者と共に交らんよりは、豚と共に交れ。何となれば豚の楷は貪食者の口より愈ればなり。驕傲なる者と共に居らんよりは、癩者と共に居れ。汝を逐ふも汝は

逐ふなかれ、汝を十字架に釘するも汝は釘するなかれ、汝を誚するも汝は誚するなかれ、惡に熱心なるなかれ。

訴訟するは「パリスティアニン」の生活の行にあらず、パリストスの教には此事の暗示だもわらず、樂む者と共に樂み、哀む者と共に哀むべし。けだし是れ清潔の徵なり。病者と共に悲み、罪人と共に涙を流し、悔ゆる者と共に喜べよ。衆人と共に親むべし、然れども自己の思は獨り居るべし。すべての人の苦難に關係を有つべし、然れども自己の身は衆人に遠ざかるべし。誰をも責むるなかれ、其品行の極めて惡しき者たりとも誹るなかれ。陷る者には己の衣を擴げて彼を掩ふべし。もし彼の罪を己れに取り、彼に代りて罰と恥とを自己に負ふ能はずんば、少くも寬忍せよ。彼を辱しむるなかれ。兄弟よ、我等庵の戸を出でざるを要するは人間の惡事を知らざらんが爲なるを知るべし。其時は自己の心の知らざるにより衆人を見て聖なる者及び善なる者と爲さん。されどもし或は責め、或は諭し、或は批判し、或は詮議し、或は罰し、或は罵るならば、我等が生活は何を以て城中の生活と異ならん。もし此を棄てずんば、野に居るより惡しき者ありや。もし心にて沈默せずば、少くも舌にて沈默せよ。もし其思想の齊整を保つ能はずば、感覺なりとも善く整へよ。もし汝は思にて獨ならずば、

身にてなりとも獨なれ。もし身にて勞する能はずば、思を以てなりとも憂へよ。もし立つて儆醒する能はずば、座し或は床上に在りて儆醒せよ。もし二日の間禁食する能はずば、少くも晩に至る迄禁食せよ。しかれども若し晩に至る迄之を能せずんば、飽食を戒めよ。もし汝は心にて無玷ならずば、身にてなりとも無玷なれ。もし必ずに哀まずば、少くも面に憂色を帶びよ。もし汝は和平を行ふ者たらずんば、叛亂を好む者となるなかれ。汝は勉勵者となる能はず、少くも意思の狀態は怠慢者の如くなるなかれ。もし汝は勝者たらずば、責を受く可き者に思ひ高ぶるなかれ。もし其友を誚する者の口を塞ぐ能はずば、少くも彼と交際するを戒めよ。

知るべし、汝より火を出して他人を燒かば、神は汝の火に燒かれたるもろ〳〵の靈を汝の手より尋ぬるを。たとひ汝は火を投せずとも投する者と同意して之を喜ぶならば、審判に於て彼の同類とならん。もし温良を愛するならば和平を務めよ。而してもし和平を賜はらば、何れの時にも喜ぶべし。才智を尋ねよ、金を尋ぬるなかれ、讒遜を衣よ、細布を衣るなかれ、和平を求めよ、されど國を求むるなかれ。

聰明ならざる者は讒遜を有せずして、讒遜を有せざる者は聰明ならず。讒遜ならざ

る者は平安ならずして、平安ならざる者は謙遜の德あらず。而してもし誰か喜ばずんば、彼は平安ならず。人の世を進行するすべての路に於て神に依賴するに近づく迄は、平安を見ざるべし。心に希望を生じて之を和げ、之に喜を灌ぐ迄は、心は勞苦と躓きの爲に平安ならざらん。祟拜せらるべくして聖德に滿たさるゝ口は、此を左の如く言へり、曰く「凡そ勞苦して重きを負ふ者は我に來れ、我れ汝等を安んせん」〔マトフェイ十一の二十八〕。其意謂ふ我に希望を託して、勞と恐怖とより安ずるを得んが爲に近づき來れと。

神に依賴するは心を高尙にすれども、地獄の恐れは之を挫折す。智の光は信仰を生み、信仰は希望の慰めを生む、然して希望は心を堅むるなり。信仰は靈智の顯現なり。ゆゑに智が暗くなるときは、信仰は隱れ、畏怖は我等を主宰して、我等の希望を絕たん。學問に依る信仰は人を驕傲と懷疑とより脫せしめず、されど靈智にあらはれて光り始むる信仰は之を脫す、之を名づけて眞理の認識又は顯現といふ。靈智の顯現により心が神を神の如く理會するに至る迄は、畏は心に近づかざらん。我等自から卑うするに至る迄昏迷に陷りて、此聰明を失ふを許さるゝ時は、我等を謙遜と悔改とに近づかしむる迄畏は我等にあらん。

神の子は十字架を忍び給へり。故に我等罪ある者は敢て悔改に依賴す。げだしアハウ王に於る悔改の一狀態さへ彼より怒を遠ざけしならば、我等が悔改の眞實なるは我等の爲に無益とならざるべし。眞實に居らざる彼に於る謙遜の一狀態さへ彼より怒を遠ざけしならば、況んや罪に陷りしを實に哀む我等よりこれを遠ざけざらんや。心の哀みはすべて身體上の行爲を補ふが爲に充分なり。

聖グリゴリイ言へり、神と體合し、其審判の事を常に慮る者は、恩寵の殿なり。神の審判のことを配慮すとは何を示すか、常に神を安んせしめんを尋ね、我等が天性の助けを以ては完全に達する能はざるを不斷自から哀み、自から掛念するの謂にあらずして何ぞやと。此事の不斷の哀を有すとは是れ其心に神を忘れざる記憶を不斷懷抱するの謂なることは、福たるワシリイの言ひし如し。放心せざるの祈禱は神に關する明亮なる意見を心中に生せん。而して神を忘れざるの記憶を我等自己に固むるは、是即我等に神を住ましむるなり。かくの如くして我等は神の殿とならん。視よ是れ即神を安んせしめんとの配慮にして、之を預備するが爲に心を碎くなり。彼に光榮は世々に。〔アミン〕。

第九十　說教

心ならざる惡なる念頭は、之に先だつ思念を等閑にして注意せざるより生ず。

或者は身體を固め、神に腦する行爲の爲に力を養ひて、其行爲に再び復るに至る迄は之に少許の安息を與へんを欲す。ゆゑに其安息の僅の日子の間にも己れに注意するを全く弱めずして、其行爲に再び歸るの意向さへ有せざる者の如く其靈魂を衰弱に陷れざるなり。或者は平安の時に敵箭の爲に敗らる、これ即意志の果敢なるにより靈魂に泥を集むる者にして、彼等は聖なる國に於て、即祈禱に於て己が不潔なる衣に被はるゝを見ん。是れ即神のことを思念すると祈禱の時に於て心中に起る所のものなり。怠慢の時我等が求めたるものは、我等が祈禱の時に我等を辱めん。心の謹肅は行爲よりも大に人に助く。然れども或事に於るの寬縱は安息よりも多く人を害す。家裡の戰は安息より起りて、人を狼狽せしむ。然れども人は之を斷絶するを得べし。げだし人が安息を棄てゝ行爲の塲所に歸るならば、直に此戰は人より一掃せられて退去せん。さりながら寬縱によりて生ずるものは衰弱と安息とによりて生ずるものゝ如くならず。人は安息の時に於て自由の範圍に在る間は、再び歸りて規則の定むる所に循ひ、己を治むることを得べし、何となれば猶自由の範圍にあればなり。しかれども自己に寬縱を與ふるならば、自由の範圍を脫せん。もし人は己れに注意するを全く棄てずんば、安息を與へざるものに心ならず強て從はしめらるゝことはあらざるべし。而して自由の境界を全く脫せずんは緊要に人を束縛して抵抗する能はざる程の事情は起らざるべし。

人よ、官能の跳れにも自由を與ふるなかれ、恐らくは自由に再び歸る能はざるに至らん。安息はたゞ小者に害あれども、寬縱は成人にも老人にも害あり。安息に繰りて惡しき念慮を得る者は、自己に注意するが爲に、更に歸りて高尚なる生涯に確立するを得べし。之に反して行爲に依賴し自己に注意するを怠る者は、高き生涯より放蕩なる生活に捉へ去らるゝなり。

或は敵國に於て敗らるれど平安の時に死する者あり、或は生命を己れに買ふを口實にして出で、靈魂に銳利なる刀を受くる者あり。或事に失脚すれども其に慣るゝ時は哀まざらん、げだし失脚は完全なる者にも度々之あれども、其に慣るゝは全く死なり。失脚の際に感ずる哀みは、我等が爲に恩寵により清潔なる行の代りとなる

べし。悔改に依賴して更に失脚する者は、詐りて神と行ふなり、死は知らず識らず彼を襲ふて、彼は道德の事を行ふの望ある時を得ざらん。官能に自由を與へん。

心の練修は外部の官能の爲に鏈鎖となるべし。もし誰か在昔の神父等に倣ひ、思慮を用ひて此に從事するならば、彼に生ずる三の現象により此事は明白ならん、即彼は肉體の利益に繫がれざると、美食を嗜まざると、彼より激怒の全く遠ざかることなり。左の三の現象即肉身上(大小に拘はらず)の利益と、怒り易きと、美食の爲に膀たるゝと此三の現象の地位を有する處に於ては(汝宜しく知るべし)一見したる所、人は古の聖人に似たりといへども、外部に屬するものに於る寬恕は人の內部に屬するものに於る不堪忍より生ず、其心の特別なる等閑より生ずるにはあらず。然らずんば肉身に屬するものを輕んずるも溫良を得ざるは何故なるか思慮を用ひて輕んずるが爲に、隨て生ずるものは、何物にも束縛せられざると、安息又は世の執着を輕んずること是なり。ゆゑにもし誰か用意して神の爲に損害を喜んで受るならば、彼は內部に於て潔し。もし身體上の不具の爲に何人をも輕んせずんば實に彼は自由なり。人の尊敬を表するを喜視せず、或は人より名譽を汚さるゝを怒らざる者は此生命に於て世の爲に死せしなり。思慮を守るはすべて何等の手段により、又は如何なる人爲の方法によりてか導かるゝ如何なる行爲よりも愈れり。

罪人を憎む心を養ふなかれ、何となれば我等は皆責を受く可ればなり。もし神の爲に起ちて彼に反對するならば、彼の爲に哀むべし。何の爲に汝は彼を憎むか。彼の罪を憎みて、彼の爲に祈るべし、罪人を怒らずして彼等の爲に祈りしパリストスに似ん爲なり。パリストスがイエルサリムの爲に泣きしを知らざるか(ルカ十九の四十一)魔鬼は我等を大に笑ふ、何の爲に罪人を憎むか、彼は汝と同じく不正なるが爲にあらずや。愛を有せずんば、汝の義は何處にかある何故汝は彼の爲に泣かざるか、却て汝は彼を窘逐す。或者は無知により己を罪人の行の裁判官の如く想て怒を發す。神の慈悲を傳ふるの傳宣者となるべし、何となれば神は汝不當なる者をも治むればなり、汝は彼に多く負ふあれごも彼の督促は汝に見えずして汝の成せる小なる行爲のために彼は大なるものを汝に報ゆればなり。神を名づけて汝に義なる者とのみ言ふなかれ、何となれば汝等の行爲を以て彼の公義は認むるを得ざればなり。

ダヲィドは彼を稱して義なる者といひ正しき者と言ふといへども神の子は我等に彼の特に慈愛なると恩惠に充滿するとを示せり。げだし言へり惡者と不法者とに

慈愛なりと〔ルカ六の三十五〕工人に報酬の事の章に於て、友よ我爾に義ならざることを爲さず、我れ此の後なる者にも爾と等しく與へんと欲す、我が善きによりて爾の目惡しきか〔マトフェイ六の十三、十四、十五〕といふを見るならば、何故神を義なる者とのみ稱するか。之と同く放蕩を以て富を費盡したる敗子の事の章に於て彼が表したる一悔改の爲に、趨りて其頸を抱き、彼に其悉くの富の權を與へしを見るならば、人よ何故神を義なる者とのみ稱するか。我等をして神に疑を容れざらしめん爲に他の何人も神につきて此事を言はざりしに、反つて神の子は自から神につきて此事を證明したりき。然らば神の義は何處にありや、我等は罪人なれど、ハリストスは我等の爲に死し給ひしこと是なり。神は斯程に憐憫ならば、神の變らざることをも信ずべし。

神を無慈悲なる者と稱せんとする此の無法を決して念頭に置くなかれ。神の性質の變らざるは死者の如し。神は其無き所のものを得ず、其有る所のものを棄はれず、或は受造物の如く增加を受けざるなり。神が始より有せしものは常に之を有して、無限に至るべきことは、福なるキリルが創世紀の解に於て述べし如し。彼言ふ神を愛するにより神を畏れよ、彼に加へられたる威名の爲にあらざるべし。汝は彼を愛さゝるを得ざるにより彼を愛せよ。未來に於て汝に何物をか與へんとする爲にはあらずして、現在我等が受けし物の爲なるべく、彼が我等の爲に造り給へる此の一世界の爲なるべし。げだし誰か彼に報ゆるを得るか。何の處に於て我等の行により彼に報ゆるか。誰か最初に彼を勸めて我等を存在せしめたるか。我等が彼を想起せざらんとき、誰か我等を彼に願ふか、我等の未だ存在せざりしとき、誰か此の我等の體を生命に喚起したるか。然のみならず意識は何處より塵中に落來るか、吁神の仁慈は奇なる哉。吁我等が神と造物主の恩寵は盡くべき哉。一切の爲に充分にして足らざる無きは、如何なる力なるか、我等罪人に於る我等の性を高めて新に之を造る無量なる仁慈は如何なるか。彼を頌讃する力は何人に足るか。彼の誡命を破りて彼を誹毀したる者を起し、無智なる塵を新にして、之を才智あるもの及び有言なるものと爲し、紛紜として無感覺なる塵と散漫なる感覺とをして聰明にして思惟する力に適する性と爲す。罪人は彼の復活の恩寵を想像するだも能はざるなり。我等を哀ましめんとする地獄は何處にありや。我等を種々に嚇着して彼を愛するの喜に勝つ苦みは何處にありや。我等を地獄より起して此の朽ちたるものに朽ちざるものを被らしめ、地獄に陷りし者を光榮に再造する彼の復活の恩寵に比して地獄は

如何なるか。

思慮ある者よ來りて慫慂せよ。誰か聰明にして奇異なる智力を有し、我等が造成者の憐憫を奇とするに適當なるか。罪人に報あり、義人の報に替へて彼は罪人に復活を以て報い、彼の法を蹂躙したる身體に替へて之に完全なる不朽の榮を衣す。我等が罪を犯したる後に我等を復活せしむる此憐憫は我等の未だ有らざるとき、我等を存在にみちびく憐憫よりは一層高し。主よ光榮は汝の無量なる恩寵に歸す。視よ、主や汝の恩寵の波は我を沈歿せしむるも、汝に感謝するが爲に我が意は已むなし、我等が生命を愛する慈善なる王よ、如何なる口を以て汝を頌讃せんか。汝は我等が成長のためにも、又我等を汝の光榮を知る認識に昇せて汝に造られし衆人を樂ましむる爲にも、此の二世界を造り給ひしにより、光榮は汝に歸す。光榮は汝に歸して今より世々に至らん「アミン」。

第九十一　說教

神を愛するより生ずる忍耐の事、及び忍耐により助を得らるゝ事。

人の此世を輕んじて、敬神の事に熱心する程は、神の照管は人に近づきて、人は照管の助を蒙むに感ずべく、之を了解するが爲に清潔なる念慮を人に與へらるゝなり。而してもし誰か此世の幸福を隨意に自から奪ふならば、之を奪ふ程は、神の憐憫は彼に伴ひて、神の仁慈は彼を扶けん。光榮は我等を右左より救ひて、すべて我等にわが生命を得るの機會を與ふる者に歸す。げだし生命を得んとするの望に勞れたる者等の靈魂を彼は心ならざる患難を以て善行に導かんとす。彼の貧者ラザリが世の幸福を奪はれ、其體は疵に壞られて、最悲慘なる二の艱苦を忍耐したりしは、其願に依るに非ず、然れども終に尊敬せられて、アウラアムの懷に置かれたりき。神は患難に於て神を呼ぶ者の哀む心に近し。もし時としては肉身上の剝奪又は其他の患難にかゝるありとも、之を忍耐するは、我等の爲に變じて助となること、たとへば醫が重き病の爲に肢體を截斷して健康を回復する如し。主が哀む者の心に大なる仁慈を